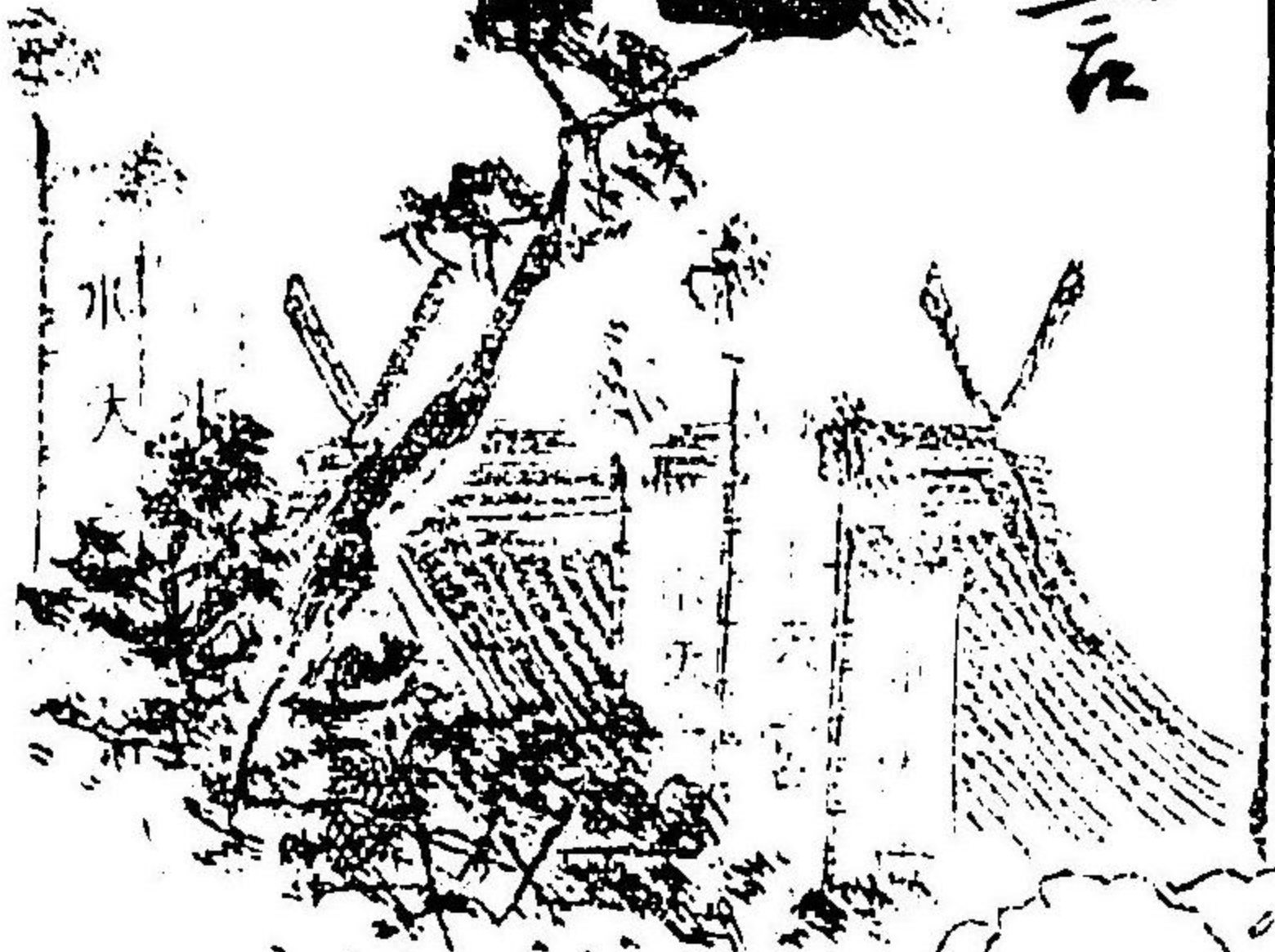


# 水天宮利生記

關東小六靈驗復能言

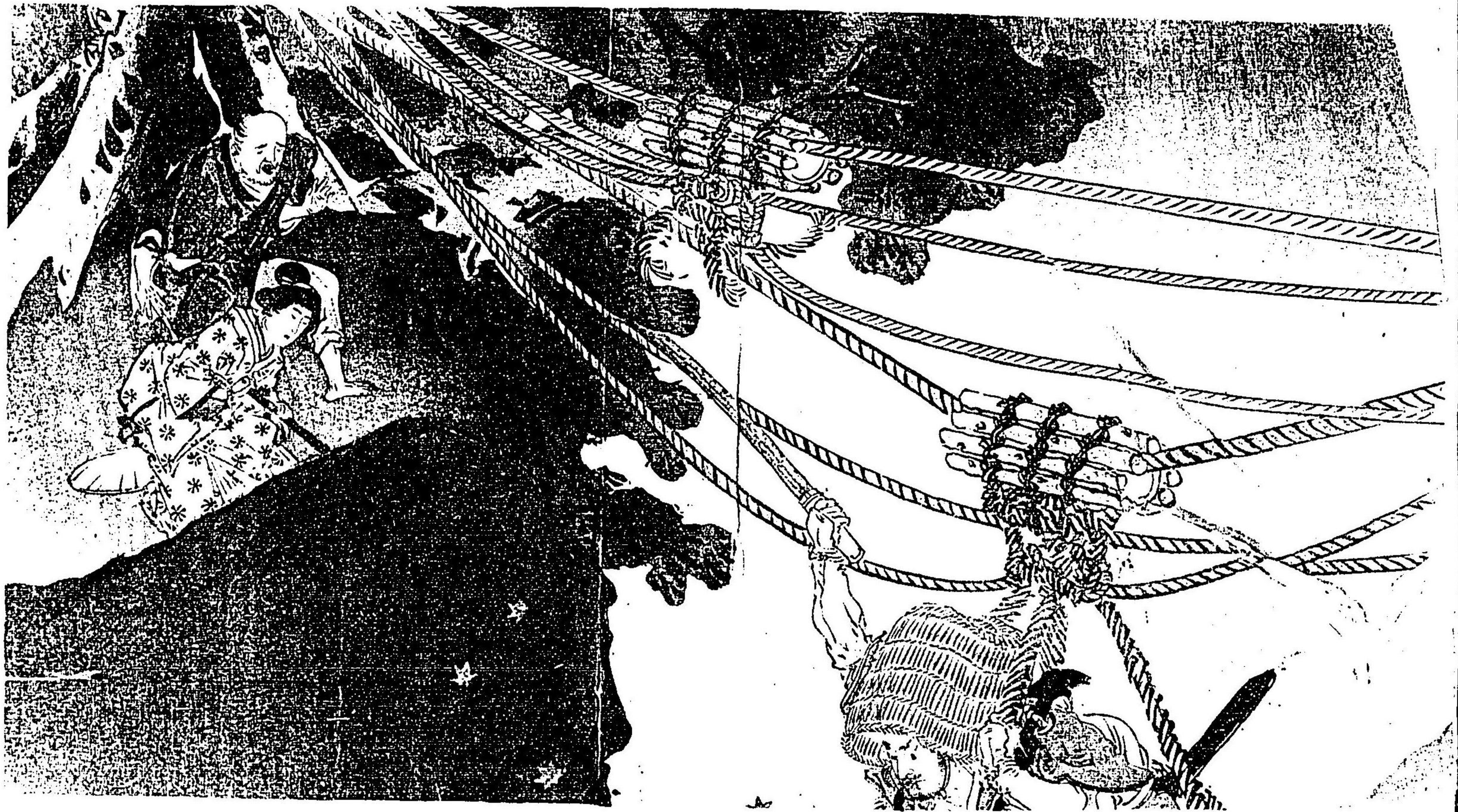
芝井 一溝濱  
吉田 欽一 速庄



志宗  
鳳林館  
岩川



岩川





特9

125

水 天 宮 利 生 記

關東小六  
靈驗復讐

水 天 宮 利 生 記

吉 田 欽 一 講 演  
速 記

第 一 席

エー……茲に開講致しまするは水天宮利生記と申しまする復讐  
 の講演で御座いまするサテ久留米の藩主には暫くの御病氣で被  
 入まして此病氣は何だかどうも何とも名の附けやうのあい所謂  
 御氣病で御座いますして御醫者方は勿論のと其他種々様々の療養  
 は致しましたたけれども何分御快癒に参りませぬンコで御近臣の  
 内でも最も藩主の傍意に叶つて居ります者で三田三右衛門と  
 云ふ者がありまして或日御病床へ伺ひまして言上致しまする  
 三此御病氣に就きましてはお藥の他に尙ほ御信心を遊ばした方  
 が宜しからうと存じますと云ふのでそれから目黒の不動様を信



水天宮利生記

心致しまして月々の参詣は缺きませぬソコで三右衛門の申しま  
すには三右衛門は希はくば御名代として参詣御許しを云ふので  
三右衛門に其とを許し下さると素より忠臣の三右衛門で御座い  
まするから尙ほ自分か三七廿一日の日参を致しまして藩主の御  
病氣平癒の事を祈願致し下さる既に三七廿一日も缺さず参詣を  
致しなされたが御利益等も御座いましてか何分か病氣も宜しいと  
云ふやうなとに相成ります今日丁度三七日のお参り参り  
通常の月参り等も平常の通りに参詣を了りまして門前に出まし  
てからお供に連れて参りなされた七歳と申す下郎で御座います  
是に向ひまして三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三  
此間中ら御苦勞であつたが随分其方は日々難儀であつたらう  
七へエツ……さう致しまして私にはア斯ふやつてお供をする斗  
りて御座いますか旦那様こそ御苦勞様で御座いました三三三三三三  
……乃公は勤めだに依て太儀とも思はぬが七矢張り私供も勤

水天宮利生記

めで御座いますればへエ……太儀では御座りませぬ三三三三三三併  
此動にもいろあるのなア何しろ今日は重要な用事も了つ  
たに依て例の橋和屋で一盞を傾けて参ろう併し其方は如何に存  
する七へエ一是迄毎日々々参詣に参りまして一日もか寄り  
あさいませぬで今日も先刻は胸がグビ……へエツ何結構  
とで御座いまして三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三  
一盞を傾け然うして食事をして歸ると云ふ事に致さう七何  
うも誠に難有存じます今日ももう日参の方は済みましてお参  
りの事で御座いますればへエ一誠にへエ……實は何で御座い  
ます旦那様は毎日々々参詣に参りまして橋和屋へはお立寄り  
被來いませぬ何うして此節は斯ふお儉約になつたお思ひまし  
た三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三  
事を御許し頂いて居るのであつたが之れも無事に済ましてしまつた  
から今日はそんならば馳走して遣はす事に致さう七へエ……

水天宮利生記

……難有存じますと話しながら橋和屋へ参りましたから早くも  
下女が見附けました。下女被入いまして御座いますと云ふ聲を  
聞附けました。三田の旦那様御機嫌宜しう御座います。何うも久しく御無  
沙汰を致しましてさうも相済みませぬ。賀は今二三日前で御座い  
ました。下女どもが旦那様をお見受け申しました。か云ふとで  
御座いまして。夫れは三田の旦那様ではあるまい。若し三田の旦那  
様なら御参詣にふ出でなされて必らずお立寄り下さる筈だが  
それは大方人違ひでもある。だろ。うと申します。女中の申しませ  
るには。それは決して見違ひでは御座いませぬ。確かに三田の旦那  
様に相違御座いませぬ。斯う云ふもんです。からそれでは何か御  
立腹の廉でもあつて。立寄り下さらぬ。かしら。それでは櫻屋へ  
でも。立寄りにあるのか。しらん。斯う申して居りました。へエー……  
三「ハア……成程。それは自分に違ひない。是迄も度々参詣

水天宮利生記

もしたが。殊に。此間中から藩主の御病氣に就いて。月参りを致し尙  
は。其他に。自分の考から。日参等を致しまして。今日が。丁度。三七廿一  
日の。日参を。了つた。お禮参りを。只。今。済して。来た。所。た。それ。だから。女  
中。が見。掛けた。のも。虚偽。では。ある。まい。ア。亭主。それは。大層。の  
御心願。で。御座。い。ました。殊に。御主人。の。御病氣。で。被。入。る。と。ので。わ  
……三。それ。に。就。いて。御代参。を。許。されて。月参り。其他。日参等。を。す  
ると。で。あり。ました。から。兎。に。角。涉。違。慮。申。して。是。迄。は。立。寄り。申。さ。す  
致。した。が。今日。は。丁度。三七廿一日。の日参。も。了。つ。て。お。禮。参。りに。参。つ  
た。ので。差支。ない。と思。ふ。に。依。て。七。藏。にも。馳。走。して。遣。う。と。云。ふ。事。で  
……亭主。へ。エ。……へ。エ。……それは。く。は。いろ。く。と。御。苦。勞。様  
で。御。座。い。ます。サ。ア。……さ。う。ぞ。彼。方。へ。お。通。り。下。さ。い。……七。藏。さん。御  
苦。勞。様。で。……サ。ア。……此。方。へ。……三。それ。で。は。平。常。の。通。り。御。馳。走。  
を。……又。他。に。う。まい。もの。が。ある。ら。ば。七。藏。にも。澤。山。馳。走。して。や  
る。や。う。に。して。呉。れ。亭。長。り。ま。して。御。座。い。ます。と。亭。主。の。それ。く

水天宮利生記

料理に取掛りますから七藏は鞋は取りませぬで奥の縁側に腰を懸けまする三田三右衛門は奥の座敷へ通る矢張り縁側の方へ持つて来た肴も座敷の方へ出た肴料理も決して違ひませぬ矢張り三種來れば矢張り三種の御料理を七藏も頂戴するので御座います是はさうしてやる方が宜しいので下郎だからつて腰掛でましくものを食はせる旦那様は座敷で藝者と痴話あんで一のは宜しくありませぬさう云ふとからして一般に風波が起ると云ふとつて矢張り當り前に取扱はさいと宜しく御座いまするが下郎だから云方へ肴が五種出て下郎の方へ三種しか出ない二種違ふ爲に其肴がうまさうに見えて矢張り三種出したお肴の御馳走が無駄にあつて仕舞います併し三田氏は御自分通り馳走するものですから至極宜しい事でも七藏もだんく酔が廻はりまして手足が震へるやうになりましてたからもう飯も済まして七もし女

水天宮利生記

中さん未だお座敷の方へは酒が参るのですか 女ハ旦那様が一休一本と被仰ましたから……七もうちト過ぎるやうだが……一休旦那様は機嫌上戸だから途中は何をするか知れない……分ッパ扱でも何でも仕ますから……併し悪い酒では御座いますね機嫌上戸ですから宜しう御座います……私が又困りますからさうか宜い塩梅の所でお納盃をして下さるやうに 女畏りまして御座いますと下女も奥のお座敷へ参りましたが程なく旦那様が出て参りまして三何うだ七藏宜い塩梅だ宜しくなければ三日でも四日でも十分にふるまで馳走にあつて居るが宜しいと旦那様も大層酔が廻つたと見せまして言葉も能くは分りませぬ 七何う致しまして澤山の御馳走を頂きました 三もう……澤山で有ると云ふのか 七へエ……もう十分に頂きまして供が出来れば自分がお供でも何んでもする 七いエ……さう致

水天宮利生記

しまして十分に御馳走を頂きました上に旦那がお供をするか  
てとんでもない事を被仰ます……大丈夫です決して差支は御坐  
いませぬ 亭主是はくも旦那様にはお立で御坐いますか  
三ア……是々亭主此蓮の花は大分能く咲いたな之は當年始め  
て作つて見たのかな 亭へエ……是は當年始めて作つて見  
したが大分能く咲きまして御坐います 三是は至極宜しい是か  
ら毎年作る方が宜しい 亭左様で御坐います當年始めて作つて  
見まして……私には此蓮の花は好きありませんから是から毎年作  
らうと存じて居りましたら此間或る客様が参りましてさうも料  
理屋に蓮の花は佛臭つて宜くないと被仰るお方がありましたか  
ら當年限りで止めやうかと存じまして 三イヤそれは決して宜  
しくない佛臭いおと馬鹿なと言ふ全体さう云ふ無駄者が世  
の中に居るから困る一體此蓮の花と云ふものは三國王の花と  
云ふ花の内位にして居るものであつて決して佛臭いおと云ふ

水天宮利生記

とはお好し神國だからと云つて矢張り此蓮の花が這入なけれ  
ば三王の花と云ふとは出来ないのであると云ふが……決して三  
王の花と云ふとはさう云ふとぢやない先づ日本では櫻の花を以  
て花の王とする勿論咲く時が一緒で又散る時も一緒に散るさう  
して其後に實を結ぶと云ふとにある又唐では牡丹花を以て花  
の王と致しまして丁度日本で櫻の花を以て王とするのと同じや  
うに愛して居るのだソコで又天竺國では此蓮の花を以て花の王  
と致して居る然らば天竺國は釋尊のお生れ遊ばした所で御  
座るか總て蓮の花を以て宜いと致した者で地獄獄樂に至るま  
で此蓮池を持へると云ふのは矢張りそらうゆ譯からして作つて  
あるのだから此三王の花と云ふのは中々立派なものであるが是  
は毎年作つた方が宜しいさうして此蓮の花にもいろくありま  
して赤色もあり桃色もあり又白のものもあるが其内で白の  
最も宜しいのでさうしても蓮の花は白に限りなまどうだな亭主



水 天 宮 利 生 記

是を二三本所望したいな 亭左様で御座いますそれは差上げて  
も宜しう御座いますけれども水の中に出て居りますもので  
すから水が切れると直ぐ枯れますから瓶にでも挿れなければ  
……三みりや亭主連の花と云ふものは水中にあるものだから  
水が切れては不可あい必らず瓶に挿れなければならぬ位のこと  
は拙者とても承知して居る其花を切るのが不可あいのならば止  
せ 亭さう致しまして決して惜しいを云ふ譯では御座いま  
せぬ……左様あれば早速切りまして差上げませう折角の御所望  
でお氣に召しませぬと不可ませぬからとぞ且那様がお指圖を  
受けまして切りたいと思ひます 三さうか宜しい……さうする  
と其左の方の蕾だ先づ娘ならば十二三と云ふやうな苔を一ッ切  
つて呉れそれ……から今度は右の方の大きく咲いた花を一ッそ  
れから其處に巻いてある葉を一ッそれから大きくなつて居る其  
葉を一ッ 亭是で御座いますか是は餘り大き過ぎるぢやありませんか

水 天 宮 利 生 記

程大きいので御座います……何それで宜しい 亭是はさうも仕方ない  
て差上げますから 七成程是は誠に大きいので大層な荷物です  
な 亭それで七藏さん斯う葉の方はお巻きにあつて居る出で  
されば……三イヤ例大きくつて宜しいのだ運の葉は荷葉と申  
しまして荷物になる程大きいのが宜しいのだ……イヤ……御亭主  
大きに馳走にあつた 亭ハイ……毎度さうも難有存じます……  
それでは七藏さんも御苦勞様で御座いました 女中且那様御機  
嫌宜しうと云ふ聲に送られて橋和屋を出まするけれども七藏も  
酔つて居りますし三田三右衛門も中々酔つて居りますか  
三是く七藏先きに立つて行け 七へー私はお供で御座います  
三是々早く先きに立たないか 七左様でございますか且那様の  
お先きに立つ事は……さうも先供と云ふとはありませぬから  
三然らば提灯を持たた時はさうする 七其時には先きに立たなけ

水天宮利生記

ればなりませぬ足元の見えるやうにしなればありませぬから  
三何を踏まして居るのだ先きに立たなければ逆の花が見へ  
ない逆の花を見なければ橋和屋の亭主に買つて来たのが何にも  
あらない先きに立つて逆の花を手で差上げて持て七ヲヤ  
……斯うで御座いますかと言ひながら七蔵が逆の花を頭の上に  
差上げましたから三イヤ……それで宜しい花も宜しい中々香  
りも宜しいだが七蔵其葉の方が宜しくある大きな葉の方が宜  
しくあるこれ葉の方は此方へ寄越せ七ハイヤ此大きい葉で御座  
いますか是をどう遊ばしますのですか三イヤ……何さうでも  
宜しい此葉を斯う冠るんだイヤ……さつこいしよヤア  
は風が吹いて来やがつたあ不可あいな頭を冠つて三是  
々七蔵其手前の腰へ挿さるる手拭を出せ七ハエ……此手拭  
で御座いますか何をささるるのですか……あれア見どうものう  
座いよす此世の中に狐にでも摘まれたやうに人に笑はれます

水天宮利生記

のに仕方がないと云ふ七蔵の獨言にも構ひませぬ三右衛門は逆  
の葉の大きいのを頭に冠りまして風が吹きますから是を手拭を  
以て結びまして三是々七蔵是を見ろ實に立派なものだらう  
……然うして七蔵其花も蒼も此方に寄越せと言ひながら皆各自  
分の方に取りまして咲いた花をば頭の手拭で給んだ所へ挿しま  
して左の手に巻いた方の葉を持ち右の手に蒼の花を持ちまして  
……三どうだ七蔵面白からう七チャ……大衆のとが  
来て仕舞つた是だから遂々お酒が過ぎたと思つたのだ本統に因  
つちまつたあア三オイ七蔵何ぞ下らないと言つて居るの  
だ七それども旦那様皆か人が笑つて居ますぢやないかね……  
どうも困りましたな三何だと……決して差支ないサ……併し  
七蔵貴様が見たらは何と見立るゝ七左様ですチエー先づ狂人  
と小聲で申しましたが三右衛門の耳に這入りましたかどうです  
か三ムッ何……七蔵七ハエッ……何と申しませぬさうも其

水天宮利生記

風体は分りませぬね九でお祭りのやうです。ね、三さうくお祭りにには、雛子があつちや不可ない七歳雛子をやれ。七左様です。ね、私にはどうも雛子は些と六ヶ敷やう傍座います。三宜しい。そんなら自分がやると言ひながら自分で口を曲げまして、デンデン、デンデン、デンデン、デンデン、デンデン、デンデン、デンデン、デンデン、目になつてやつて参ります。素より酔つて居りますから此方へひよろ／＼彼方へひよろ／＼。七歳は仕方が御座へませぬから、只だ後とから茫然しるがら尾いて参ります。通仕の人は皆な立つて見て居ます。三さうだ七歳、東京の蓮の花の花車と云ふものは立派なものだらうと噂しるがら、目黒行人坂の下まで参ります。ると云ふと其坂の中程に葉茶屋が御座います。其葉茶屋の娘が今、其大騒に見取れて居ります。手足丈けは眞白に染つて居ります。して年はどうも十八か十九か或は廿か廿一にあるか分りませぬ。が、膝に可愛らしい三毛猫を懐いて居ります。すると其處の前へ

水天宮利生記

如何にも其時分勇ましい風をして歩行ます。薩摩の藩士が十二三人で取り巻いて、何とてか戯談を言つて居ります。十二三人が取り巻いて頻りに戯談を言つて居ります。けれども中に居る娘は一向平気で三毛猫を懐いて居ります。娘、近藤さん、中村さん、本統に御戯談、斗り被仰つては不可ませぬ。ヨ、おと、十二三人の荒武者の戯談を柳に受けて一向平気で居ります。所へデンデン、デンデン、デンデン、デンデンとやつて参りましたのが、三田三右衛門で御座います。たがフと見ます。娘を中に十二三人の武士が戯談を言つて居ります。するけれども娘は一向平気で居る様子。ハテ不思議な娘だ。……これ一ツ此處で彼の娘を驚かしてやらうと廢せば宜いのに、酔つて居るもので、すから持つて居た蓮の花も、茗も、巻葉も、皆な抛り出して仕舞つて、頭に鉢巻をして居た。手拭を取つて冠つて居た。蓮の葉を上細長く致します。と九く笠を冠つたやうに出来ました。七歳は心配して見て居りました。が、何んか事が出来るか知れ無

水天宮利生記

いと思ひますから 七旦那様どうも向ふは薩摩の奴等のやうで  
すから……又大變の事でも出来ますると…… 三何に大丈夫だ  
よ只だ彼の娘を驚かしてやるのだから一夫ればもう承知して居  
るよと言ひるがら周圍つと取り巻いて居る侍士と侍士の袂の  
間から蓮の葉を冠つて頭をズツと出しましたから驚いたの驚か  
あいのぢやありませんかね皆んな驚きましたか其三毛猫は殊更に驚  
きましてフーッと一言ひながら向ふに居た一人の武士の鼻を引搔  
いて頭を飛越して一散に逃げて仕舞いしましたサア一大變が出来  
まして血は鼻の先きから出ます是を見ました三右衛門は驚きま  
して両手を大地へ置きまして 三是はく恐れ入りませす飛でも  
あゝ事を仕出来しました甚だ以て失禮を致しまして御座います  
るが一體尊公等に對し斯様な無禮を致す心得では決して御座い  
ません全く此お娘が何とも平氣で御談を言はれて居ります  
から一寸戯れに致さうと云ふ所から遂々何とも申譯のないと

水天宮利生記

致しましたと云うか決して尊公等に對し斯様な難儀を懸けやうと  
云ふ心得では御座いませんから平にお許し下さるやうに願ひま  
するで御座います 武士何と申すか縦令戯れにもせよ人に傷  
を負はしてそれで只許して呉れで事が済むと思ふか甚だ無禮千  
万である併し素々悪意のまいであるからには姓名をなれ但しは  
主公は何方であるか藩主をなれ然らば許してやらぬとも限る  
まいがどうぢや 三如何にも御尤も次第では御座いまするが斯  
う相成ましては姓名をなれ且つは藩主をなると云ふ譯には  
参りませんどうか其段は平に御許し下さるやうに願ひます 武  
士それでは決して許すことは相成らん姓名もあのれん藩主も云  
はれんどあつては自分供も藩邸に歸る途がないサア尋常の勝負  
致したい其方に於てもお仕度を致されよ十三人は立上つて手  
早やに仕度を致す三右衛門は一人のとで多勢に無勢のと云う  
する事も出来せんから心の中では何としたりば宜いのか實よ

水天宮利生記

途方に呉れて居りまするが一体事と云ふものは僅かの所から飛んだ大變も起るもので御座いまして僅が三毛猫一匹の爲めに三田三右衛門の身に大變の災難が起りました是ですから看客様方は御存知のとて御座いませうが料理屋だとか待合さの暗い所で随分猫の爲めに災難を受けけるやうなとがあるさうですけれども世の中の事は宜く出来て居るもので御座いまして殺す神あれば助ける佛ありとか申しまして今三田三右衛門が十三人の武士に取巻かれて自分一人でどうするとも出来ず思案に呉れて居りまする所へ是れ其當時高名の劍術師と言はれて居りまする先生で麻布狸穴に道場を取立て、居りまする犬上軍平と云ふお方が救ふと云ふれ話しで御座いませるが一寸一息入れまして申上げまする

第二席

扱て下男の七藏は只だ空に致しまして行人坂を走り下りまして

水天宮利生記

橋和屋藤兵衛方へ参りまする 七「どうも大變な事が出来ました……それだから自分がある事をしさい方が宜いと言つたのに……旦那をどうぞお助け申して……どうも飛だ事が出来て仕舞つた……」藤七藏さん何か知れませぬがまア静かにしてお話しあさつて被下いまし……大變々々つてせんお大變のとて御座いますか 七「ハイ……餘り恐惶まして御座いましてが今私の處の旦那様が行人坂の中程で美麗な娘が三毛猫を懐いて居りまするとそゝへ十二三人の武士が其娘の中に取巻いて冗談を言つて居りまするのを見ましてそれを驚かしてやらうと言つて廢せば宜いのに逆の葉を冠つて頭を其處へ出しましたから猫が驚きまして一人の武士の鼻先を引掻いて逃げて行つて仕舞いました  
が實に飛でもないとを致しましたが何でも其武士が薩摩らしいやうで御座いますから威張つて仕方が御座いません 藤「ハア夫れはさうも飛でもない事が出来た 七「どうも向ふが薩摩らしい

水天宮利生記

人だから實に困りました……藤「それは困つたものだかア……七「さうも大變の事になつて仕舞ひました御座います藤「何しろ私が参つて兩方の話を聞いて勘辨をして貰ふ事に仕申しやう併しまだ旦那様は其奴等に打れるやうな事はありませぬなア七「左様です私も勝負を致さうなんてへ言ひましたから一散に駆けて参つたのですすがとに依るとどうですか知れませぬか成たけ早くお願ひ申し度う存じます藤「それでは七藏さん片時も早く走附けましやうと云ふので藤兵衛が先きに立ち七藏が後とから後とをも見ずに一目散に駆けて参りますと今行人坂の方へ曲らうとすゝ所でボカリツ……と打ち當つた藤「是は失禮を致しました犬「オ、藤兵衛大分急ぐではあいか藤「イヤ……是は狸穴の先生で御座いましたか誠に失禮を致しましたさうかお許しを願ひます犬「それは宜しいが餘り走て来るから大概打附かるだらうと思つて立て居たのだ藤「先生それはさうも酷いで

水天宮利生記

は御座いませぬか犬「それはマア夫れで宜いか大分急ぐやうだが何處へ行くのだ藤「ハイ只今私處のお馴染の旦那様で御座います三田三右衛門様と云ふ方が行人坂で斯々々々其事の始終を手短かに話しました藤「何と先生宜い考へは御座いますいかなア犬「成程今行人坂を通り掛つたらば大分人立がして居たつげが何かと思つて一寸見たらば一人の武士を薩摩の藩士が十二三人で取巻いて果し合ひを爲ると言つて居つたが併し多勢と無勢のとであるから一人の武士の方で立たなかつたが……成程さう云ふ譯ならば救つてやりたいが……一体薩摩の奴等は器い此方から弱く出ると無暗に威張つて仕方がないから今日は丁度宜い鹽梅だからそれでは先づ仲裁すると云ふ事にして是から引返して見やう藤「それはさうも難有存じますさうか願ひ申します一七藏さん此方は麻布狸穴に被居る劍術の先生で高名の方ですがさうかお救ひ下さると云ふとで七「左様で御座いま

水天宮利生記

すか私は三田三右衛門の下郎で御座います。が御主人の難儀をお救ひ下さると云ふ事でどうぞお願ひ申します。犬餅し待て薩摩の奴等は實に悪い奴等。で何でも向ふを強くすると不可あいから自己が仲裁をする。と云ふ事にしてそれで仲裁が出来あかつたらば其處で直ぐに遣附けると云ふ事に致さう。一體其頃の薩摩の藩士の勢力と云ふものはエライもので御座いました。丸で町人やなまにはどうする事も出来ない位で御座いました。尤も爾うなくてはなりませぬ。イザ戰場に向ふと云ふ時にあつて怖がつて居るやうでは仕方がない。武士と云ふものは戰場で及ぶに懸つて生命を落とす。と云ふ事であければ相成りませぬ。どうせ壘の上では死ぬるも。のではない。之れを壘の上で死のうとする様を奴では全く町人風情に劣る位であります。實に其時分の薩摩藩士と来ては丸で仕方がある位で御座いました。當時あらば表で人に突當ると是は失禮……御免下さいと云ふのです。が薩摩の奴等は直ぐに切つて捨て

水天宮利生記

る先づ突當つて御免下さいと云ふと人に突當つて御免下さいと云ふかど斯う云ふが一體御免下さいと云ふなればどうすると言ひたい位ひです。が過ぐにコソコソ許し置かんぞと云つて切り捨て仕舞つたと云ふ事でそれです。から町人あそばさる三人寄れば其悪口が始まる。と云ふ位で御座いました。尤も其内でも薩摩の方にはもの言ひ方があつた。さうで先づ人に突當ります。と御免下さい。と言はす。に互ひと斯ふ聲を掛けるのださうです。がさうする。と向ふでもア、ヨカ、と云つて之れで済むのださうで御座います。突當ると。甲「コソコソ……何して我りや突當つたか。乙「お互ひ無禮。甲「ア、ヨカ、と云つて済んで仕舞います。併し其處へ来ては江戸ッ子で御座います。次郎「エ、何んば薩摩ア。ばだつて人になぐられて痛いだらう。八「所が薩摩つばは痛くない。んだと。冗談言つちや不可ね。エ、何だつて人になぐられて痛くね。エ、奴があるもんかい。次「ア、……八公向ふへ来るのは薩

水天宮利生記

摩ッばだらうが二人、来らアぬれつちが一ツ打なぐつて見やう  
八、ふいつは面白いと向ふから何心なくやつて来ます薩摩  
ッばを此處では脇の下へ拳を拵へて置いて出會頭にボカーリ  
……薩摩ッばも大層痛さうを顔をして見たつけが 次郎、互ひ  
で……と言はれましたから仕方ないから 薩摩ッばヨカ  
事が済んで仕舞つたと云ふ之れは在つた事かどうか分りませ  
が一致されると薩摩ッばでも何でも叶ひませんさうで江戸ッ子と云  
ふのは又巾が利くもので御坐いましたか兎に角其時分の薩摩ッ  
勢力と云ふものは實に仕方がなかつたさうで御坐いました犬上  
軍兵衛は後とを振向さまして大野傳八高柳殿之丞の兩人を供に  
召連れまして御坐いますか之れに打向へまして 犬、只今茲に聞  
かるゝ通りの事に就いて拙者義其三田三左衛門殿を救つて上げ  
る心得であるが之れに就いては向ふは薩摩ッばであるし殊に十三人  
も居る事であるから一先づ仲裁を試みる積りだが若し先方で承

水天宮利生記

知しあいに就ては十分にやらなければならぬ併しおがら三人が  
手を揃へて打立てる程の事でもあるまいで 二人御意に御坐い  
ますたか薩摩の十二三人さうぞ先生は御見物下さるやうに願  
ひます 犬、宜しい……然らば拙者の手出しを致さずに居らう  
二人丁度宜い鹽梅で御坐いましたさうせ一度や二度は試して見  
たいと思つて居りました所ですから暫く先生は御手出しをなさ  
らずに居て若し吾々が危険いと云ふ時には…… 犬、そんな弱  
氣を出しては駄目だ無難打ち取る覺悟で…… 高、畏りました決  
して卑怯は働きませぬと兩人は拍手を致しまして南無不動明王  
能、三満多羅…… 犬、是れ……兩人何だか十三人位のもの  
に恐れて不動明王の念力を借りるさう云ふやうぢやあ仕方が  
ない 二人、イヤ……先生決して左様を譯で不動様の力を借  
りるなど云ふ譯では御坐いません餘り向ふの十三人の奴輩が  
弱くつて先生が仲裁を承知されては折角心掛けを試切りが出来



水 天 宮 利 生 記

おくなりますからせうぞ十三人の奴輩も仲裁を容れないやうに一寸不動様を拜みました譯で……犬それは又宜しくない若し先方で仲裁を聞いて呉ればそれで無事に済むから宜いぢやないか何しろそう云ふ心配は要らない事である……是れ藤兵衛下郎の……七藏然らば斯ふした方が宜からう三田氏も一生懸命だから容易に其場所を退くまいて併し三田氏が其場に居つては甚だ都合だから愈よ仕合に及ぶ段にあつたらば藤兵衛と七藏が左右から取附いて以て三田氏を坂の下まで引降して任舞つて呉れ急度三田氏も刃に手を掛けるに相違ないから藤宜しう御坐います三田の旦那も一生懸命で御坐いますから何……人の手を借りないなと刃に手を掛けるに違ひありません其時は……七藏さん……旦那様を引降して任舞う事に致しましやう犬然らば一刻も早く参つてと云ふので供々五人は立上つて行人坂の方へ引返します此方は一坏の人立ちが致しまして 甲本統に

水 天 宮 利 生 記

意地の悪いのは薩摩つばの奴等だ此間も此横町で町人らしいものを酷いめにしやがつて 乙本統にちあヲイ……十三人と一人だもの何だつて叶ふもんか可愛想のは彼の侍士だぞア 甲何にもあんな薩摩つばはなんぞア何でもありやしさい乃公あらば一ト打にして仕舞うのだけれども高が三食侍士め長いのも二本宛帯して居たつて十三人が二本宛僅か廿六本で何でもあるものか 乙だつてさう行くものか向ふだつて侍士だぞといろく端では言つて居りますすけれど誰とて助けて呉れる者はありません其處へ黒山を爲して居ります人を割けく這入て参りまする皆な見て居た人々は振返つて見て 甲イヤア彼れは麻布の狸穴の先生だ 乙何んだ助太刀に先生が来さいすれば討たれるやうおとはない又此方に附立ち上りました十三人と云ふものがズつと揃つて刀に手を掛け鯉口を切つて一人の三田氏を詰掛け居ります 薩如何に侍士無禮と云ふも程がある人の身体に傷

水天宮利生記

を負はしてそれで誠に済みませぬで済むと思ふかサア……一人宛から一人宛でも又十三人が一緒ならば一緒でも宜しい其方で扱のあければ此方が扱くと十三人が一手に詰掛けて参ります其所へ犬山軍兵衛 犬アイヤ御一同暫く……薩人の勝負に邪魔する者は何處の誰である。犬私は麻布狸穴に居ります犬上軍兵衛と申すもの只今様子は承知して参つた併しおがら何ぞ此三田氏迎も決して尊公等に斯やうな傷を負せやうとしてやつたのでは御座いませぬ只其娘を懸かきうとしてそれが間違つて尊公等に僅かの傷を負ひの先きに負はしたと云ふ丈けで何ぞさう大層らしくする程のとは決してないそれを尋常に勝負をど、云ふとは一体斯様かとの勝負なをすべきものでない最一鼻の先きの血などは止つて仕舞つたではないか決して此位のとで藩邸に歸られぬと云ふとは御座いませぬ管若し亦それでも右様のとが御座いますれば拙者とても道場を開いて居る身

水天宮利生記

分であれば舊臣知己等もありませんに依て拙者に於て如何様にも取斗ふとに致さう暫らく拙者に委せ下さるやう……若し御承知が多いに於ては拙者供三名が三田氏に代つて各方の相手致さう……併しおがらぞれ程のとも決して無いとは思ふが……斯う云ふ風お中裁人ですから何だつて委せるものですか薩摩不届千萬だ併し人数三人おらば却つて此方の望む所だサア如何にも是より相手致さんを見ました三田三右衛門 三何條人の力を借りなくとも……若し討死すればそれまでとの覺悟で刀に手を掛けて鯛口を切りましたから側に見て居た藤兵衛と下郎の七藏が左右から取附きまして行人坂の下まで引張て参りませした後では犬上軍兵衛 犬さらば是より勝負を致さうと大野高野に指揮を致します心得たりと兩人は討て出ますれば十三人の一人々々に掛てと参りまするけれどもたか々三貧侍士の事で御座いますから皆おぼかくさぐり左右へ投げ出して仕まい

水天宮利生記

まする次に一同が捕つて掛りますから大野高野は一人の奴  
を組伏せて腰を掛け向ふから来る奴は足を拂ひ後ろより来る奴  
は頭越しに紋鳥切つて五六間も遠くへ投げ出して仕まいまする  
が遂々十三人を残らず討て仕舞いしましたから 犬どうだ誠に少  
ないもんだモ一四五人相手があれば宜い何だかさつぱり手に  
足らんでお可笑なものだ 高どううた手前共は見物斗りして居る  
いで四五人此處へ出る少し相手にしてやるから 見物どう致し  
まして飛た事で御座いますと皆を尻込みしるから 甲どうだ流  
石の乃公が言つた事は逃ひはなからう狸穴の先生が来さいすれ  
ばモ一……差支をいつて云つたんだウ……さうく成程年  
の功より龜の子だヨ奈……一体薩摩の方が悪いがらだヨと  
畢九も釣方どやらで皆な自己々に引下りまする犬山先生は立  
上りまして 犬オイ……是々水は以て参れ 犬へッ先生何んで  
御座います水をば何にするので御座います……先生が飲むので

水天宮利生記

御座いますか 犬アイヤ何でも宜しひ早く是へ持て 高ハイ是  
に持て参りまして御座います 犬是より此十三人を残らず死  
活の法を以つて且生活して遣おければあらぬ 大高ハア……  
成程御尤もで御坐いまするそれに就きましては其死活の法を行  
うのは手前供に被仰付やうに願ひます 犬アイヤ是迄其方供に  
も 劍術に就ては残らず其法は許してあるけれども未だ此死活の  
法は許さん 高全体それがどうしてもやつて見たいと存じまし  
て先生のやつて居るのを見似て居りますから此度は幸手前供に  
お委せ下さるやうに願ひたう存じます 犬そうか然らば今日  
はやつて見るが宜しい兩人は大いに悦びまして 高ハイ大野己  
れが急所を押すに依て貴公が水を吹掛けな 大宜しい……モ一  
宜いかな 高何だか急所が見附らぬ 大何だ何時迄も愚頭々  
々して居たから一口含んで居た水を飲で仕舞つたが此度は宜  
いかさ 高宜しい吹掛けロ一エー……ッ一駄目だせ 大それ

水天宮利生記

では駄目の筈だ急所が下過ぎるもの 高ヲヤそうかそんなら此  
度は大次夫だーエー……ヤッー駄目だ 大それでは水を吹掛け  
るの以後で宜しいから二人で急所を押す事にしやう 高一體と  
うも今の急所は上過ぎたとか言ひ乍ら種々して下だとか上だど  
かイヤ横丁だとか云やつて見ましたが中々急所が見當りませぬ  
水を幾ら吹掛けても生活致しませぬ又だ兩人には活を入れる即  
ち死活の法と云ふものは分りませんで暫くの間愚頭致して居り  
ましたのをば犬山軍兵衛心附きまして 犬ぞれ 此方へ寄越  
せ到底手前供に出来るものでないすつかり急所を押して居つて  
水を吹掛けて力委せエー……ヤッとやらないから駄目だー九で  
急所が外れて居るではないかと言ひながら自分がちやんと急所  
を取りまして水を一口に含みアーと吹掛けてやりますから一ツ  
で活て仕舞います十三人の者供残らず活を入れまして仕舞い  
ますると向ふから立派な侍士が一人馬上で一散に参りまする既

水天宮利生記

に其處へ参りまするヒスラリッど下馬致しまして 武者それに  
被入られるは犬上先生で御坐いまするか只今或者の注進に依て  
拙者は薩藩の者日高次郎と申す何か三名の爲めに討れたやうな  
事でありましたから参つたが其者供は決して薩藩の者には無之  
偽名の藩士に存りますと其儘にして此處を御引取申すも決して  
差支なき事と存すると思ふ云ふ事で御坐いまするに依つてすつ  
り死活を入れて活した十三人は薩藩ではありせんから夫々屋  
敷に歸して仕舞いしましたが別に深く取調べも致しませんでそれ  
から此處を引揚げまして橋和屋藤兵衛方へ参りまして三田三右  
衛門に始めて三名の者どもが面會をする事で御坐いますから藤  
兵衛の紹介に依て 三エー……申上げまする夫々御高名は存じ  
て居りましたが今日圖らずも災難をお救ひ下され實に何と申上  
げて宜しいか實言葉に盡されぬ程で御坐います 軍イヤ……  
圖らずも出遇ました爲めに御互ひに宜い事であつた鬼に角無事

水天宮利生記

で済んだのが何よりの幸福。三宮に難有存じまする何れ此事に  
付きましては主公にも言上して宜しきやう取斗らひまする御  
坐いますると三右衛門は時刻が後れて居りますからソコに  
して歸邸を致しまして一々久留米公に言上に及びましたから久  
留米公に於かれましては日を定めて犬上軍兵衛をお呼出しに相  
成ましていろく御聞きに達しませぬ又三右衛門の言上した  
る所を引合せまして愈々犬上軍兵衛の八十石のお扶持を頂戴  
して久留米公の召し抱へ様と相成ります所が犬上軍兵衛は直  
ぐには應じませぬ中々考へました成程八十石のお扶持を頂戴す  
るのには中々大層のやうではあるが折角是迄高名した爲めに道場  
もあり従つて弟子供も居れば直ちに是を廢めて久留米公にお召  
かいといなるのも面白くないと云ふ譯だし併し又其頃劍術の達  
人と言はれて居る日高六郎と云ふものは是が薩摩の方へお出を  
被仰付てあれば中々其方も巾が利きまするし何分宜しくまい所

水天宮利生記

から一策を案じまして兎に角久留米公に御出入を頂おしてら  
つてさうして金を戴いて何か一つ高名をして世の中の信用を得  
たいと種々に心を痛めまして居りました所か……ソコで久留米  
公の御病氣は中々全快する事に相成りませぬ是はさうしても怪  
猫の祟りである云ふ事を聞込みましたから犬上軍兵衛此處は  
好機會ありと久留米邸に取り入りまして毎夜々々藩主の御病寝の  
次の間に於て夜番を致しませうして彼の怪猫めを爲留て呉ん  
どアツと心を穩めて居りますとだんく夜の深更になるに從  
いましてウトくと眠ります是ではならぬと自分から小刀を引  
抜自分の股へ突立つて痛みを感じて眠れないやうにして居りま  
するのだんく夜の深更になるに從つて丁度午前二時と覺しき  
頃廊下の方から來つてサーッ……と襖を明けて毛高き二位尼坊  
主が願はれましたソコで犬上はハテ怪しからぬ事だと思つて居  
ります内に其二位の尼坊主が普戒し今日水天宮の利益に依て

水天宮利生記

怪猫爲留めさすに依つて夢々疑ふ事勿れと云ふ是を聞きました  
犬上軍兵衛は軍へエー……難有や水天宮様と心の中で思ひま  
がら頭を下げますと怪猫は是は悟られたと思つたから忽ち大  
きな黒猫と化して砥鎌のやうな爪を出したと見なまするや否や  
犬上軍兵衛の額をばサツと言つて引括いて縁側の欄間に掛りま  
したから是は怪猫逃すものかと立上る内に向ふへ逃げて仕舞い  
ました犬上は血だらけにまつて其處へ倒れて仕舞いましたから  
屋敷中の大騒ぎと相成りまして愈々主公の御病氣は怪猫の所爲  
に極つたと云ふので犬上は残念で堪りませぬが致し方なく療治  
をして居る扱てだん／＼其事が御國元に聞けられましたから其  
怪猫爲遂げん爲めに淺山惣左衛門の門弟に杉山六郎と云ふ劍  
術の達人是が下向致しまして其怪猫を爲遂げると云ふ下りに相  
成りまするが一寸一服致しまして……

第三席

水天宮利生記

エー……犬上軍兵衛は創所の療治を致して快癒の上再度願つて  
怪猫を是非止めんければならんと言つて居ります然るに久留  
米より丁向したのは淺山惣左衛門と云ふ人は是れは名代の軍學者  
淺山一殿齋の子孫で有と云ふ此人も察の者で御座いますすが四天  
王と唱へる弟子を連れてお上屋敷へ着して怪猫を仕止めん爲めに  
是れもお次の間を遠慮して其御次犬上軍兵衛の夜詰した一ト間  
の只中に座し四方に四天王の弟子が見構へて居りました……追  
ひ／＼夜が更けるに従つて四方の門弟代る／＼コクリ／＼……  
と居寐りをするから真中に扣へた先生 先是れ／＼何せ各々は  
居寐りをなさる儘か一夜では御座らんか……左様居寐りをする  
様を懦弱な事では相成りません心を確りなさい 甲「ハ……是  
れは相濟みません何う致した次第で御座いますか寐むりますか  
是れよりは心を確り致す御座らうと云ふ内に方々がコクリ／＼  
……と居寐りをする 先是れ／＼中川……杉本何うした者で御座

水天宮利生記

る中ハ……恐れ入つたかイヤ……不思議は不思議で御座ります。先心を落着けてウーン……と下腹へ力を入れて居れば寐むい氣遣ひの御座らん。杉イヤ……何うも奇怪らん事だと云ふ口の下から杉本等は又寐むるから先杉本……中川……是れ廣瀬……近藤……と云ひ乍ら真中の淺山先生もコクリと居寐むりを始めました……起して居た先生が斯の通りで有りますから四方の門弟も今は名々鉄扇を扇へ差し置いて兩手を着へて寐て仕舞つたが襖間がサラリ……と開た響にフツ……ト心附いて淺山惣左衛門を定めて見ますと始めて出ましたのは氣高い尼法師。尼善哉……斯く申すは二位の尼あり水天宮の御利益を以て今晚怪猫を仕止めさすべし夢々疑う事無かれと聲爽かに申されましたから淺山惣左衛門淺扱ては聞き及んだ怪猫だと思ひましたのは己に犬上先生此時お低頭をして腦へ剣を藪むつた話を聞いて居りました轍が有りますからお低頭を仕

水天宮利生記

せんがといつて二位の尼に相違ないかも知れ無いから今打ち係る事も出来んから鐵扇を持つてハツタ……と睨つけ乍ら先水天宮御利益の程有り難く存じ奉る何卒怪猫を仕止めさせ賜う様願ひますと睨み詰めましたから二位の尼の方でも少しく都合が悪く見へて又山直しにあつて尼善哉……我は二位の尼あり水天宮御利益を以つて怪猫を仕止めさせん夢々疑う事勿れ………矢御利益の程有難く存じ奉ると云ふて尙目を見張つて居りますと仕方が無いから又々尼善哉……淺山先生善哉いでもお汗粉でもお低頭は仕ませんから今は據所ないと見へて二位の尼忽ち怪猫と化してどがまの様を爪を光らして飛び掛つて來ます先已れ怪猫御座んあれ……ヤア……方々怪猫出ましたり……臨兵闔者皆陳列在前と鐵扇にて打ち込みます物響に目を醒した四人の弟子が魚ヤ……怪猫出たり先生御助勢を致ます……臨兵闔者皆陳列在前……臨兵闔者皆陳列在前と各々

水天宮利生記

鐵扇で打ち掛つて行きます彼方でも臨兵此方でも臨兵と申しま  
すが時侯のせいと見へましたが頻りと向つたが勝はんと見へま  
した身が翻へしてお廊下を逃げる跡を追つ掛けて来たのは都  
合三人其中で杉本六郎と云ふのが早く追ひ駈けて来ました猫  
は其儘お欄間を蹴破らうと思ふが駈け上らうと云ふ所を小柄を  
抜いて六フーッ……と打ちました其小柄が飛び上らうとした  
猫の尻へズバリ……是れが全たく尻剣とでも申しますか猫は轉  
倒と浴ちた所を短剣を抜いて柄をも通うれどお盛廊下へフッ  
……突き抜きました猫は恐ろしき顔色をして恐る可き呼吸を  
吐いて居ります浅山は先杉本でかした杉先生止めました  
ので御座ります……明りくと呼はつて居ります手燈を點して  
見ますと恐ろしき猫の有様で御座ります先決して其小刀を抜  
くな此儘置いて御覽に備へるのだから申上ると云ふ此時御病間  
がら人を力に久留米侯が御出遊ばして御覽せられ久是れが余

水天宮利生記

を困しめたる者か斯く相成つて見れば余の病氣も全快すると云  
ふての御欣び是れ神經の晴ました所が目を追つて御全快に相成  
りました此功に依つて浅山惣左衛門は百石の加増になり杉  
本六郎は同様五十石に御加増頂戴外三名の者にも相當の御加増  
が有つてござんさめかして五人は久留米に歸りましたが是れを聞  
いて犬上軍兵衛先生犬衆人に面を乃公は見せられん乃公が仕  
止め損じた怪猫を他人に仕止められては……武士道は是れ  
までなり相續の者を定めんければならんと弟子の内から兼て見  
置きました旗本大久保權次郎の次男權十郎と云ふ者を養子とし  
て是れを犬上軍兵衛の養子と致し道場萬端を譲り渡し人の止め  
るのも聞かず軍兵衛は頭を剃みかして妙見と云ふ名にあつて鼠  
の法衣に頭陀袋に藁の杖を着いて所をも定めず漂然として立ち  
去りましたが是れは暫く御話も無いが相續した二代名の上軍  
兵衛犬今日高柳承たまはると御國歸めに相成つた久留米侯が



水 天 宮 利 生 記

御保方々御狩遊をなさると云ふが是りや申す迄も無い將軍で  
猪狩り諸侯にて鹿狩然し其狩に行かうつた所が未だ拙者狩遊と  
云ふ者を拜見した事も無い又能く狩鹿の場所を願して遂に  
に御召抱へになると云ふ話も聞き及んだから幸ひ久留米へ参つ  
て御狩遊を拜見をして其席で何か一つの功を現して先代軍兵衛  
殿の耻を雪ぎ先代同様御出入をする様に運び度いと思ふが就は  
御兩人何うだ……拙者と共に行つて御覽なさらんか……御迷惑  
あればお止しあさい 甲夫れは迷惑所では御坐いません是非共  
お供を致したう御坐います 犬夫れでは行かつしやる様に江  
戸お屋敷へ豫じめの御届けをして 人が麻布狸穴を發足仕まし  
たが早くも筑後の久留米の城下に入りました早い事夥多しいの  
です全縣用が通じない丈けで御坐います三人が城下を歩行て居  
りますと人達が仕て居りますから覗いて見ますと一人の侍士如  
何様浪人らしき姿細をも掛られ様とする所 犬何を致して者か

水 天 宮 利 生 記

軍兵衛が覗くと其侍士はつ……と顔を合して 侍「……  
大久保宜い所へ来た乃公を助けて呉れへ……と聲を掛けます  
犬「吉澤かい……吉澤何うした…… 吉私を助けて呉れ 犬是れ  
は……打ち絶へて居つたか…… 侍「アイヤ……尊公は如何なる  
お人か知らんが此人は罪を犯した故只今城内へ引き参らうと云  
ふ所で御座います我々出役の者だが我に許しを受けずして話を  
あすつては相成りません 犬是れは甚だ粗忽を致しましたお許  
可を願ひます拙者は江戸麻布狸穴に居ります犬上軍兵衛と云ふ  
者で御座います 役是れは……高名の先生で御座いますか然う  
とは知らず失敬を…… 犬御役柄御尤も千万に存じます……扱  
て御出役の方々此者は吉澤一角と申しまして江戸に於て拙者が  
近付の者で御座いますか何う云ふ罪を犯しました者で御座いま  
すか其罪の次第に依つて内分にお濟せの義あらは手前に救つて  
呉れろと云ふおれば捨て置く事は出来ませんから助けたいと存

水天宮利生記

じますが但し内分に相成らん義で御座いますか 役内分にあら  
んと云ふ事も御座いせんが高が此訴人の方で酒食を致し代を  
拂はすして却つて刀を抜いて亂暴に及んだか然し未だ人に劍を  
付けたと云ふ義でも御座いせん器物を損じた位ひで御座いま  
すが訴人が承知して願ひ下を致せば斯所で御引渡をしても宜い  
ので御座いますか 犬夫れは、前が此亂暴をされたど  
云ふのか 男左様で御座います何の位ぬる損着か知らんが何  
うだらう拙者に委して呉んか夫れとも訴へると申して承知せん  
ければ内分にはあらんか 男宜しう御座います、只長い御  
刀を振り縛られますから恐いと存じまして御訴へ申したので御  
座いますか 僅かか銭で御座いますから宜しう御座い升 犬ハ  
……然うか夫れでは是れ受け取つて許可て呉れど何程か紙に拾  
つて與へました 男彼様に頂戴してさうも……濟みません 犬  
夫れて得心か行けば有り難い……聞きの通り熟談行届きまし

水天宮利生記

たから當人を拙者へ下け渡し願とう存じます 役夫れは、  
……然らば訴人宜しいな 男エー……宜しゆう御座います  
御苦勞様で御座います 役去れば尊公へ御下げ渡し申すが……  
吉澤殿何んは浪人でも侍士では無いか夫れに町人の物を無銭で  
酒食して上刀を抜いて暴れ廻るなど云ふは耻かしい事では  
無いが幸ひ高名の犬上生先に出席して此御人の御蔭を持つて城  
内へ引き参られんのだが有難く御禮を申せ……お引渡し申すか  
ら……吉有り難う御座います 役人は皆一同引取りました其所  
を立ち去りましたのを見て吉澤 吉大久保千萬辱け無いお蔭を  
以つて私は助かつた 犬時に吉澤お前は當所に居るのかい 吉  
今は居る……犬斯う遣つて居るかお前は長く居るのかい 吉  
イヤ、今日始めて来たのだ 犬今日始めて来て直くと左様あ  
事をしたのかい 吉されは種々事情の有事だが何うも面目無い  
……犬何と云ふ旅籠か言ひか知るまい 吉少しも知無い真

水 天 宮 利 生 記

暗だ……大私しはお狩、競拜見の爲めに來たのだが何の道今晚  
宿を取らんければあらんが前には別に斯うと云ふ當も無ければ  
同宿するが宜い今晚亦繰りと話を聞き又昔し話しも仕様から  
吉夫れは何うも辱じけ無い何分御座ひ申す、犬何しる此所らが  
宜からうと旅籠を定めて風呂も濟み一盞を傾け乍ら、犬時に吉  
澤困つた者だも……何日もく相變らずじやあ無いか、吉イヤ  
……何うも大久保誠に赤面の至りだ實は私も彼是と思わん事は  
無いけれども何分廻り合せが能く無いので、犬、尊公などは何う  
廻つても仕方がない譯だ……何しろ先刻は能くも聞かんでお前  
の難儀と思ふから錢を出して事を濟したお、吉彼は實は乃公が  
無理と云へば無理だが先さか無理と云へば無理だ、犬夫れあれ  
ば何故彼所で言はんのだ……何うしたのか始めからの話は、吉  
全体是れは囊中自無錢となつて夕旅籠へ泊る事出來無いが……  
尤も久留米に當の有るのでは無、今迄居た處が思あしく無いか

水 天 宮 利 生 記

ら久留米は繁華と云ふから何か有若く事か有らうと空頼みから  
頼たがサ……泊る事か出來ないから山の中の辻堂に寝たの上  
起きて谷際で顔を洗つたが飯が食へない先夜から食わんのだか  
ら腹がペコくになる夜明けに當城下へ來て錢を數へて見ると  
僅かに三十八文しか無い是れ丈で何か食ひたい者だ、鍋、餛、でも食  
へば濟むのだが晝飯の當も無いから何うか飯を食ひたい者じや  
あど覗きく來たが私を訴へた茶屋に價もりの出いた書附が有  
つて飯が幾ら汁が幾ら香の物幾らと書いて有る夫れを計算して  
見ると何うやら斯うやら拂ひが出來様と思ふから飯と汁と呉れ  
と云ふと脇の方に安座を掻て、鍋の酒を飲で居るのに職人ら  
しい奴だ、夫れを見ると拙者急に不満足で有る、犬何が不満足  
だ、吉今日侍士たる可き者が汁を食つて出様と云ふのは町人然  
かも職人が旨然うに鮪鍋で食ふとは不埒……  
も無い錢を出して旨い者を食うに……  
吉其時然う思つた侍士

水 天 宮 利 生 記

はして見ると千日食んでも仔細は無ひから是りや酒の方に仕  
様と思ふから其飯と汁を止めて鮪の鍋ネギヤを一人前呉れ酒を  
一合燗て呉れと云ふたら其詭ひを持つて来たが何しろ久し振  
で一合斗りは無くなつたが未だ鮪が片べら赤く怒も固くて食へ  
無い是りやあ仕様か無いと思つたがイヤ……何うかあるたらう  
と思ふから……一合代り呉れ……へエ……と持つて来  
た……二合目になつて見ると鮪鍋が無くあるが酒が残た……  
……鍋が空にあつたから鍋の代りを言つたが代りを呉れ無い  
内に酒が来る……鮪が残る酒が無くある……鮪鍋が残る……  
犬夫れじやあ最現が無ひじやあ無ひか 吉大きに最現がなくな  
つたが遂ひに鮪の鍋が五人前酒一合づゝ八本飲んで是れから飯  
と云ふて飯が六杯に汁が二杯香の物が一枚 犬食ひも食つたな  
吉充分と不可所から幾らか知んなれども是丈け持つて居るから  
有る丈け其方へ使す是れで勘定しろと云つて財布を拂つて渡す

水 天 宮 利 生 記

と何う致しまして中々足りません云ふから夫りやあ足りな  
らうからも……夫れ丈で無しだ是れ丈より拂へ無い……拂へ  
無いから勘辨しろと……何んでも勘辨しろと云ふと夫りや無理  
だと云ふから夫りやあ無い物を呉ると言ふを延金で遣らうと  
刀を抜いたのだ切る量見も何んにも無いので大方逃げるだらう  
が逃げたら乃公も逃げ様と思つたのだが幾ら振り廻しても逃げ  
る事は逃げるが遠くで危険い……と云つて居る内に隣が裏  
口から訴へたに違ひ無いのだ早くも捕り方が来たのだから役人  
へ手を負せる事は元々無いのだから雷々縛られ様と云ふ所で幸  
ひお前に助けられたのだ賊に早相濟ん譯だお前は偽名を名乗つ  
た様だが 犬私に偽名何ぞ名乗りは仕無い…… 吉お互ひに師  
匠は犬上軍兵衛だが 犬私しは今じやあ犬上軍兵衛なのだ 吉  
イヤト……夫れじやあ御同様の師匠は 犬師匠は種々譯も有る  
けれども詰る所此久留米候に仇をなしたる怪猫を仕止め損じた

水 天 宮 利 生 記

と云ふ爲めに人へ顔向けが出来んと云ふて私しに相續を委して  
置いて御自分は法体にあつて諸國を經歷をすると止めるのも聞  
かすに出立した夫れ故に道場萬端を引受けて私は二代目犬上軍  
兵衛・吉然うか……夫りやあ……始めて知つたが夫りやあ先代  
借い事を仕たが然し今の犬上先生 犬然うあつたら一つ何うか  
何んだは昔からの交情も改めて權次郎を止めて貰ひ度い過いの  
元だらう。と云ふ 吉先代は人を見る事を知ら無い撰に撰つて尊  
公見たいお者に委せる何と云ふは…… 犬オイ…… 吉澤何  
を云ふのだよ差向ひか二人の弟子が居るに目途だと云ふ事を言  
ふじやあ無いか 吉然うさ……是りやあ誠に濟んければも前  
に譲るのは間違つて居る……私に吉澤一角と云ふ者がたが高名を  
犬上軍兵衛の跡を繼いたるれば先の氣性を止めて貰は無ければ  
ならんのだよ 犬食逃げ侍士に意見なんぞば聞かんよ 吉是り  
やあそうだらうが莫逆の間だから言ふのだよ……時に今何しに

水 天 宮 利 生 記

來たのだへ 犬此お狩籠が有ると云ふのだから何か功を立て先  
代の耻を雪ぎ度いのが宜い塩梅に着したか明日はあ狩籠が有  
るのだ 吉私も夫れは聞いて居る 犬お前も一緒に行きなさい  
吉イヤ……私に止そう 犬何ぞ…… 吉食ひ逃げ侍士が行つた  
日にはお前は濟んから 犬夫れも然うだな…… 吉夫れじやあ  
留守で緩りと好きあ肴でも言ひ付けて飲みあさい 吉辱じけ無  
い夫れは何よりの事だ……時に思わす此様處へ來たが江戸へ歸  
りたいがお前狩籠が濟で歸るだらうが弟子にして連れ歸る事は  
出來ないが 犬夫れあれば改めて爲様か前々の舊情と云ふ所は  
打捨つて貰はんければあらんよ 吉お荷物でも持つから 犬然  
んふ物の擔かんでも宜いが然うなれば然うで宜い私が歸つて何  
やら故郷の士になる迄の尽力をして遣るから 吉ア……辱け  
無いと其夜は其儘に寝て仕舞ひましたか翌日お狩籠拜見に行つ  
た時に間違ひを醸します水天宮御利生記の端緒で御坐いますか

次回に述ましよ……

第四席

水天宮利生記

前回に引續きまして申し述べますのが久留米公の御狩競が愈よ  
 當月と相成りましたから早朝より旅宿を立つて犬上軍兵衛には  
 御狩競を見物に参りましたるが先づ其近傍の立山と云ふ所で見  
 て居りましたが中々始まりませんでしたが稍経ちましてから愈  
 よ始まつて参りましたがエー………と云ふ人聲です  
 か御狩競が始まりましたので四方を見ますると左右から向ふ  
 彼方此方と場所を撰んでの鐵砲を打ち出しますすが丁度戰場に望  
 んだ様で御座います今しも一人りの大將が指令等を致しますと  
 又鐵砲の筒先を揃へて打ち出すやうなことにして居りましたが  
 其出立ちは皆簾笠で御座いますだんく………込み入つて来るに従ひ  
 まして皆隊を分れますすが彼方の岩の影此方の木根に身を匿し  
 て居つて鐵砲を打ち出しますすが其様子を見て犬上軍兵衛は善ひ

水天宮利生記

心持ちて見てはみります者の格別面白ひ事も無い者ですから  
 犬何だかさつなり面白く無いかも………少し何か面白いとが  
 來おくつては………と眩やきながら見ておりましただんくと塙  
 所が狭つて参ります………獸物も打たれますから驚き出して  
 ドン………と駆け出しますすが何でも斯う言ふ時には兎が一番  
 先きだと言ふとであります何故か申ししますると兎まつひら  
 ……お先真暗と………何然んな事は言ひませんでしやうか種々の  
 遣り方を致しまして追ひ出します中には得物をしたのも出来  
 て参りますから彼方でも此方でも成丈立派な獸物を捕へて自分  
 の功にしたいと言ふので中々面白くなつて参りました軍兵衛も  
 今は乘氣にありましていませ何か事が起るか知らんと見詰めて  
 居ります尤も御座ると申しまして重に猪狩と鹿狩の様を者  
 で御座いますすがだんく………彼方でも一疋捕る此方でも一疋獲ると  
 言ふ事になりませすから軍兵衛も手出しが仕度いと思つておりました

水天宮利生記

すけれども是れと言ふ手出しをすへき時期も有りません然るに一方の大將が指圖をしますと一同鐵砲を打ち出したので一疋の大きな猪……先づ此所の主とも言ふへき者で御座いませう驕り出ましたは是れには皆驚きました大勢か手を出さうと致しませぬ侍士が向ふの方から駆けて来て大きな猪に向つて鐵砲を打ちました何所を何うしたか鉄砲は幾ら打つても猪の身軀に當りませんで何分猪子は弱るやふには見えません其所で其大將らしめる者が薙刀を打つて躍り出ました猪も今は一生懸命ですから向つて来る此方は長刀を持つてエーッ……と一聲切り立てました猪は其薙刀の下を泳ぎまして其侍士の向穿へ喰ひ付きましたたがサ……後ら切つても振つても離さばる侍士は痛くて堪りません猪は一生懸命の事なれば向穿へ喰ひ付いて之れを振りますから侍士は此所へ倒れて仕舞ひましたたが容易に起上る事も

水天宮利生記

出来ませんから侍早う助けて呉れ……と叫びますが中々手出しはなりません只アッ……と騒ぐヨリで容易に何うする事も出来なくなつて仕舞ひましたたが是れを見て居た犬上軍兵衛 犬扱てこそ時斯の到来……と心得て羽織を脱いで小野傳八に渡し袴の股立ちを取つて飛び出しましたたが猪の後足をばむズ……と握りましたたが猪も驚きましたたが猪の後足をばむしても向穿へ齒が這入つておりますから直ぐには離れませぬ其所で犬上軍兵衛聲を揚げ犬早く其所を切り取り賜ひ向穿を切り取り賜ひと叫びますから彼の侍士もハッ……と心得て直ぐには承知して居ない譯はありませぬが何うも斯う言ふ時には狼狽る者ですから一寸思ひ付きませぬのです犬上に聲を掛けられて心付き直ぐに小柄を抜いて向穿を切り取りましたたが猪は犬上に後足を握られて引倒されました猪が起さうとする所を馬

水天宮利生記

乘りに乗り掛つて打ち取りました。其儘犬上は平氣で當りを見廻しておりました。暫く立つて彼方にある今日の總大将とも言ふ可き人物。是れを御覽せられて大彼は平服ながら凡人に非ず其働さやうと言ひ様子と言ひ決して唯人ではあゝい姓名を聞け……と言ふので近從の者が近ハ……と答へまして犬上の所へ参り近先づ此方へ御出われ殿の御召しで御座ればと申します。から参りますと委しい御聲で御座いますから犬上軍兵衛は犬拙者。此度御狩。鞍拜見の爲めに参りました者で御座います。が江戸麻布狸穴に住んでおります。犬上軍兵衛と申します……殿。然らば此方は犬上軍兵衛と申すか。予が身知りの犬上とは顔は違ふ。だが……犬左様で御座います。先代犬上軍兵衛と申す者は御館へ出入りを致しておりました。が江戸屋敷に於きまして怪猫を打ち損じました。故人に顔向けもあらんと申しまして身は法師と相成り諸國遍歴と言ふて出掛けました。に依つて拙者が其跡を繼

水天宮利生記

ぎまして即ち二代目の犬上軍兵衛で御座います。殿ハ……左様で有るか。然らば此方が二代目の犬上軍兵衛か。併し今日の働きは中々天晴れを働き決して先代の犬上軍兵衛に優るとも劣る事はあるまい……是れより先代同様出入を申し附ける。犬ハ……此上も無き難有き事に存じさす。御座を申し上げて居ります所へ一人の侍士が参りました。から犬上は此侍士の顔を見ましてハハ……是れか先刻猪の爲めに向穿を喰ひ付かれた奴だ。わいと思つて居ります。杉。是れハ先刻のお侍士飛んだ。御難儀を掛けました。が御座を申し上げます。拙者は當家の家臣。杉本六郎と申す者で御座います。が何分此以後とも宜しう御願ひ申します。と申し述べます。と犬上軍兵衛は是れを聞きまして扱ては是か江戸のお屋敷で怪猫を爲遂げた杉本六郎であるか。然らば自分を取つては養父の仇。且は師匠の仇敵で有るが助けるではあかつた。思ひました。が夫れは後の祭り。で仕方が無いが胸の中は



水天宮利生記

何としたり宜からうと思案をして居りましたが犬上軍兵衛は  
犬如何にも杉本六郎殿は豫て江戸の御屋敷に於いて怪猫を爲遂  
げたと云ふ事を承はつて居りまして大層立派な方と心得て居  
つたがイヤ……どうも見るど聞くとは大變な相違で貴殿は猫の  
豪傑だか猪には弱ひ猫の豪傑で有る……と胸に一物有る事です  
から御前も憚らず頭から杉本を耻しめましたがさあ……杉本  
も御前に於て耻しめられたのですから黙つても居られせん故  
杉本は奇怪な事を仰られる者か今日狩場にて一命を救はれ  
ましたのは重々辱けあいが君前を憚らず左様な事を仰せ有るは  
心得ん猫に強く猪に弱くとも猪に強く猫に弱くとも夫れらの事  
は武士の意にかいす可き事では御座らん御馬前に於て功を立て  
るか武士の本分であると存するが人同士おれば決して一歩も譲  
りません……と杉本六郎も侍士の身分として黙つて居られませ  
ん所から申します 犬人同士おれば一歩を譲らんと有ればお手

水天宮利生記

合せをお願ひ申します……御前に於ても御許しをお願ひ申上げま  
すと云ひますと丁度御前の脇の方に居られましたのが有馬登岐  
と云ふ家老でございませが是れが一体杉本最負の者で有りませ  
から杉本の手術を現はして今日の不覺を取り返させやうと言ふ  
考へが有りませから 有如何にも兩人今日は御前も丁度此所に  
居られるに依つて此所で互ひに手合を許す……と云ふ事で然ら  
ば道具をと云ふので是から早馬で城内へ蒲英附きの鎗木刀を取  
りに参ります頼て兩人は立ち上つて仕度を致します 杉本公は  
一鉢何を持つて仕合をなさる考へで御座います……何ありと尊  
公のお好みの者を差上げますから 犬然らば拙者は鎗を持つ  
て立合ひを致さうと兩人共仕度が出来ましたから犬上軍兵衛は  
鎗を持つて出る杉本は木刀之れも仕度が出来ましたから身構へ  
に及びます暫らく見合つて居りましたが犬上が 犬エー……と  
ツ……と突き出す鎗先を杉本はハッ……と受け止め返す太刀

水 天 宮 利 生 記

で犬上の手本へ切り込みました。杉本は犬上の小手を打ち上  
したからバラリ……と犬上の鎧は落ちて仕舞ひました。すると犬  
上軍兵衛は「犬エー……ヤッ……」と言ひながら其所に御座りま  
した。木刀を取つて向ひました。見物の者どもは「犬ヤッ……」と  
上卑法では無いか鎧を取られたら負けたも同然だ……乙も  
駄目だ。廢せ一旦負けた者が又木刀を持つて掛る奴が有る者か止  
めるく……ビワイ……騒いで居りますから杉本が「杉イ  
ヤ……お捨置きさい拙者は何でも相手を致しませうからと申して  
居ります」と犬上は「犬イヤ決して卑法では御座らん鎧を取れた  
から直に木刀を持って戦ふたので御座る若し之れを卑法だと仰せ  
られるなら戦場に於て何うおさる鎧を取れた時は直と公方で  
も刀を持って切られるのでは御座らんか……さすれば卑法では無  
い甲卑法だく一旦敗て置かば左様を事を申しても駄目だ  
此所と戰場とは違ふでは無か杉イヤ……お捨置き被下決して

水 天 宮 利 生 記

拙者搦みませんから何なりと相手を仕まつりませうからと云ふの  
で見物も黙つて見て居ります。双方互ひに見合つて居りました  
か此度は両方が木刀で有りますから暫くは發失く……と交へ  
て居りました。杉本の木刀が一等高く杉エー……お面……と  
行く所を外れて小手を強く行きました。犬上は木刀を又落し  
ました。犬上軍兵衛は無手になりました。杉本の手元へ繰込  
んで参りました。突然杉本に抱附きました。杉本の手元へ繰込  
は又々大騒ぎとありました。甲犬上軍兵衛卑法だく一旦鎧を  
取られて負けました。又木刀を持つて向ひ夫れも取られて仕舞つ  
て此度は柔術を以つて掛ると云ふ事か有る者か卑法だく……  
もう杉本殿お構ひなさるな乙駄目だく……止せく……とて  
叶ふ者では無いか。又負けるぞと云ふから軍兵衛は「杉本殿も  
向ふ向はも見物は丙柔術で負けるぞ犬上軍兵衛……杉本殿も  
お構ひなさるなと云ふ犬上軍兵衛は「犬イヤ……決して卑法で

水天宮利生記

は御座らん木刀を取られて柔術で以て向ふのは是れ當然まいの  
とである決して卑怯では無い 里駄目だ〜と云ふて居る内杉  
本と犬上の兩人は暫くの間桃合ひまして下にあり上にあり組打  
を致して居りましたか遂々犬上軍兵衛は組伏せられて助けませ  
ん……何うする事も出来なくなりまして地をばドン……と叩き  
ました一休此柔術と申します者は取けた時に下をトン……と叩  
くのは一ツの法だと云ふ事で御座いますか夫れは喉を締められ  
て居りますして口か利け無い事か有りますので地をドン……と  
一ツ叩くのです然うすると取けたと云ふので手を離すと斯う  
云ふので御座いますか犬上軍兵衛も遂々負けまして面目無く其  
所を立つ事が出来ませんで暫く其所に愚圖……して居りま  
したのを御前が見兼ねて 殿是れ……犬上軍兵衛成程今の手術は  
杉本六郎に劣ると雖も先刻の働さには中々立派な者で有つた決  
して其方が弱い譯では無いぞ……矢張り先代通り出入を申付け

水天宮利生記

るぞ……と言はれまして漸やくそれを機にツと軍兵衛は御前に  
向ひまして ○御前の御言葉重々有難く御禮を申し上げます今  
日は飛んだ無禮を致しましたと一禮をして鼠狐〜にして後を  
も見ず旅宿へ立ち歸りまするが是れより杉本六郎に意根を持ち  
まして吉澤一角と云ふ者の手を借りまして杉本六郎を討ち取り  
まする下りは次回に……

第五席

サテ旅籠屋の奥屋敷では吉澤一角今朝から獨りで肴を取寄せて  
酒を飲むで居りますとやがて其の時分の八ツ只の午後三時  
頃に相成りましたが未だ犬上軍兵衛は歸りが無い吉澤一人で  
ビリ〜……飲むで居りまして随分泥酔して居りましたが暫く  
して立歸りました者が犬上軍兵衛後とに續いて小野傳八と高柳  
點之丞此兩人で御座います 吉是は〜犬上先生お歸りで御座  
いまするか今日は誠に御苦勞千萬とうなつたねお狩遊は面白が

水天宮利生記

つたかね別に變つた面白とも無かつたかね……と問ひ掛けま  
するが只其處に突立つてニかり切た顔をして居りまして犬上軍  
兵衛は吉澤に向ひまして 犬お前昨日何と約束をした以前は共  
に師匠の所に居つたのだが何處までも舊友と云ふ所は捨て、乃  
公の弟子にゑると言つたじやあないかそれには師匠が歸つて來る  
のを向ひもせず泥酔して居るとは奇怪からん然る事では江  
戸へ連れて行かれんから 吉是れは怪しからぬ小事を言者だ……  
成程それは都合に依つて行けと云ふから行きもしやうが一体ど  
う云ふ譯おんだい大分顔色も悪い様だ…… 犬何んでも宜し  
いから早々行つて呉れ一サー…… たつた今行つて呉れ 吉一体  
お前の様な者はないよ何たつてそんな事を言ふのたる昨日もそ  
う言つたぢやあないか食ひ逃げ侍士が尾いてお狩獵を見に行つ  
てお前の名譽に關はる様あるとを仕出さしては仕方がないから  
一緒に行くのは止そうと言つたよ何に一人で差支はないから手

水天宮利生記

前は此家で酒でも呑んで居つてと言つたぢやないかそれでも何  
か不都合な事でも出来たのかい 犬何出て行くものには何ん  
も言はなつても宜しい…… サアたつた今立て行つて貰う 吉  
それは成程お前の弟子と私しはあつたのだから小言を言われる  
譯があるなら幾らでも小言を言つても厭はぬいかに何んにも無  
只だ小言を言ふてゐるのは無理な話だそう云ふ無理な事は無い  
が夫れも幾ら言はれても仕方がないとして譯の解かる迄は行  
きませぬたつて追出せば又直ぐ歸つて來てそうして其譯が解る  
までには行かない解かりさいすればそれは行かないとも限りら  
ないが一体どう云ふ譯かあるんだ 犬何も行つて貰う者には譯  
を話すにも及ばない早く行つて呉れ若し行かんと言つたつて  
吉それは追出したつて歸つて來るそんな無理な事を言つたつて  
仕方がないが何か今日お狩獵拜見に行つて不都合の事でも出来  
たのであるかいお前にも是迄も能く言つて置くのだ舊大保久と

水天宮利生記

は違ふ心持でなければあらいつて……本職に是迄だつても女  
郎買ひに行つて女郎に振られて来て妹や何か頭を撥飛ばしたり  
何かする氣性で實に困つた者だつたがアマ……一体どう云ふ  
譯もんだい定めし今日お狩競の場所では何かあつたに違ひない又  
それが爲めに不都合な事でも出来たのあらお互ひに相談もしや  
うふ手助をもしなればならぬが……犬それはどうも少し  
……此所では話せん 吉そんなら何處かへ行つて話のかい……  
何處だつて同じ事だ矢張り此處には小野丈けるのだから差支へ  
あいちやあいかマア、お狩競はさうだ面白かつたか 犬ア、  
……随分面白かつた一人の奴が大きな猪に向穿を喰はれて長刀  
を持って切らうとしたけれど中々切れなかつた 吉成程それは  
面白かつたそれから 犬それから誰れも助けに出る者がない只  
傍の方でワイ／＼騒いで居る斗りそれから己れが飛び出して遂  
々其猪を殺して仕舞つて其侍士を助けてやつた 吉それは至極

水天宮利生記

結構の御手柄だつたぢやないかそんなら然う怒らるゝも宜い  
ぢやないか 犬所がそれからどうも…… 吉それからどうした  
のだ 犬それから御前に其事を申し上げた者があつたと見へて  
お呼び出しにあつた 吉それは宜あつた 犬それから御前へ出  
て何れの者かと云ふから江戸の者は是々斯う云ふ者で此度の御狩  
競を拜見に参つた者だと云ふとそれはさうも先代犬上軍兵衛か  
らして御出入りもしたと云ふから其方も今日の手柄に依つて矢  
張り御出入りを仰せ付けると云ふとであつた 吉それは至極結構  
なとだそれ腹が立つのか 犬所が其所へヒョイ……と来たの  
か御狩場を猪を殺して救つてやつた侍士よそれの云ふ事には  
自分杉本六郎と申す者で今日は一命をお救ひ下さつて有難い  
と云ふが其杉本六郎と云ふのでムッ……として仕舞つた 吉ハ  
ア……成程そいつは面白い奴に出會ひしたものだ……杉本  
と言ふ名でも氣に入らぬのか…… 犬杉本六郎と聞いて口惜く

水 天 宮 利 生 記

思つたのか先代犬上軍兵衛の敵さだからさうか御前に於て此奴  
を融ひ目に遇はしてやらうと思つて……探ねて御高名を承たま  
はつて居たがさうも見ると聞くどぢや大變の違ひだ貴殿は猫の  
豪傑だか猪には弱いと云ふと向ふか怒つて人同志あれば負けん  
と云ふからそんなら手合せを遣らうと云ふと先方も立ち上つた  
から幸ひ此方もさう思もつて居た所だから如何に御前に於い  
て立合うと云ふと御前にもお許るしにあられて其處で立ち合つ  
たのヨ 吉をいつは面白かつたそれから何にを以つて仕合をし  
た 犬始め鎧を持って仕合つた 吉向ふは何にを持てした 犬向  
ふは木刀で立ち合つたが向ふに鎧を取られて仕舞つた 吉さう  
だらうそれからさうした 犬それから直ぐに其處にさつた竹刀  
を取つて向ふた 吉夫れは不可ないな……夫れからさうした  
い 犬さうした處ろが其の木刀も取られて仕舞つた 吉それぢ  
や仕方たか面白いな…… 犬それから此ん度は柔術を以つて負か

水 天 宮 利 生 記

かしてやらうと思つていきなり向ふへ組み附いた 吉鎧や木刀  
では負けるだらうが柔術では勝つたらう 犬それが…… 吉夫  
れがさうしたい…… 犬夫れはさうは行かなくつて遂々組み伏  
せられて仕舞つたそれで仕方がないから…… 吉仕方がないか  
らさうした 犬仕方があいかから降参しちまつた 吉夫れや仕方  
がないそれだから是迄も能く言つて置くのだ今は犬上軍兵  
衛だから其氣にあつて舊の大久保の氣を捨て仕舞はさくつちや  
あ不可ないと云ふのだ—— けれど鎧を捨て持つと云ふのが生  
意氣と云ふものだ其位ぢや向ふは未だ中々強い奴に違ひない  
てもお前等の腕ぢやあ駄目だ 犬駄目でも何でも宜い是れから  
己れも盪見があるからお前先に歸れ 吉成程そりや先に歸  
るまいものでもあいか何だい自分の量見とは 犬そりやあ  
前達の知つた事ぢやあい 吉それが不可ないと云ふのだ只自分  
で獨り極めに極めるから此度のやうあとか出来るのだそりや

水天宮利生記

り方に依てと共に力を尽さなければならぬが犬をうしても杉本六郎を無き者にして此恨みを晴らしたいのだ能く考へて見て呉れ先代の養父にも仇ども言ふ可き者であるそれを加へて此度の事を何うしても杉本六郎を無き者にして……吉最もそうだ先代の仇とすれば矢張り張己れたつて師敵だか併し向ふはそれ程の達人をうして殺す積りだ犬夫れは仕方があるから闘打にするのだ吉成程をりやさうするより外はない……さうするより外は前の方が危険だもう杉本がお前に恨を受けたと云ふもどは皆知つて居るさうすると途中で杉本が怪我をしても或は犬上にやられたのでないかと思ふ此方へ疑が掛つて来る様あ者で杉本を殺さぬ方も疑はれて縛まりでもすると無駄な話だ夫れより斯うした方が宜からうと思ふ犬どうするのだ吉お前は先きへ此城下を出立してちやんと江戸へ歸る方が宜しい其後に己れが

水天宮利生記

殺つて居つて杉本六郎を殺して仕舞ふのだ犬成程をうして呉れれば有り難い吉何ても杉本を無き者にさへすれば宜いのだからさうすれば決してお前に疑の掛る道理もなし第一此處を出立したと云ふと皆んな安心して居る様にあるから其處を覗つて居て打たうぢやないか犬成程夫れは至極宜からう……夫れはやあ義に依つて仕て呉れるか吉義に依らあいな金に依らう己れも是から此城下に居る事であるから金も中々要るから金で極める事に仕様ふ犬成程其方が何にも關係がなくつて宜らう……併し其金と云ふのは幾くらだ吉……先づ百兩だあ犬百兩ぢやあ……少し高いぢやあいか吉そりや高い事はあるまいて人間一人を殺す代だもの百兩は高くはあるまいぜ犬そりや少し高い七十五兩に負けて呉れ吉七十五兩……そりや少し安すいあ何と言つても人間一人を殺すんだから……併し手を打とう宜しい七十五兩で請負つた犬どうか夫れでやつて

水天宮利生記

呉れ……併しそれ今七十五兩は持て来てはあいが……吉を  
りや宜しい今此所で何かに就て入用があるから廿五兩丈け買つ  
て残り江戸へ歸つて買らう事に仕様う兎に角七十五兩で請負  
つたのです當時は請負と云ふとは頻りに流行ますが人殺しの請  
負と云ふ事は聞いた事は御座いませぬそれから犬上軍兵衛子弟  
二人は至日仕度を整へまして江戸表へ出立を致しませぬ其後に  
發りまして吉澤一角は城下を彼方此方と宿り歩きまして何と  
して一時も早く杉本六郎を殺して犬上にも悦ばせたい自分も  
金を貰ひたい者だ頻りに杉本の様子を窺つておりました又杉本  
の方には於ても御狩競の時犬上軍兵衛を酷い目に遇はして置  
したから中々油断はありませぬハヤ其年八月と相成ります  
と此月には年々壹岐老人方で多くの人々を集めまして月見の宴會  
を開くのが例にあつておりました杉本も宜い鹽梅に酩酊いたし  
まして七八人の友達を連れ立ちて立歸ります途中杉本が杉

水天宮利生記

各々方拙者は茲で一守御免を蒙る事に致さう 甲イヤ杉本殿  
何か他に御用のあると云ふので御座いまするか 杉左様拙者は  
承らく此水天宮を祈願してありまして日參を致しませぬが今日  
は此の宴會に就いて日參を欠きましたから各々方に御分れ申し  
て是より水天宮に參詣致す心得で御座いまする 友そりや杉本  
御尤もでは御座いまするが今日は大分酩酊してあると有るか  
ら明日になされては如何で御座いませう 杉イヤ……夫れでは  
御本社に對して甚だ無禮の事である依つて各々方御分れ申すと  
一同と分かれました杉本六郎は一人水天宮に參詣に参ります  
豫て此事を聞き込んでありました吉澤一角何でも日參をする  
云ふ事であれば水天宮様の近所へ参るに違ひあるまいと毎日々  
々附視つておりました水天宮の近傍で待つておりました杉本六  
郎丁度今日も吉澤は水天宮の近傍で待つておりました杉本六  
郎大分酩酊の姿で參詣に参りました成程今日こそは宜い鹽梅に



水天宮利生記

醉つても居ると思ひますから参詣を丁つて歸る後を附けて参り  
まするが中々打たうとする透かおさいません遂々お屋敷迄附い  
て参りまする願て門の所へ参りまして門を叩き 杉俣只今立ち  
歸つたぞ門を開けい〜……………と呼はりまする家内にては小六郎  
が 小お父様で御座いますか只今開けますると母と燈火を点し  
て居る……………杉本六郎はもう家の門迄來れば大丈夫と安心をした  
者か門の所で 杉本一今夜は實に宜い月だど何心なく月を見て  
居りまする處を吉澤一角後ろよりエー……………ヤツ……………と頭から梨  
割に切下げましたさうも安心して月を見て居た所で御座います  
から堪りません杉本六郎は何とも言はずに刃の鯉口を切つた儘  
倒れて居ります小六郎は燈火を持つて門を開て見るとサア……………  
大變父上は血に染つて倒れて居ります 小お母さん大變な事  
で御座いますと云ふから母も飛んで出ます此体を見兩人なが  
ら只泣く平りで何んとして宜しいか分かりませんか丁度其時分

水天宮利生記

横田何某と云ふ者目附役を勤めて居りましたが是れへ通り合せ  
て始終の様子を見て此段を上申に及びます主公に於ても杉本  
が刀の柄へ手を掛けておつたのですからお咎めもあつたです  
……………扱て俣小六郎は母と共に涙ながら父上の死骸を葬むるとに  
相成りまする一体此の武士と云ふ者は人に殺されても前より受  
けた傷ならば宜しう御座いますすが後ろから受けた傷だとお扶持  
を取上げられて仕舞います此杉本六郎も成程後ろから切られ  
た傷には相違なければ仕舞います此杉本六郎も成程後ろから切られ  
きかけてありましたからそれに依つてお扶持は取上げられおく  
て元々通り小六郎母上どもに何事もなく其處に居る事に相成り  
まする是より小六郎母上は何者の行爲であるか是非とも探し出  
して父上の敵を打ち殺す世に御座る父の恨みを暗さんで置くべ  
きかと更に水天宮様へ祈誓を致します如何なる雨降風吹きて  
も厭ひませず日々の日参は怠たりません此方の吉澤一角は餘り

水天宮利生記

早く七十五両の働きをしだが是れで江戸の犬上の所へ行つてや  
るのには宜いが併し此儘にして置くに矢張り俸の奴が敵打と言つ  
て出るに違ひないそのなつて来ると自分の身まで五月蠅からい  
つその事俸まで何にか工風をしてやろうすれば犬上とても  
大變に欣ぶたらうから廿五兩位は増して呉れるだらう兩方に宜  
しい事に成ると吉澤一角は慾の爲めに又も此地を離れず遂々天  
命は逃れ難く致しまして捕縛さるゝと云ふ事に相成りまするが  
そは次回に

第六席

就いて申上げます吉澤一角は杉本小六郎並に母が一緒に水天  
宮様に祈願をして毎夜水天宮様に夜参りをすると云ふ事を聞き  
ましたからいつそそこ親子とも打取つて仕舞はば安心する事  
が出来ると毎夜のやうに現れてゐまするが中々宜い塩梅に参  
せぬ今夜も小六郎は母と共に水天宮様に参詣を致しまして我家に

水天宮利生記

歸り交したたが小是はしたり母上飛んでもあいな事を致しました  
母何をしたのだい小今懐中を改めましたら紙入が御坐いま  
せん大方途中で落したので御坐いませう母へ……さうかへ  
そんなら早く途中迄行つて見て来なさい又ひよつとしてあるか  
も知れぬいから小ハイ……と答へながら小六郎は今しも歸り  
ました道中を彼方此方と見探して参りましたが遂々水天宮様の  
御本社在所迄参りまして御坐いませぬ仕がなから小六郎は  
家へ引返しまして小お母さん御本社在所まで行つて見ました  
が遂々ありませぬ母へ……さうかいそれでは後どから直ぐ  
に人が通つて拾つたのであらう小直ぐに此夜の内に届けて置  
く事に致しましたしやう母宜いや……備かの間なれば明朝届け  
する事にしたら宜からうと云ふので小六郎も母上の言ふとであ  
りますから其儘にして其夜の寝に就きまして御坐います此  
方は吉澤一角で御坐います今晩は例に依りまして御本社近

水 天 宮 利 生 記

傍にうろくしております何やら足に障りましたから拾つて見  
ます……吉イヤ是は紫の福紗包だはいと取上げて見ますと  
紫の小風呂敷に包んである中は紙入れを御坐いまする吉イヤ  
……誰れが紙入れを落して行つたのた何か中に遣入つてへやあ  
しないかと紙入の中を改ためまする吉イヤア……金が遣入つ  
てやがら……三兩と二分二朱……貧乏を奴だかア……併し宜  
い都合だ今晚は始めから斯ふ云ふ都合では中々うまひぞ……何  
んだ名刺が一枚……杉本小六郎……ハッア……杉本小六郎め  
紙入では今夜ももう夜参りを済まして歸り掛けに此所へ落して  
行きやがつたのかももう少し早ければ宜かつたな……何しろ今夜  
は縁義の宜い晩だに依つて何かうまい仕事はないかと言ひなが  
らに紙入を懐中に入れまして水天宮の本社の方へ参りますと  
水天宮様の別當の小使が御本社の表門の方をめてしまつたが裏  
門の扉を締める音がギエ……トンと致しました喜成程今小使

水 天 宮 利 生 記

お寝やうとする所か兎に角水天宮様は大分参詣があつて御供物  
や上り物なごも澤山にあるから随分一仕事にならん事はあるま  
い此度は杉本小六郎の方は其方除けになりましてムラ……ど  
悪心を起しました素より善からぬ性質では御座いますから只今  
別當の小使がメたのを見ておりましたから其裏門の扉を押して  
見ましたけれども中々開きませんやがて輪鍵のある處をも心得  
ましてマチン……と刻ねましてギエ……と押すと扉が開きま  
したから是から遣入りまして中庭に遣入りまして幸ひ廊下の雨  
戸が細明に開いておりましたから其所から遣入りまする吉イヤ  
ヤ……是れは客間か……アヤ……此所は小使の居る處か……ヤ  
ア……是が此別當の坊頭か是が坊主の居る處に違ひない絹布  
の夜具だム……此單笥の中も金があるに違ひない吉イヤ  
……此單笥には金はある大小がある好しく是れを坊主の枕元  
へとスフリ……と突立てました小使は裏門をゆるや否や寝

水 天 宮 利 生 記

て仕舞いしましたから更らに知りませぬ殊に和尚の居間とは離れ  
ておりますから分りませぬ其他の簞笥を探します 吉  
ヤ 此簞笥は札の拵へ掛けか一杯這入つて居るは何にも  
ヤ 此方の簞笥に御供物が一杯這入つて居るのか知らん三番  
らんわい……此方の簞笥に金が這入つて居るのか知らん三番  
の簞笥の錠のかゝつて居るのをエーッ……と一際高く聲を揚げ  
まして錠をぬきましたから此物音に和尚目を醒ました 利チャ  
ッ……是はしたり盗賊がマテ……と獨言を言いきがら絹布の夜  
具を刎除けましてソーン……と次の間へ参り長押に掛けてお  
る長刀を執り振足にて吉澤一角の後ろへ廻わりエーッと一際高  
く切付けます吉澤は無手で御坐いますからいきなり坊主に  
組付ました坊頭は身体を引きまして長刀を以て切り付けました  
が吉澤も今は一生懸命坊頭の手元へ繰込まして遂々坊頭を組伏  
ますと其内に坊頭の長刀を取ました何も辨慶坊頭に長刀を

水 天 宮 利 生 記

ありまするが坊頭に長刀は能く似合つたものと思ひます併し  
其長刀を取られて仕舞は少しく似合ひ申しません坊頭は  
遂々組み伏せられまして長刀を取られましたから自分の長刀で  
自分切られる様事相成りました此物音に驚きまして小使  
のお爺此處までは馳せて來ましたがハヤ腰が抜けて仕舞いまし  
た 小使ヤア……大錠だ……早く皆んが起きないか……早く  
と御本社別當は大騒ぎに相成りました吉澤一角は斯は  
一大事若し捕まつては折角の謀計も水の泡だと後を見ずし  
て逃げて参ります別當の方では此由をお上へお届けに及ぶと  
言ふ大變の事に相成りましたが別當所の訴へに依りまして奥山  
大學と言ふ人が御出張被遊れましたら……と其様子を取調べ  
ました何がとて手掛りも御坐いません一ツの紙入が落ちてをり  
ました能く中を改めますると金が三兩と二分二朱をそれに名刺が  
一枚ありまして杉本小六郎と書いてあります是を見奥山は先づ

水天宮利生記

兎も角も死体を引取らせまして役所に立ち歸りました後とでは  
仰せに従ひまして和尙の死体を葬りませぬ一先づは紙入に這  
入つてありました名刺が嫌疑とありましたが奥杉本小六郎を  
召捕りに参ります下役へ「畏まりましたと直ぐに杉本小六郎  
を召捕りに参ります小六は是れ」もうしお役人様決して私  
はお役所へ夜中召し出されるやうな悪事はあり……下役「ア  
ヤ……申譯は役所にて聞く早く立へ……」母「是れと皆さん方何  
事で御座いまするか……」下役「お手前共の知つた事でない……  
小六お母さん御心配を遊ばす身に覺へのをい以上は如何ある  
事でも恐れれぬ致しませぬ何れ疑嫌も晴れて歸ります程お決して  
御心配なさいますか母何事かは知らねども能くお役所へ  
参つて申上げるが宜しいと親子の涙ながらに立別れまして小六  
郎は御役所へ引立てられませぬ奥山大學はよもや杉本小六郎の  
行爲ではあるまいとは思ひまするけれども是れが一つの手掛り

水天宮利生記

ともあるかど先づ小六郎を呼び出しました奥奥山小六郎役向  
きである故取調べを致す小六「ハ……何の御取調べに御座い  
ます奥手前は今夜水天宮御本社に於て賊を働か居つ  
たな加之別當所の和尙を殺して仕舞ひ甚だ以て不届千万よもや  
汝は左様な事は致たすまいが何うじや……」と云ふのは是が一ツ  
御役人方の計略だと云ふ事で御座ります頭を大冠せに冠せて  
見るさうすると全く罪を犯した者とさふでない者とが顔色で分  
るさうでございます小六「是は役人様以ての外な事を被仰ま  
す決して斯やうなとは存じませぬ奥存せぬとあれば夫れで宜  
いが手前は紙入を落したとがあるか小六「左様今夜水天宮へ参  
詣の歸り道でつい落しまして御座います奥何故今夜落した  
者を今に以て届け出さん未だ此方にはさう云ふ届けは出ては居  
らな小六「左様で御座います實は早速御届け申さうとは存じ  
ましたが如何せん夜分の事では御座いますし殊に僅かのも

水天宮利生記

で御座いまするに依て明朝にあつて届けやうと云ふ所存から致  
しまして遂々遅れて居りまして傍座いまする奥ム、それは何  
れにしても宜いおどろして確然と証據がある即ち別當所に紙  
入が落ちてあつた其紙入の中、杉本小六郎と云ふ名刺が一枚あ  
る以上は……それは途中にて落したなと云ふのは迷言葉と云ふ  
ものぢや……是が現在別當所へ落ちてあつた証據だおどろちや  
ッ……と一枚の名刺を差出されましたけれど小六郎に置きま  
しては決して覺へのないと御座いますから若氣の勢で勃つと  
致しまして小六郎は以ての外詮義で御座います成程それは  
私の名刺に相違御座いません相違御座いませんが若し途中に相  
落つてあつたものを其賊か拾つて別當所へ持て行て落したのかも  
知ますまいそれを一概に名刺があるらと言て其罪人は私極  
つて居るとはそれは以ての外御詮義であると言おければなりま  
せんと若氣の勢ひに委せて言ひ放ちましたから奥山も素り小六

水天宮利生記

郎おしては斯やうなとをすべき道理があると思つて居るので御  
座いまするが奥何れおして猶委しく取調へると其儘小六郎は  
留置所へ入れられました一体此の留置所へ入れなくつても宜い  
のでありまするが餘り小六郎か言ひ過ぎたもので御座いますか  
ら奥山が留置所へ入れる事と致しましたと云ふ言ひ過ぎと云ふ  
者は悪い物で御座います此方では小六郎の母は小六郎が役所へ  
呼ひ出された儘幾ら待てども歸つて来ず如何な事に成行くもの  
か女心の何となく心細くなりました殊に水天宮様へ日參をした  
のもどうかして夫の敵を知らしめ下さる様と祈願を込めて居つ  
た所へ却つて水天宮様の別當所の事からして斯ふ云ふ間違ひの  
出来た事でありましますと寐ても起さても出られませぬいきなり  
我家を飛び出しまして水天宮様へ参り御本社の前へ脆づきまし  
て母如何に水天宮様手前供家内に於きましては夫の此世に在  
ります時分より家内安全を祈りそれからふとした所から夫も彼

水天宮利生記

の難義を受けましたとぞうか致して水天宮様の御利益を以て夫の  
敵を知らしめ賜るやう親子ども 毎夜飲さす夜参りを致して  
居りましたそれに此度ハ然かも御本社御別當所のとから俸小  
六郎迄が此難義で御座います水天宮様は難義と云ふものを助  
け下さるのか御役目と心得ますに餘りと言ひはる情けない水  
天宮様此上はとぞうそ水天宮様の御利益で夫の敵の見附かる様  
の疑ひの晴れます様呉れ 御願ひ申しますと云ふ情けないや  
をお聞き下さる様願ひ申しますと女心の愚痴として情けないや  
ら悲しいやらで何事かを繰返して 一心に祈願を致したま  
する成程小六郎の母が申します通りそれだけ一心を込めて祈  
願をしまして少しもお守り下さらぬでは水天宮利生記と言  
ひまするがさうでなく水天宮不利生記にあります尤も水天宮  
様も江戸の御屋敷の方に支社が御座いますから其方へ参つて  
留守の時もあるかも知れませんが杉本小六郎親子は今是一家の

水天宮利生記

災難を受けまして何とも致す事は出来ませぬが此處に又年來水  
天宮様を御祈願遊ばした功徳のある所でも御座いませうが是れ  
からは水天宮様の御利益を以て小六郎が嫌疑の晴れます又父の  
敵を見出して愈々父の敵を打取る迄は暫らく御座いますが一  
一服.....

第七席

さて杉本六郎の母は庚申塚迄立歸りますと後背から 吉「オイ」  
.....其處へ行くのは杉本小六郎の母ぢやあなにか.....杉本の阿  
母ちよつと待ちなさいと聲を掛けた者があります今迄人と呼  
ばれましたにハ奥様とか御新造様とか言はれて居りましたので  
すから大方人違ひでも有らうと思ひましたから行き過ぎやうと  
致しましたすると又 吉「お前は杉本の母では無いかと呼ばりま  
すから一寸と振り向きませると一人の男が 吉「お前は杉本六郎  
の連合小六郎の母では無いか 母「ハイ左様で御座います.....

水天宮利生記

して貴方は何誰様で御坐いまするか 吉お前の方じやあ知らる  
いのは尤もだが乃公の吉澤一角と云ふ者であるが斯う名を言つ  
てもまだ分るまいが先達お前の連合を殺した者だよ…… 母エ  
ッ…… 妾の連合を殺したのは…… 吉サア…… お前の連合六  
郎を殺したのは乃公だが懸まれて殺したのが夫れは犬上軍兵  
衛と云ふ者で先達つて御狩殿の時遺恨を持ち何うしても無き者  
にして其恨みを晴さうと云ので犬上軍兵衛が此土地に居て遣る  
事か出来なからと云ふので乃公が金で引請けて六郎を殺して  
仕舞つたのだ…… 母然らば妾の夫六郎を殺したのは其方で  
あるか…… 吉如何にも拙者に相違無いさうして此儘にして置  
けば伴小六郎が敵討ちとか何んどか五月蠅くつて仕方が無いか  
ら親子諸共我手に掛けて遣らうと思ふから毎夜く 水天宮様へ  
夜参りをするのを規つて居たが中々好い時期が無かつたが此間  
紙入を落して行つたのを拾つたゆゑ別當所へ泥棒に遣入つた其時

水天宮利生記

よ跡の証と落ちて来たが夫れが爲めに小六郎揚屋に入れられ  
たのか何う心配しても小六郎は歸つて来る氣遣ひは無いがして  
見ればお前一人が家へ残つて居たつて仕方が無いから親子三人  
ながら乃公の手に掛けて彼の世へ旅立ちさせて遣るのだと口お  
委せて罵りましたら胸が一杯になつて仕舞ひましたけれど口お  
且つ口惜くつて胸が一杯になつて仕舞ひましたけれど口お  
ら杉本六郎の妻ですから 母夫の敵き我子の恨み覺悟に及べ  
……と隠し持つたる懐刀を抜き放しエーッ……と一聲切り附け  
まするから吉澤一角は 吉何を小癪か……と無名の長物を引き  
抜き互ひに了々發失と打ち合ひまして御座いまするが何しろ此  
方は女のとて御座いますれば大膽者の吉澤一角の爲めに既に斯  
うよと見へましたが何條以て堪る可き此所へドッ……と打ち倒  
れました直ぐに吉澤は馬乗りになり掛つて 吉ア……可哀  
想あるものだ親子諸共我手に掛つて相果るのかと今や刀の切先き



水天宮利生記

を咽喉へ突き立てやうとする是れを先刻より様子如何にと見て居つた一人の侍士突然後背から襟髪掴んでエーッ……と一聲一角をば取つて投げましたから吉澤一角は蹴斗切つて二三間遠くへズンデンドー……と倒れましたが起き上らうとする所をエー……と急所を強く締めて押へ附けましたから何うする事も出来ません杉本の母は直ぐに起き上りまして地平太へ両手を突きまして母是れはく何誰様か存しませんが頼た災難に遇ひます所をお救ひ下されまする段紙に難有存じますがお蔭様で一命は助かりました侍、……危い所で有りましたか別お御怪我の無かつたか母、ハイ……有り難う存じます侍拙者は水天宮へ夜参りを致さうと心得て今此所へ通り掛ると今の騒ぎ故御助勢を申したか拙者は薩摩の藩士日高六郎と申す者で御座る……と云ふ是れに組伏せられて居るから聞た吉澤一角 吉ヤアい……是れは日高殿で有るか夫れでは何うか此所の所を許して呉れ乃

水天宮利生記

公は何を隠然う吉澤一角で御座るお助け被下……六ヤ……手前は吉澤一角とよな……夫れ聞いては尙許されん……杉本の母も聞きおれ此者は拙者も存して居る吉澤一角と云ふ者で拙者が江戸に居つて修業を致す時分に矢張り一緒に先代犬上軍兵衛と云ふ者の所で教へを受けたものであるが今此者の語る所を聞いて見ますと二代いの犬上軍兵衛と云ふ者が先達の御追拜見に参り何かの間違ひから貴方の夫杉本六郎殿を殺さうとして謀つたか何分に善い工風も無い所から此吉澤一角と云ふ者も願んて打たせたと云ふので有りますれば容易に助けるとは出来ませんから是れよりお役所へ連れ参り相當の調へを願はまければなりませんと杉本の母を案内に吉澤一角を引立て参ります役所へ來つて日高六郎は門戸を叩いて六急速申し入れたい次第も有つて拙者は何がひましたか薩藩日高六郎と申す者で御座いますか宜しゅう御取り次きを被下い……と云ふから門番の夫れ

水天宮利生記

次第を以つて大學に取次ぐが外からぬ薩藩士のこと故直ぐ  
様一ト間へ通うして面會を致す其所て日高六郎は六水天宮別  
當殺しは吉澤一角と申す者にて杉本の生命を絶ち同人の妻をも  
殺さんどあしたる危うき場合よ拙者通はり掛り是れを救くつて  
一角と申す者を捕らへ來りましたか速やかに御調べを願ひ度ひ  
……捕者は日限りの道中で有るかお六が敷い義を願ひます……  
と申しますから其所で奥山も承知して夜中ながら白洲を立てま  
して吉澤を引き入れて取り調べに及びましたか一角は最早叶は  
ん所と覺悟をして悪事の次第を詳さに自狀致しました依つて早  
速杉本小六郎を揚屋より出たして母に引き渡しましたので早  
此の度びは小六郎が承知を致しませんと小お役柄にも似合は  
しからざるなされかた御懸念は解けたればとて中々拙者は此儘  
よは歸宅仕つりませんと……と兎や角く申しまするを日高六郎が  
六イヤ……夫れは仰せ有らん方が宜しい役權を持って致され

水天宮利生記

ました事故兎や角申された所が何う致しても尊公の意は立ちま  
せんか夫れよりい早々御歸宅被成が宜しゆ御坐らう拙者今も申  
す通り日限の旅で御坐れば先づお止まり下さい又拙者は非共今  
晩尊公の御意中を承知致し度く御座るから……と母も助け又己  
れの無實の罪も此人の爲めに助けられましたとなれば恩人の言  
ふ事には背く譯も参りませんから申したい事も申しませんで  
直ぐ様己の小屋へ日高六郎と同道致しましたが交々其恩を謝し  
まするのら六郎は六イヤ……其様禮なぞは何うでも宜しいか  
ら兎も角も尊公の御意中を承知を致し度う御座るが其所元の父  
六郎と言はつしやるお方を正しく討つたは只今拙者が捕へまし  
たる吉澤一角と申す者で是れをお討ちなさるは誠に容易が夫れ  
にて尊公の御無念が暗れまじやうか小六郎決つして晴れま  
せん曾我兄弟が工藤祐經を規ひましたも同じ道理で御座います  
が如何にも討つたは吉澤で御座います申し付けたるの二代目

水天宮利生記

犬上軍兵衛で御座いますから彼を敵きと規は無ければ相成りま  
せん 六イヤ……さも有る可し然らば彼様をさし當御領主へ  
りて御願ひまつて彼の心付かん内に江戸表お屋敷のお手を以  
つてお召取りお相成り當所へ差し立てを願ふて仇討ちを被成が  
宜しい然し風を食つて逃げたら其節何如ある 小仰までも  
御座いませんお暇を願つて諸國を遍歴致し津々浦々までも相尋  
ねまして仇討を仕遂げる心算で御座る 六左様なれば萬一諸國  
をお廻りと云ふ場合に相成らば先づ薩摩へ御出でなさい其折柄  
に御抽者能く御相談を仕らう自然し諸國と違つて薩摩は他  
藩の武士の出入りを嚴重に改めするから念の爲め此切符を差  
上げ置きますが是れさへ有れば何れありとも通れます故抽者  
小屋までお尋ね被下様……且又尊公犬上軍兵衛に一度びも  
逢あらん様子だが然らば抽者より逐一に人相を申し上げるから  
夫れへ御書を取り相あるが宜ろしからう抽者方迄お出さされる

水天宮利生記

其途中にて能く……お心を附けお尋ねが宜しからう……と  
申しますから大に欣が益々厚意を謝して筆を染め言ふに任せて  
軍兵衛の人相を書き止めました日高六郎正國は萬事を懇に教へ  
まして 六夫れでは是れにてお暇を致す……と云ふから親子が  
種々引止めました袖を振り切る様にして六郎は旅宿へど  
立ち歸りました翌朝は未明の頃より杉本親子には旅宿を訪れま  
して途中まで見送つて後の事をも相頼み入れました夫れより有  
馬壹岐老人へ願ひを立て……何卒犬上軍兵衛お召取りお差立て  
を蒙りたいと云ふので壹岐老人より江戸屋敷へお掛合になる  
老匠はいろく……相談を致しましたか何しろ町道場に住ひ居  
る物ゆへ久留米のお手で踏み込んで召取る次第には不可せん  
から公儀へ願つて公儀のお手を持つてお召取り被下のか順で有  
りませぬから然うすれば國へ差立て仇討をさせると云ふ計ひは出来  
ませんから何うした者で有るかと種々相談の未喧嘩仕掛けにし

水天宮利生記

て軍兵衛を無理やり屋敷へ連れ込んで細を掛け國へ送つて杉  
本に敵きを討たして遣つたら宜からうと評議が一決しましたか  
ら若侍士三人一組で三組以上九人か喧嘩仕掛けにてお屋敷へ引  
き連れて来ると云ふ役を申し付かりましたから名々木劍を懐中  
に入れてブラリく……どお屋敷邊より麻布の當りを歩行いて  
居りました成日の事三田聖坂を降り来りますと二人連の侍士が  
編笠に表を包んで居りますか何うやら軍兵衛らしく思はれます  
が然し面鉢を見なければ無鉢を事もするまい何うしたふれば彼  
の面鉢を改める事が出来やうかと相談をする一人りの若侍士  
が若イヤ……拙者に御委せ被下い拙者彼の網笠を放して御覽  
に入れるが萬一軍兵衛では無い節は拙者一人にて事を引受けれ  
ば夫れで相済むから方々其儘御立ち出でならんが宜しい軍兵  
衛で有つたれば早々御助勢を願ひ度い……と其の若侍士はハラ  
ッ……と駈け来たつて擦れ違ひ探己れの鞘を割る斗りに當

水天宮利生記

てたが軍兵衛振り返つては見ましたが自身の身に答める事が有  
りますから其の儘に何事も言はず行き過ぎ様とする是れを若侍  
士が止めて若イヤ……暫らく待たつしやい尊公は割れる斗か  
りの鞘當てを致されて何故挨拶は無いか……武士の鞘當て挨拶  
をなさい 犬イヤ……夫れは拙者よりお答め申して能くばお答  
め申す筈で御座います尊公よりお當てなされた鞘當て……何か  
御急用で當てられた者と存じ其の儘にお捨て置き申しましたか  
尊公よりお答めとは甚はだ以つて奇怪に御座ります 若イヤ々  
々……とも有れ面鉢を包んで挨拶を致すとは何事だ……不禮で  
有る先づ面鉢を顯はして挨拶をし致せ……と躍りかゝつて彼の  
侍士の被つて居りました網笠に手を掛けてヤッ……と引くヤッ  
ッ……と云ふ間に笠當て丈け頭へ殘つて若侍士の手に網笠を止  
めましたので是れを見て居つた外二人が 甲ヤ……夫れ軍  
兵衛だ 乙夫れ軍兵衛だ……と軒下より駈け来たつて木劍を取

水 天 宮 利 生 記

り直はし正面より打ち掛かるから軍兵衛に置きまして扱ては悪  
事露顯に及んだのだなど心附き躰を轉して手元へ飛び込み逆  
返へす 若アーン……と云ふ間に今一人と二人りが打ち込むか  
ら躰を轉じた眼路所を背後へ廻わつて腰を突いた……突かれた  
若侍士止まる事出来せんから真直ぐに駈けて来る此所は潰け  
物屋の店ですか其の店に並らべて有りました大井に山の如くに  
隠元豆の今煮へた斗かりの蒸げの中に頭を突つゝむむ 若ムニヤ  
宜ろしいのです左右一同に打ち掛かるを彼方へ交はし此方へ交  
はして居る所へ來かゝる一組三人 甲御助勢……をど聲を掛け  
矢庭に打ち掛るから軍兵衛ももう……叶はんと心得ましたから  
一生懸命一人の若侍士をば倒轉倒と取つて投げました尙を打ち  
掛かる三人を掻い潜ぐつて飄筋斗切つて前への侍士の倒はれて  
居る上へ投げ附ける下の侍士も上の侍士も起き様とする筈見を

水 天 宮 利 生 記

借りて軍兵衛は其の背に片足を掛けて足袋屋の看板に手が掛か  
るや否なやアッ……と云ふ聲ひを掛けるや軒先さへ飛び上が  
つて屋根へ登ばりますから 若ヤア……夫れ逃けた……屋根へ  
……と云ふ内に屋根から屋根を傳たはつて行き方知れずになり  
ましたから一同は 甲斯く相ひ成つては最早や致し方は無いか  
ら道場へ飛び込み后日公儀よりお咎がめの節には我れ一切  
を致しても申し開きを仕まつらう 乙夫れは勿論の事と一同は  
麻布狸穴へ來りまして犬上軍兵衛の道場へ飛び込んで見ますれ  
は今しも軍兵衛は逃げ歸つてとつかはど仕度を調のへ何れへか  
逃げ去つた物と見へますから箆笥の引出よりは衣類か出て夫れ  
へ散乱して灰かくらが立つて居りますと云ふ次第ですから是非  
なく若侍士は取つて返して其事を申し立てましたから家匠より  
は有馬壹岐老匠の方へ云ふ……と云ふ返書を差出しますと壹岐  
は杉本小六郎に話しますと 小此上は仇討の爲めお眼をした

水天宮利生記

と申し上げましたか仇討ちと云ふてはお暇が出ませんに依つて  
武術の修業と名を附けてお暇を願つたら宜からうと壹岐老臣の  
切親の言葉に武術修業として三箇年を限つてお暇を願ひ出しま  
すと即日お聞き済みになり相成りましたから尙退願に及びましたの  
は何とぞお捕へに相成り居る吉澤一角と申す者を頂戴致したい  
と申出ましたたが是れは敵の片割れ悪事の手先きを働いたる者  
で有るから仇討ち犬上の在所を尋ねる門出祝いに彼れを討ち度  
いと云ふ所存で御座います故に此事を壹岐老臣へ内々願ひ入れ  
まして置きました所が尤もこの事有ると庚申塚に於て吉澤一  
角はお所刑打ち首に仰せ付けられ杉本小六郎は太刀取りをば命  
せられました然れども吉澤一角は永らく牢に入れられて有りま  
した事故身体も疲れまして居ります所へ尋常の勝負と申すので  
御座いますたが所詮刀を振ると云ふ様な氣力は御座いせんので  
す刀を振つたが爲めにヨロ／＼………論限く位ひなのです尤も

水天宮利生記

白状をして仕舞ひました者を屢々白洲へ呼び出しては尙は悪事  
が有らう／＼と言つて板目吟味を申し付けて苦しめましたので  
すから所詮立ち合ひあはは叶はん道理で御座いますたが夫れを仕  
度をして立合せましたたが小六郎の爲めに小敵さ思ひ知れ……  
と言ふて下す太刀に肩口より乳の下掛けて割付けられましたが  
ア／＼………と一聲血煙り立つて背後へ倒れましたたが檢死の侍士は  
侍天暗れ／＼………と扇を開ひて褒めましたたが是りやあ天暗れで  
も何んでも有りませんで子供にも討てる仇打ちで御座います  
斯して小六郎の家一同にも別れを告げ母にも暫らく別れを告  
げまして吉日を撰んで久留米を出立つに及びました

第八席

エー………犬上軍兵衛は最早麻布狸穴には居りませんで何れへか  
逃げ延びた云ふ事で御座いますから杉本小六郎に置きまして  
は諸國を修業の爲めと申して御暇を頂き出立を致しまして彼

水天宮利生記

方此方と所々を探しました恰度筑前福岡の箱崎八幡の神前へ通  
り掛りましたから八幡の社に祈願を致しまして其所に有ります  
る掛茶屋に於て休息をして居りますと向ふの方から馬に乗つ  
た侍士が一人参りましたが此八幡の社の鳥居前まで参ります  
と馬子が馬何うぞ旦那様……此鳥居の前丈け下りてくだつせ  
い侍何んた……此鳥居先きは下りて呉……馬ハ……  
此鳥居先きを乗打ちしますと八幡様に濟みましねいで……  
何うか此所丈けは下りてくだつせ侍何此鳥居先きを乗打ち  
するど八幡様に濟んど……然んな馬鹿を事あるものか大丈夫  
だ早く曳け……馬旦那様然りやハ……不可ましねいだ  
つて此鳥居先きを乗打ちしますと馬の足が縮んで動きましねい  
だ……何うか此所丈けは旦那様下りて下せへな……侍然んな  
馬鹿とがあるもんの早う曳け……馬然れぢやあ旦那様馬から  
落とされやせ侍宜しい決して落る氣遣ひはないから早う曳

水天宮利生記

け馬はんに困つた旦那様だ……と言ひ乍ら何んと言つても  
下りて呉れませんかから馬を曳出しました頓て鳥居先き迄参りま  
するど馬はヒーン……と一聲馬が棒立ちになつて仕舞ひました  
から何條以つて堪る可き馬に乗つて居た侍は後背の方へズン  
……と真逆様に落つて仕舞ひました馬それだからハ……旦那  
様落されるとおえねいからと言つたんだに大丈夫だから引張つ  
て行けと言ふから引張つて来たが飛だ事をした何所も怪我は  
しやしなやかな侍是れ……馬子何んだと吐かす……乃公は危  
いから下りやうと言つたのだ夫れを大丈夫だと言つたから乗つ  
て来たのだ夫れに斯ん事をしやがつて……馬冗談を言つち  
やあ不可ねへです旦那様がハ……大丈夫だてへから曳いて来  
たです私しやあ八幡様に罰を當られるからつて言つたんだぢやあ  
無いか然ん事を言つちや不可ねへです侍縦令如何あると  
が有らうとも馬より落すと云ふのは不埒千萬其分には捨て置け

水天宮利生記

ん馬「ア……若し旦那様然んことを言つては困ります自分  
勝手に乗つて……侍何を申すか其分には捨て置けんに依つて  
覺悟に及べ……切つて仕舞うから馬「ア……旦那様濟みまし  
無の勘辨して下つせい殺されちやあ堪りません侍「イヤ……決  
して其分には捨て置けんと刀の柄に手をかけて今にも殺らうと  
致しますから馬旦那様勘辨して下うせへ私しが悪かつた、勘  
辨して下つせへ……と言ひましたが一向う聞きませんから馬子  
は逃げ出しますと跡を追つ置けますから是非なく此方の掛茶屋  
に一人の若侍士が腰を掛けて居りますから其所へ一目散に駆け  
來つて馬お侍士様私しは此先きの杉戸村と云ふ所の百姓でへ  
ありして八助と申す者であらうすが今彼のお侍士様が此先きま  
で行くと言はつしやあるから其所まで乗せて参りましたが八幡  
様の鳥居先き乗り打ちするど危険いから下りてくだつせへと頼  
みましたが大丈夫だから遣れと言はつしやるだから遣つて來た

水天宮利生記

ですが馬が刎つかへりやあしたからお侍士が落つた、夫れを私  
しが悪いつて殺すと云ふでが、いす何うか助けなすつて下さい  
やまし小「イヤ……私しが殺すと云ふのでは無いから彼の侍士  
に頼まつしやるが馬夫れは不可無いでが、あ、いす何うか助けて  
彼下まつせへ……小「夫れじやあ私しが謝罪で遣らう……其方  
が決して悪いので無い向ふが悪いので私か此處で見て居つた  
よし……と杉本小六郎は彼の侍士の處へ參小「イヤ……  
何れのお方が存ませんが彼を許してお遣んなさい侍「イヤ……  
許す事はなりません小「然し只今のは彼爺父が粗忽では御座ら  
ん拙者が見受けし處では八幡社の鳥居前丈けは馬を下りて下さ  
いと云ふのを尊公が無理に此所まで乗つて來られて落ちたので  
有る然らば決して此爺の粗忽では御座らん侍「イヤ……若侍決  
して左様では無い拙者か下りやうと云つたのを此爺が無理に乘  
つて行けど申したから乗つて來たので有るか彼れか粗忽から拙



水天宮利生記

者落馬したので有る然るに尊公までが然う云ふ事を仰しやるとは不都合で御座る一体尊公は何所の者で有るか拙者に向つて無禮の過言 小イヤ……過言では御座らんが尊公拙者の名を聞きうとあれは尊公から名乗らつしやい 侍拙者名前を聞きたいと有れば話して聞かそうか拙者は江戸麻布狸穴に住居を致して居る犬上軍兵衛と云ふ者な……と云ふ是れを聞た杉本小六郎 小何其方か犬上軍兵衛と申す者か……ア……有り難や常々祈願を込めて居る天満宮様の御利益かど心の中で念じ 小是れ犬上軍兵衛能く聞け拙者は筑後の國久留米の藩士杉本六郎の侍小六郎と云ふ者な能くも我父六郎を殺したな……暫く其方の在所を探して居つたのたワ……此所て遇ふたは盲龜の浮木浮墨華の花待ち得たる今日只今イヤ……尋常に立ち上つて勝負を致せ……爺此者は拙者の尋ねて居る敵だ其方は最早關係は無いから安心をして居れ……と云ふ其勢に恐れて振ひ上つて仕舞つたのです

水天宮利生記

から 侍貴殿か聞き及んだ杉本小六郎殿で御座るか拙者は決して犬上軍兵衛では御坐りません本統は小野傳八と申します者で矢張り犬上軍兵衛の門弟で御さいまする旅路へ参りますと師匠の名を借ります者で御座います決して貴方の敵犬上軍兵衛では御座いせん何うか生命斗りはお助け下されたう願ひます…… 小縦令犬上軍兵衛で無くとも門弟とあつては捨て置けんサ……小野傳八尋常に勝負を致せ汝から犬上軍兵衛と名乗つたので有るからと詰り掛けますから小野傳八も此所で小六郎に討れて仕舞つては詰りませんし師匠軍兵衛に巡り合ふ事か出来ませんから 傳何うか暫くの間御猶豫を願ひます私しは犬上軍兵衛と師匠の間柄丈けて別に譯けも御座いせんから何うかお許しを願ひたう御座います 小イヤ……小野傳八は何と申しても許されん事に犬上軍兵衛に出會した時の腕試しにもなればサ……早く立ち上つて勝負を致せ 吉何うかお許しを願ひ

水天宮利生記

度い拙者は犬上軍兵衛で無ければ立ち合を申す譯にも参らず  
又た殺されても困りますから生命丈けは助け下さい……小  
然らば拙者人相書を持つて居るから暫く待て侍夫れは何よ  
の物を御所持に御座りますか御調らべを願ひます小色  
浅黒く……侍一寸と御待ち被下い……イヤ……浅黒くと御坐  
いますか私は御覽の通り眞黒で御坐います小イヤ……  
浅黒と云ふから幾らか黒いのだが諸國を歩行て撫風に吹かれて  
居るから自然色上げをしたかも知れん侍誠に困ります……  
未だ何んとか御坐いますか小鼻高き方……侍是れは決して  
高いとは申しませぬ能く私くしの鼻を御覽被下いませし  
小ウーン……成程餘まり高いと申せん侍高い所ろでは御坐  
いません極く低い方で……小然し道中をすれば水變りの爲め  
に腫む事があつて顔が腫れば高い鼻も自然低く見へる侍夫り  
やあ何も困りましたが其次を何で御坐いませしやう小背高方立

水天宮利生記

つて見らう侍如何で御坐います……是れを人間の定寸に合し  
て高いとは申しませぬ何うか能く御見分けを願ひます  
小成程低い方だが然し悪事を働さ居る故若しや追手が掛るかど  
一生懸命に逃げ歩行からオイ……と擦り切れたかも知れん  
侍夫れは何うも困りますな……小然し師匠の名を偽る不  
届者だが爺に聞いて許して遣れと言ふたら許して遣らう……爺  
是れは助け遺つた物か殺して仕舞うかな馬へエ……弱ひ者  
を酷いめに合せますから亦外々で何んな難儀をする者ありま  
すか分りませんから殺しなさい侍是れ爺然んな事を言  
はずに共に謝罪つて呉れ……馬夫れだから私らの様な者を酷  
め無へ者だ……旦那様彼んちに謝罪りますから勘辨をして遣つ  
て被下いませ……小イヤ……許しては遣るが此后又犬上軍兵  
衛と名乗らん様に印を付けるが宜いか侍何うぞ少々斗りか附  
けなさつて被下いませし小よし……と杉本小六郎小及を取

水天宮利生記

つて小野傳八の小髪を切り取りました。傳ア……痛い。小  
是れで汝は何れへなり共行けと言はれて小野傳八生命丈けは助  
かりましたから此様な所に長居は物騒だと思ひましたが一足出  
して逃げて行つて仕舞ひました。が間に居た馬子のお爺は小  
野傳八の逃げて行きますのを見て馬ヤ……お侍士様私しや  
あエライ事始まつて仕舞つたからお前へ様にお願ひ申しました  
がお前様居無けりやわ私しはア殺されて仕舞う所であつた  
が何うある事かど腰も抜ける程心配したでがアすが無事に済み  
ましてお前様にもお怪我をさせないで宜うがアしが私にも助  
かつて此様お嬉しう事は無いでがアす……私の家は直ぐハ  
……此先の杉戸村へんで是れから十五六町ヨリか有りまし  
無いた何うか見る影も無い茅屋であつたが一寸お寄りなすつ  
てお休み下せへ又此事を家の婆さんや倅に話ししたら大變に悦  
びますだわ。小爺……夫れは千万辱けふいが拙者も只今申す通

水天宮利生記

も深い望みの有る身であれば一日も猶豫する事は出来んに依つ  
て是れで分れよう。爺左様でも御座りましやうがア……ちよ  
つくらお立ち寄り下せへまし家の婆さんや倅にもお禮の一ッ申  
し上げさせぬいじやわ私しの氣が済みましぬいた夫れよ今日は  
もう……日も暮れますだから穢い家だが私しの家へ泊らしつて  
明日の朝早くお立ちあさりましねへど一心を込めての爺の言葉  
み小六郎も否み兼ね。小然らば一寸立ち寄つてお邪魔を致す  
あらうと爺の跡に尾いて凡そ十七八町も参りますと彼の爺の  
住家で御座います。爺是れ……婆さま只今戻つた。婆今日  
はハ……エライ遅かつたあ。爺イヤ……今日は何う  
もエラア拾ひ物をして来た。婆エラア拾ひ物つて何を拾つて  
来たんだ早く見せたら宜いだらう。爺夫りやア……此所に  
斯う見えて居るだ。婆見えて居るつて何處に有るだ。爺品  
物じやわ無へだわ……今日はア……生命一つ拾つて来たのだ

水天宮利生記

あ 婆 生 命 拾 っ た つ て 夫 り や め 誰 れ の 生 命 だ 爺 私 が ハー……  
八 幡 様 の 鳥 居 前 で 悪 い 侍 士 に お つ 殺 さ れ る 處 を 此 お 武 士 様 に 斯  
う 助 け ら れ た と 落 ち も 無 く 一 任 一 件 を 物 語 り ま し た  
婆 夫 り や め エ ラ ア 拾 ひ 物 を し た 爺 夫 れ だ から 其 お 侍 士 様 此  
處 へ お 連 申 し た だ 爺 ハー…… 是 り や め お 武 士 様 と ん だ 災 難  
を お 助 け 下 さ り ま し て 賊 に 有 難 て へ だ が 爺 一 人 ……  
さ 此 お 武 士 様 深 心 望 み の あ る 身 だ つ て 言 ん の で 急 ぐ ん た が  
今 夜 は 一 晩 泊 つ て 買 ひ や す べ い …… 今 に 倅 も 歸 つ て 來 べ い か  
何 か お 話 し の お 相 手 で も さ せ べ い …… 何 か 御 馳 走 は 出 來 ね へ か  
荷 麥 だ も 打 つ て 御 馳 走 し べ い …… 婆 さん 湯 を 御 して 呉 れ と 云 ひ  
乍 ら 物 置 き へ 行 つ て 白 を 挽 き 掛 け ま す か ら 小 六 郎 も 是 り や め 中  
々 暇 の か 入 る 事 と 思 つ て 居 り ま す と 其 處 は 手 慣 れ て 居 り ま す か  
ら 忽 ち の 内 に 挽 き 上 げ て 仕 舞 ひ ま し た が 夫 れ を 粉 粘 始 め ま し  
た が 是 れ を 奥 座 敷 で 見 て 居 り ま す 爺 が 水 鼻 を 滴 し そ う に し て 居

水天宮利生記

り ま す か ら 小 六 郎 小 ヤア …… 爺 が 粉 粘 ね て 居 る が 水 鼻 が アー  
…… 引 込 ん だ 又 出 た アー …… 危 い な 又 引 込 ん だ が ヤア …… 又 出  
た 今 度 は 長 い ち ゃ …… 浴 ち た 是 り や め 驚 いた な あ トロ、 荷 麥  
と 云 ふ の は 聞 い て 居 た が 水 鼻 の 荷 麥 と 云 ふ の は 始 め て だ 爺 婆  
さん 湯 は もー …… 宜 い か な ど 此 後 恐 皆 調 へ 上 げ ま し て  
爺 一 トツ 毒 味 を し て 見 や う ウー …… 是 り や め 鹽 加 減 が 宜 い は い  
小 成 程 水 鼻 に 鹽 氣 が 有 る か ら 宜 い の だ ら う 併 し 見 ぬ 事 消 し と 云  
ふ か ら 見 無 げ れ ば 穢 い と 思 はず と 宜 い の だ ら う 獨 り 言 を 言 つ  
て 居 り ま す 爺 サア …… お 武 士 様 ぞ う か 一 杯 お 上 り 下 さ り ま  
し ね …… 然 う し て 今 夜 は 茅 屋 て 御 座 り ま す が 緩 く り お 泊 り な  
せ い ま し て 明 朝 早 く 御 立 ち な さ り ま せ へ 其 内 に は 倅 も 歸 つ て 來  
ま す べ い か ら 小 是 れ へ 千 万 辱 け ぢ ゃ い 何 に よ り 御 馳 走 難 有  
頂 戴 致 そ う …… 是 は 至 極 結 構 に 出 來 た と 言 ひ な が ら 水 鼻 を た ら  
し …… 拵 へ ま し た 荷 麥 を 食 つ て 居 り ま す と 其 所 へ 歸 つ て 來

水天宮利生記

したのには此家の伴男今歸つたよ……父さん 爺大分早かつた  
が……村の衆は何うした 男今夜は私は泊番だが一寸家へ来て  
見たのだあよ 益然うか……今日なわ大變のものが出来ただわ夫  
れを此お若いお武士様に助けて貰うたのだ……夫れに旦那様は  
深の望みのある身だど仰しやつて直ぐ行くと言はしつたのを  
お連れ申したわお伴お禮を申上げさつせへ……又今夜は緩つく  
りお泊め申して明日の出立するこんだから今夜はお前を泊番を  
繰換へて貰つて来て旦那様に緩くりお話しを申し上げる 男是  
りやあ旦那様飛んだ災難をお救ひ下せへまして誠にハヤ……有  
り難いあんで御座ります……夫れに旦那様には何か深ひ望みあ  
る身なら私しは明日からお供でもして旦那様に御恩を報します  
だあ……小イヤ……決して左様お心配には及んから無用に  
して呉れ 男ア……何しろ庄屋様の泊番を繰り換へて来て  
くり旦那様にお話し申上げろやあ 男ハ……然うしますだあ云

水天宮利生記

ふのを傍に聞いて居た小六郎 小何と申すか其庄屋の泊り番と  
云ふのハ何んだ賊でも来ると云ふのか 男ハ……夫れか旦那  
様飛んでも無へ事だ此近所の村々流行て来たんであす 小何  
ん事か流行のかね 男ハ……此村の金持の家の十七八の娘  
子か病氣にありますだか其病氣に起り醒めが有るんであして  
夜中にゑると踊り出すだわ……夫れで其病氣か七日経つてから  
辨天様の御寺院と云ふのか有りませすか其御寺院の修験者呑海と  
云ふ者がか御座いますか夫れに祈禱をして貰ひますと直くと病氣  
が癒つて仕舞います然うすると今度は又其隣り村の金持の娘  
めに傳染ませすか此近所の四十五ヶ村と云ふものは皆な困つて居  
りますか今丁度此村の庄屋の娘めが其の病氣に掛りましたか明  
後日か七日目になるでがす及んだが不思議な病氣だか其祈禱  
でがあす 小夫は始めて聞き及んだが不思議な病氣だか其祈禱  
をして貰うのは幾らか金でも入のか 男入ますとも其金が要の

だがあすが金持の所より行きますからまー……宜いだが御供物  
から七日目の祈禱料と禮で先づ百兩は入でがあす。小ハハ不思  
議な病氣も有れば有る者だが何か悪者の所爲で魔物でも遣つて  
其祈禱料を食ると云ふ手段であらう何うも夫れに違ひ無い様だ  
が其病氣を私が一遍見たい者だが何うだらう。男、夫りやあ有り  
難え事であす私ちよつくら庄屋様に話しをして來ますべし。小  
何うも拙者の考へるのは七日目にあつてから癒すと言ひ七日目  
の祈禱料が餘り高過ぎる様であるが何しろ一遍見届けて遣らう  
男、私し一すら行つて來ますと出て行きました。が庄屋、お右の話を  
致しましたから庄屋の直ぐと飛んで來て。庄、イヤ……旦那様今  
日は此爺を助けて被下りましてハア……有り難う御座りますか  
私の所の娘の病氣を見て遣らうと云ふで被下せへまそから迎  
へに参りました。小、差支へ無ければ見届けて遣らうと杉本小六郎  
は庄屋の家へ参まして娘の病氣を見て御寺院呑海の所爲である

第九席

と云とを見現します。が夫れが爲め又茲に一ツ身も危難を招く  
と云ふ下りは次回に……  
切て杉本小六郎は庄屋の娘の怪病を見やうと思ひまして彼の八  
助と申す爺の所を出まして庄屋の案内に宅へ参ります。小六郎は  
座敷へ通つて夫れが娘の病室へ來つて様子を見ますると成程  
瘠衰ろへてスヤ／＼……と眠つて居ります。から。小、是れが何  
かへ夜半になると荒れ出すと云ふのか。庄、ハイ……左様で御  
座います。小、如何にも不思議だ。此様に別條なくスヤ／＼……と  
眠つて居るではないか。庄、ハイ……只今ではスヤ／＼眠つて居  
ります。がだん／＼夜が更けまして九ツ時にあります。と荒れ出  
します。から。此所に居ります。村の衆に押へて買ひます。があすと  
云ふを聞いて小六郎、其れに村の者と同じく座つて氣を付けて  
居ります。と。庄、もー……旦那様そろ／＼始まります。小、ウー

水 天 宮 利 生 記

ン……左様かと云ひながら向を心附けて見て居りますと頓て九  
ッ廻る頃に相成らうかと云ふ時刻になりました所がムツク……  
と夜具を刎ね除けまして起上りまして病人が無暗に北の方角へ  
手を向けて女御座らしつた……御座らしつたと云ひながら踊  
り上る荒れ廻ると云ふのです百姓共は百ソレツ……と言ふや  
押し附け様としますが其荒れ廻る時の病人の力と云ふものは  
容易な力ではござりません百姓共ですから中々力があります  
時々夫れを刎返しますが夫れを廻りから寄つてたかつて取  
めますと七ツ時にあると又スヤ……と元の如くに眠ります  
百イヤモ……之れで今夜の役目は済んだと言つて百姓共は立  
ち歸ります其所に座つて居た庄屋は庄旦那様彼通りで御座い  
ます小ウ……如何にも不思議な話であるが何しろ明日一  
寸八助の所まで来て下さい庄ハ……畏まりました御座いま  
す……然し今晚は泊り下さりましも……遅くなりまして御

水 天 宮 利 生 記

座いますから小八助とやらも待つて居るから戻らう庄左様  
では御座いませうが……遅くなつて居りますから小夫  
れでは氣の毒だが何ん處でも一ト間貸して呉れと是れから一  
ト間を借り受けて此處に臥せりました翌朝になりまして食事等  
をいろくと馳走にあつて彼の八助の處へ戻りました八旦那  
様昨夜はハ……飛んだ御苦勞様で御座りやあしたは庄屋の娘  
子の病氣は何んなものであすか小何うもあれは乃公の見る  
處では其修験者か怪しいと思ふのだ彼の娘にあア云ふ力の出る  
と云ふのは如何にも不思議だ然うして彼の娘めがござりしつた  
……でおさらしつたと云ふて北の方へ手を遣るか何か来るので  
有らう小ハ……然うですかね……何か来た様に見るので  
御座りやあすかな……と話しをして居ります所へ名主が参り  
まして庄是れはく旦那様昨晩は御苦勞様で御座りやあした  
小イヤ……昨夜は甚だ失禮を致しました庄旦那様何う云ふ者

水天宮利生記

で御座いましやう彼れの病氣は何と見定めが附きましたたで御座  
りましやうあ 小何うも中々解らんか彼の娘か北の方へ向いて  
おざらしつた……でござらしたと云のは何うも不思議だか何  
かひお前の家の北は何になつて居るのだへ 庄ハイ私の家の北  
は空地で御座います 小ウーン……其次は何んだ 庄空地の次  
か垣根に成て居りまして其垣の外は畑けにあつて居りませう夫れ  
から田になりまして其向ふに辨天様の社か有りまして其次が又  
た田で其次が又た畑け…… 小何に然う言はなくつてもよい  
か彼の娘の寐て居る座敷の椽の下に人か這入つて居られやうか  
あ 庄ハイ……椽の下に人か這入つて居る事ハ出来ませう 小然  
うか夫れあれ之宜しい今晚は彼の座敷の椽の下で見届けて呉れ  
ん……何か北の方より来るものに遊ひいか併し拙者一人て見  
届けたと云ふのでは何うも當にならんと言はれば夫れ迄の話し  
たから誰かも……一人私に附けて貰ひたいが成丈け家路の者

水天宮利生記

でなければ不可ないから怖がつて逃げたすやうじやあ仕方が無  
いから 庄畏まりましたと言ひながら早速庄屋は村の内を探し  
まして此所へ連れて参りましたの一人の大男 庄是れかハ  
……村中での豪膽者たと言はれて居る者で御座りますか此者で  
宜しゆう御座いましやうか 大私しはハア……太郎作といふ  
者でがあして物心覺へてからつちやう者はなしかつたまけたと  
はがあし無いだ 小然うか夫れあれは宜しい然らは今晩己れど  
一緒に庄屋の娘の寢て居る椽の下へ這入つて居て何か北の方  
へ来た者があるだらうから夫れを見届けて呉れ無ければ不可ん  
ぞ 大大丈夫でがあす其位ひのとは心得て居りやすから 小然  
らば宜しく頼む……それに座敷の方では私しが明りをと云ふた  
ら直ぐに明りを點くやうに松火や何かの準備をして置いて貰は  
なければならぬのだ 庄夫れは委細畏りましたして御座りやす  
と庄屋は是れから家へ歸つて準備をしておきます杉本小六郎は



水天宮利生記

日の暮れるのを待つて庄屋へ参り娘の寝て居ります様の下に太  
郎作を連れて這入つて居ります追々夜が更けて参ります様か  
に聞こえるのは山寺の鐘ゴーン……ゴーン……と恰度九ツの鐘  
夫れから暫らく仕ますとゴーン……と云ふ響が仕ましたか  
とんと虹のやうな雷光のやうな跡を引きます物で光りを出しま  
して山影に現はれたと思ひますと垣根の所でスーッ……  
と来た様子すると座敷では娘がガッ……と起き上がりまして  
女さざらしつた……さざらしつたと騒ぎ始めましたから百姓共  
は押へるやら大騒ぎで御座います小六郎の眼を据へて見て居り  
ますると垣根の方からスーッ……と這つて来たのハ一つの大き  
な……蠶のやうな形のもので御座いまして現はれましたから小  
是れ……彼處へ来たのは拙者が見ては確かに蠶のやうに見え  
るがどうじやあ……太何うも見へましねへたあ小夫れでは私し  
が迷ひか知らん……何うも入る様うだが能く見て呉れ……太何う

水天宮利生記

も私しには何んにも見へましねいた小左様か變な事有れ  
ば有る者だ……何うしても見ねへか……太ハハ私し是れ迄村  
中で豪腕者の評判されて居るでが今夜あれたの供してた  
まげては不可無いと思ふから眼を玉お潰ぶして居るでが  
小夫れでは困るな拙者と見届けに此所へ来たのではあいか……  
早やう見届け呉れ……太左様でが……夫れじやあ見ますべ  
イア……蝦蟇でが……小是れ……大きな聲を出して  
は不可ん……と言ひ乍ら小六郎は其の蝦蟇が椽の下へ來かゝる  
所を横合よりエーッ……と一聲大刀を引抜き切り附けまし  
たが何んだが手断へのある様なきやうなと雪丸けを切つ  
たやうで有ります小早やう……と叫びましたか  
ら……庄へエー……是れ若い者共早やう明かりを附け無いか……甲  
明かりは何處で入るだ……乙何處で呼はつて居るだ……庄早やう北  
の方へ持つて行かぬか……甲北の方つて壁で行かれましねへた

水天宮利生記

あ 庄早うしないか様の下に人が居るだ 甲「ウーン……然うか  
然んなら早やく無う言へば宜いの……何んだつて様の下さ  
ぞへ這入るのだあ 小「早やう明かりを……」 甲「今持つて行き  
ますだあど松火を点けて参ります其の内小六郎は庭へ出て参  
りませす 小「明かりを……」と云ふから其處へ持つて参りますと小  
六郎は血潮の滴たる刀を提さげまして突立つて居ります 甲「且  
那樣どうした」 小「ウーン……何か手鞠への有る様に心得たが  
正しく何か魔物の來つたには相違無い何しろ此血潮の跡を尾け  
て行けば大概は分るであらう 小「是れ太郎作未だ出ないのか何  
日まで其所に何をして居るのだ早やく此方へ出無い 太「やあ  
私しやあ出やうと思ふだが腰か抜けて立てぬいだあ 小「夫れ  
じやあ早く這つてでも何んでもして出る……」 泰「臆も當てになら  
んあ 小「夫れ早く這つてでも何んでもして出る……」 泰「臆も當てになら  
ハ……」 甲「早く行んか 甲「私先さへ行くのか 乙「夫れやあ乃

水天宮利生記

公か行くぞ小六郎か先きに立つて若者か五六人で血潮の跡を尾  
けて参りますと一つの古池か傍座いますか夫れまで來つて血潮  
か止まつて居りますやうて廻りを廻つて見ましたが然んな様子  
が御座いませせん 小「是れは此池だ……何う云ふ池だ 甲「へー  
……是れは辨天様のお池でがす 小「ウーン彼の門の見へる彼  
の家は何物の住居な 甲「へー……」 甲「彼れか御寺院様でかあ  
して法印様の住はつしやる處てがあす……」 小「然うか夫れじや  
あ是れは其法印の仕業に違ひ無い是若い者彼所へ行つて法印様  
に御祈禱を願ひ度く参りました恰度今日御出の日取りで御座い  
ますと申して見よ夫れで來れば仔細は無いから相談をして此池  
を換干して見ようか乃公の考へる所では先づ來まい 申「此やあ  
然うでもありませるか夫れじや行つて見ます……」と云ひながら  
別當所の門口を叩きます 甲「若しく……お頼み申します眼つ  
たと見えて中々起きねへある……お頼み申します 弟「や……」

水天宮利生記

誰だ今時分來て 若ハイ……手前共は杉戸村の庄屋の處から参  
りましたたが娘の病氣が今日で丁度七日目になるがあすが日取  
を間違ひて居りましたるが今大強苦しみ始めましたから法印様  
の御法力で御祈禱を願ひてへんでお駕籠を以てお迎ひに上りま  
した者で御座りますと云ふから別當處の弟子も仕方がないから  
立ち出まして 弟も前達は杉戸村の庄屋から来たと云ふのかヨ  
シ  
……暫くまで……と法印の腰間に行つて見ますると居り  
ません 弟オヤ……見へないか便處か知らん……オヤ此所にも  
居らつしやら無いが今頃何處へも行かつしやる筈は無いがハテ  
……困つた者だが何處か外の部屋にでもお出かしらんと夫れか  
ら弟子は毎間くを探して見ましたお更に解りませんと遙  
か向ふの隔つた護摩堂で夜中護摩を焚いて居るが烟りが出ます  
から其處へ來て 弟お師匠様只今杉戸村の庄屋から使が参りま  
したがおんを申して遣りまじやう何んでも日取か違つて居りま

水天宮利生記

す然うでお師匠様に御祈禱をして頂きたいと言つてお駕籠を持  
つて迎ひに参りましたので御座ります……夜中で有から明日と  
申しまじやうが……お師匠様……お師匠様……是りやあ仕様が  
無いおあ月は明かない……モ……お師匠様杉戸村から迎ひが  
参りましたが如何致しませう……是りやあ返事が無いが困つ  
たなあ……と居間へ駆け來つて 弟オイ……起きあいか  
乙も……どうに起きて居るのだ杉戸村の使ひが來たから目が  
覺めたのだ 弟冗談じやあ無いぜ何故然んあら其時に起きて呉  
れあいののだへ 乙おつふうだから起きないんだ 弟夫りや  
酷い……然しお師匠様が護摩堂に居た様だか何んと言つても  
返事が無いのだ 乙夫れじやあ無言の業だらうよ 弟でもウン  
言つて居るぜ 乙夫れじやあ呼鳴りの業だらう 弟然んあ  
業が有る者かあ……何んでも宜から一緒に來て見て來れあ  
いか 乙夫れじやあ行つて見やうと戸を明け様としたか明りま

水天宮利生記

せんから打ち破して中に這入つて見ますとお師匠様は護摩檀の上から逆眞様に落ちて眞眉見を打ち氣絶をして仕舞つて居りま  
すから弟是りやあ大變だ……何しやう……乙お師匠様へ……  
まゝ何しろ是れじやあ杉戸村へは行かれないから兎も角も取込  
みが有るとでも言つて歸した方が宜からう弟夫れじや然う言  
ふと門口へ来て弟是れ……杉戸村の若い者今夜は少々取  
込みがあつて直ぐにか出にあり兼ねるから明朝の事として呉れ  
……明朝は此方から行く事に仕様からと断られましたから若い  
者は小六郎に向ひまして若旦那様今申しましたら取込があつ  
て行れぬねへと云ふのであす小然だらう夫で宜しい……と其  
夜は戻りましたか……此近村に一つの怪病が流行つて居りまし  
たが是れは御寺院法印香海が惡魔を遣つて祈禱料を食ふ計畧で  
有りましたので夫れを杉本小六郎の爲に見現はされましたの  
ですから此村に怪病は絶るのですが是が爲に杉本小六郎は恨を

水天宮利生記

第十席

受けるのですが夫れは次回に申し述べます  
前回に引續きまして申上げますが御持院香海法印は惡魔神の術  
を出して諸方の物持ち大盡又は庄屋などの娘を苦しめて其祈  
料として多くの金を貪り取りましたが併し此法は不動明王を逆  
に据へまして上檀に燈明を可き廿八の燈明を下檀に點して下檀  
に點す可き三十六の燈明を上檀に點すと云ふ様に總て逆に致し  
まして内へ振り込む鈴も外へ振り出すと云ふのですが斯く致し  
て如何ある法かは存じませんが夜中護摩を焚いてやるのだ爾う  
で御座います然るに今この修驗區が開けて見た所が最早師匠香  
海は絶息して居りまして眉見よりは血潮が流れまして中々苦し  
がつて居る様子に見えましたが余りの事に修驗者は弟お師匠  
様……お師匠様……如何なされましたか心を確認かにお持ちなさ  
れまし……と叫びますると香海は漸くに呼吸を吹きかへして

水天宮利生記

香ア一……誠に斯うなつては其方達にも面目次第もないが是迄  
拙者が悪魔神を祈り集めて多くの徳分を得て居つたが今晚杉戸  
村の庄屋に於て一人の若武士杉本小六郎と云ふ者が拙者が悪魔  
神を祈る事を見現はした夫れが爲めに悪魔神の憎しみを蒙つて  
斯の如く悪魔神に檀から謝落されたので有るが杉本小六郎は吾  
が爲めに敵さであれば伴海壽丸に仇を討たして呉れまだ海壽丸  
は若年の事の有るから打つ事も叶はざれば各々方が海壽丸に助  
勢をして此仇を討つて被下い……と言ひ終つて香海は呼吸を引  
取りました是れを聞いて弟子達は「甲何しろ海壽丸を此所へ呼  
んで篤と此事を申し聞かせるに致然う……」と海壽丸を呼ひま  
した海壽丸は呼ばれて此所へ参りましたが今年取つて十三才に  
相成ります小僧で人呼んで蛇の目小僧海壽丸と云ふ不思議な  
小僧で御座います眞眉見に蛇の目のやうなほくろがありまして  
背中には鱗のやうな形が三十六ありまして水中に這入つても水

水天宮利生記

を吹き又た水中に暫くの間は這入つて居るとも出来ると云ふ妙  
な子供ですが夫れへ立出でました海壽丸共が弟是れ此通り  
父上はか怪我をあされて遂々助からずして死なれましたが是れ  
は杉戸村の庄屋の方に居る杉本小六郎と云ふ者の仕業であれば  
杉本小六郎と云ふ者は貴方の爲めには親の敵さ私達には師匠の  
敵さで有れば是れから助勢をするから仇討ちをしなければなら  
んから……海成程御尤もには存するが……弟少しも早く  
仕度をあさい是れから私し達ちが後見とあつて復讐をさせます  
から海何と仰しやります夫れとやむ今から敵さを打ちに行  
のですか……夫れは御免を蒙らう弟夫れとやア貴方は父の仇  
を討ちたくないと仰しやるので有るか海私しは親の敵さと云  
へば敵さですが其杉本と云ふ御人こそ頼もしと思つて居ります  
から私しは敵さ討ちあせし云ふ事は好みません却つて欣ぶ位は  
で御坐いますから各々方は御随意になさいましと云ふから修験

水天宮利生記

者一同は飽れ却つて仕舞ひまして 弟是れ海壽丸何と仰しやる  
か貴方は現在の父上ではあるいか其父上は壇上より落ちて此様不  
最期を悦ぶと云ふのは夫は又何う云ふ次第で御坐りますか……  
斯く悪魔神を祈り集めて多くの人々を苦しめましたのは決つし  
て宜しくまいに違ひは有りませんが併し貴方の爲めには現在の  
親では御坐いませんか夫れも其に事云ふとは奇怪らん事  
御坐る海何……私に親の死な方が宜しう御坐います 弟夫れ  
は他う云ふ譯が有るので御坐るか……海それには深い至細が  
ある 弟然らば其至細と云ふのは……海如何にも聞かして上  
げやう……全体此吞海と云ふのは私の父とは申しますがさうで  
は御座いません 弟併しあるたは養子だと云ふとではあります  
から養子と云ふとであれば矢張り親としなければ成せん 海  
先づ鬼も角も私の親とはしてありましたが是れ却つて眞實の兩  
親の誓で御座いますヨ眞實の親たる此吞海が幸ひ魔神の爲めに

水天宮利生記

蹴落されて死んだと云ふのハ私は實に悦びます決して仇討ちを  
せよ云ふとは思ひも依りません 弟へエーそれは實に不思議だ  
……何うして然う云ふ次第で御座いますか逐一お話し下さいま  
し 海宜しい今日は幸ひの所だからかい摘んでお話し致しませ  
うと是より海壽丸が物語りを致しませす一体此海壽丸のお物語を  
申上げるに成ると餘り長くなりまして却つて御体屈になりま  
すから邑井一が地でお話しを致しませす此海壽丸と申す奇童は飛  
彈の高山に生れた者で御座います此悔々々六根生淨を釋丈を振立て  
者の子で御座いますソコで此悔々々六根生淨を釋丈を振立て  
振立て参りましたのが今此御寺院の別當にあつて居りまする法  
印吞海で御座いますそれ其法印は暫くの間近在を廻りまする  
にも何せ山中の御座いますから寐泊りする所にも困ると云  
ふ所から此獵夫久作の家を以て宿とするふとに相成りました其  
所に寝泊りをして諸方を修業して歩行きて居ります内何時し

水天宮利生記

か海壽丸の母と姦通をしたので御座いまする父は少しも氣が附  
きませんでしたが或日山嶺に出ましたがり歸りませんせうした  
とかど諸方を尋ねますると深い谷間に落ちて死に居りました仕  
方がないから涙ながら葬式も了りましてしたか何分にも是を殺  
した者は分りませんが先づ暫く此儘にして於いて此法印は矢張  
り兼泊りをして居ります法印と海壽の母とは樂んで居りました  
が法印の察物語りに對はお前と添へたく思つて山嶺に出た時夫  
を谷間に落とすとして殺したと云ふとを話したのを聞いて驚きまじ  
たがどうも今更仕方がないから其儘にして居りましたがさうな  
つて來ると何となく心細くあり香海を惡坊頭ども知らず悪い事  
だが斯うあるからには他に致し方がないからと云ふので手を執つて  
此所の所を逃げやうと云ふとに於つて海壽丸を連れて三人して  
出立致しました矢張り諸方を慘憺々々で歩いて居ります其内  
海壽の母は思い就きましたか平常より不實意の法印で御座います

水天宮利生記

すから遂々置きざりおして逃げて仕舞ひましたすると幼少の海  
壽丸はせうするふとも出来ません旅籠屋でもさうく金のさい  
ものを置く筈はありません仕方がないから母子二人は旅籠を出  
まして矢張り山中を何處とも當てなしに出掛けましたか愈々母  
は危急と云ふ場合になりまして海壽丸は只泣いて居るより母  
之れ海壽と云ふ名に己れは助からぬいお前は未だ知らないとか  
此所で聞おせるとかある己れの耻を明かして話すのだがお前の  
爲よお父さんとなつて居る彼の法印香海と云ふ人は決してお父  
さんでは御座いませんお前の爲には眞實の父の仇敵であるそれ  
は斯々云ふ譯であります夫の恨みであるから又法印香海も情けな  
たり死をするのも夫の恨みであるから又法印香海も情けな  
いがどうぞお前は大きくなつて法印に廻り遇つた時はお父さん  
と母の仇敵と云ふのを彼の法印を打つて下さいと言ひ残して此女は  
敢果てました此時海壽丸は僅か五七歳で御座いますと

水天宮利生記

も出来ませんが併し此處此所にも居られませんから是から矢張  
り諸方を歩行さまして幾らか宛の御慈悲を請けまして乞食に  
つて歩行さす段々廻り廻つて出雲の大社に参詣を致しまし  
たするど大社の社掌の池の周囲に多くの人が見付けて居り其  
池の中に多勢で舟に乗つて彼方此方と何か探して居るやうで  
ありますから其所へ海壽丸は來つて海を爺さん何だい……何  
が始つたんだい 若しは昨夜此大社の社務所へ盗賊が這入つて  
あいろくの物を取られたが其内入が見附けて追掛けるも其盜  
賊はどくも叶はんと思つたかして其盗んだ品物の内の寶劍丈け  
は此池の中へ投げ込んで逃げて仕舞つたのでそれで今氏子中が  
寄り集まつて此池の中を探して居る所だが……何うしても解ら  
ないのか 海へい……どうしても解らぬのかね……神主と云  
ふ人は何所に居るねい 老神主は彼所にお出でなさる 海へ  
……彼れが神主様かと其所へ海壽丸は來まして 海へ

水天宮利生記

あまたが神主様で御坐いますか 神何だ小僧……海此池の中  
へ盗賊が投げ込んだ劍を私が出して上げますからどうぞ御飯を  
頂かして下さいいな 神馬鹿などを申せ此池の中はどの位深い  
か知れやしない夫れに何うなるものか 海へい……私が飛込  
んで尋ねて上げます 神廢せ……と云ふ内に海壽丸は裸體に  
つてトブーン……と身を躍らして池の中へ飛込んで仕舞いまし  
た 神是は馬鹿などをする奴だ……アレ……と云ふ内に  
小僧は見ねるくありましたから 神アレ……小僧が……是はま  
ア飛んだとをしやアがつたまア寶劍より小僧を早く……と騒  
ぎますから舟に乗つて居る人にも彼方か此方かど小僧の沈んで  
居やうと云ふ所を探しますけれども中々分りません 甲あれ  
彼所へ池が立つて居る此邊だらう彼邊だらうと舟を廻はしなが  
ら探しますが何分にも分りません 乙是は仕方がない寄せば宜  
ひのに餘計なをしやアがつてと言つて居りますると海壽丸は



水天宮利生記

彼方此方を探して居るものと見なしまして、  
方へ浮いて出ます。西をうしたらう小僧は大方此池の主にも  
足を食はれてそれで主が泡を吹いて居るに違いない。甲さうだ  
らう其主が小僧を捕いて諸方を廻つて歩行くから泡が方々へ浮  
くのだらう。乙成程さうかも知れないと言ひながら、  
方此方を探して居りまするとヒヨクリ……と浮み上つた小僧手  
には蓮根の如き物を携へ順て岸へ泳ぎ就いて泥だらけの物を持  
つて上りました。海へエー……神主様是では御座いませんか御  
覽下さい。神イヤ是は妙だ……何だかさうやら寶劍のやうだと  
之れを能く洗い清めました所が成程寶劍に相違ありません。海  
それが寶劍で御座いますか。神如何にも小僧是が昨夜盗れた寶  
劍に相違ないと大きに悦びました。神さうも小僧能く探し出し  
て呉れた何しろ此方へと社務所へ運られました若物を呉れた  
り飯も澤山食はせ小遣も呉れましたが澤山は呉れません。神小

水天宮利生記

使ひは澤山遣ると宜くないから遣ら無いが又此邊に居る内は何  
時でも少し位の小遣はやるから来いと夫れくの賞美は當がつ  
てやりました。だから何程かの賞ひにあり悦びまして海壽丸は社を  
出て鳥居の所まで参ります。後ろから香ヲイ其所へ行くのは  
海壽丸ではないかと後ろから聲を掛けられました。だから振り返つ  
て見まするとこは如何に捨てられた所の父とした法印香海で  
さいます。それから如何にも母の遺言であつて眞實の両親の敵と思  
ふたが此所ではどうするとも出来ないと云う利口な子丈けに案  
振も見せず。海ヤア一お前は父さんだなど遂に引き出しまし  
たから。香ヲイ海壽丸であつたか其方をば諸方に尋ねて居つ  
たは……海私はお父さんを方々尋ねて居りました。お父さん  
は實に酷いぢやないか思つて居るお母さんと私を旅籠屋へ置き  
去りにして。香馬鹿おとを言へ置き去りにしたのでは無い諸方  
へ修業に出て居つて少し長くなつたから戻らなかつたのだか其

水天宮利生記

用が済むと直ぐ歸つて見た所が何處かへ立つたとき云ふ話したそ  
れ故乃公も修業しながら尋ねに歩行いたが少しも知れなかつた  
んだいお母さんはどうしたい 海どうした所ぢやないか母さん  
は死んで仕舞ひましたか仕方があるから私は一人乞食にあつて  
方々をお父さんを尋ねて歩行ひたのです 香マア何しろ此所で  
遇ふたのは大社様の御利益であらうか目出度かつたとき親子二人  
おがら悦びまして立歸りまする實は不實意ある香海法印で御さ  
いますから尋常の子供であれば知ん顔で行つて仕舞ふのでありま  
すが先刻も水中の働きで是は役に立つべき者だと考へたから斯  
く聲を掛けて何れへか連れて参りましたそれから廻り廻つて何  
れの所へ参りまして此海壽丸を遺つて水中の業をばさせまして  
は多くの財物おとせ得ました十分に懐中が暖かくありましたか  
らだんく廻り廻つて此辨天堂の別當所の明珠を買つて住込だ  
か海壽丸は十三歳に相成りましたが今迄いろくと思を受けて

水天宮利生記

見ますれば何分にも力を以て手向ひするとは出来まい併し打た  
なければ母の遺言に兩親に濟ますと申しましたら宜らうと實は海壽  
丸廻りで心配をして居た所然るに此惡魔神の爲に檀上より賊盜  
されたのは手を下さずして兩親の敵が打てたるとで私は誠に悦  
ぶ所で御座います決して敵討などをする所存は御座いませんと  
其大畧を物語りましたから是を聞いて居た修験者十四人は弟  
成程聞いて見れば尤もに存するが併しどうしたものか私達は私  
達丈で敵討をしおければならん海壽丸とても如何に兩親の仇と  
は言ひ是迄深き恩を受けたる者ではないか夫れに却つて欣ぶと  
は不都合だ吾々も同道位はして呉れても宜からうといろく  
る評議をして居ります其所へ隙子を掛けて立出でました一人の  
侍士何だか頭へ膏藥を張りまして白布を以て頭を締めまして立  
出でましたいきなり大聲を揚げて大アイヤ各々此小倅の  
偽りを信じて本統と思つてはなりません此小倅こそは不埒な者

水 天 宮 利 生 記

縦令如何なるとがあらうとも此法印の際期を見て却つて欣ぶど  
は何事であるか先づ各々は此小倅を打つて門出の血祭りとなし  
それより杉戸村へ押寄せり庄屋の方に泊つて居る杉本小六郎な  
る者を打取つて見事に御師匠の仇討をしてやらんければあらん  
私どもも長らく此所に世話にあつた恩等もあれば此處捨置く事  
には参らんと小野傳八は大聲に呼ばはりますから之れを聞いて  
た十四人の修験者弟如何にも小野傳八殿の申す所尤も至極先  
づは海毒丸を門出の血祭りと致さんと云ふと名々ばドーッ……  
と立上ります海毒丸は身を翻して一足出して逃げ行きますそ  
れ逃がして堪るものかど一同は後より追掛ける海岸近く参りま  
するの修験者十四人が後とから追掛けて参りますから海毒丸は  
海の中へドーッ……飛ひ込みました弟ヤア海へ飛込ん  
で仕舞つたが残念の事をした海毒丸が水中ではどても仕方があ  
い……暫くありまして向ふの海中へファイッ……と浮びまして海

水 天 宮 利 生 記

岸を見ましたが又もズーッ……と沈んで仕舞いました是では仕  
方がないと早速修験者十四人は立歸りまして小野傳八に此こと  
告げ是よりは少しも早く杉戸村へ押寄せん早く仕度をせよと一  
同は翻つて手早く仕度を整ひ杉戸村へと向ひます此方の杉本  
小六郎庄屋の方へ立歸つて小サテ庄屋殿明朝早く香海法印が  
来るのとのであるが果して香海法印が来れば好し若し来なけれ  
ば何か至細のある筈なれば又々何か致さんければならん庄  
ハイ誠に何かから何迄難有う存じます何分お心遣へを願ひますと  
いろく相談致して居りますと雨戸をこどく……と叩く者が  
あります海お頼み申します……お頼み申します若者ハイ何  
でがあす海此方に杉本小六郎様と云ふ方様お出が御座いま  
せうか小ア……杉本小六郎と云ふのは拙者であるか何用だ  
……海私は海毒丸と申す小僧で御座いますか私の父と相成  
つて居ります御寺院の香海法印は是迄悪魔神を祈り集めて諸

方の人々を苦しめて居りましたが昨夜あなた様に見破  
られ獲麻橙の上から逆様に蹴落されて死で仕舞いましたそれ故  
弟子どもも十四人は如何にも杉本小六郎ある者は師匠の仇だと言  
ひまして暫く御寺院に泊つて居りました一人の侍士小野傳八と  
云ふ者を首將として只今此所へ押掛けて参ります早く御準備  
を下さる方が宜しう御座います私には是でお暇申しますと其儘  
海壽丸は弱くなつて仕舞いました是を聞いた杉本小六郎小  
サテく憎くき修験者十四人師匠の悪事はさて置いて此方を敵  
とは何事ぞ好しく殺人来らうともたかが生奥坊頭めらつと袴  
の股立取り上げ大刀をスラリッ……と引抜いて雨戸を押開け中  
庭へど踊り出しサア！来い來れッ……と待受けた所へ修験者十四人  
かてゝ加へて小野傳八併せて十五人の者が躍込むと云ふ杉本小  
六郎の働きの一條で御座います一寸一息入れまして申上げると  
お致しまする

第十一席

サア庄屋は杉本小六郎の様子を見まして 庄ヤツく若い者早  
く仕度をして旦那様お御手傳い申せ兎も角も向ふは十四人お武  
家様此方は一人のとだから若しものごとがあつてはさうもあんね  
へから……小アイヤ決して左様も心配御無用縱令幾人参らう  
ども我一人にて追拂はん決して手出しは無用で御座る 甲「イヤ  
然うで無い旦那様アハ……大切な身だアから……私等ハア、  
相手にあつて旦那様に怪我をさせてはあらねへだ何か持て来て  
……乙「何を持てへ来るんだハア……是は何しべいやア……打  
棒が宜いや 丙「成程彼の打棒が宜からう……打棒を皆が持て  
い来て多勢に向ふ臆をおつばらつてやるだあ…… 甲「それが宜  
からうと言ひながら若者等は持つて参りますが此打棒と申しま  
するは地方で麥を打つくるり棒で御座います是を一々持ちまし  
て 若へし旦那様及ばずならぬ手傳へ申しやあす 小「アイア

水天宮利生記

決して前達手を借らずとも差支ない拙者一人で宜しいに依つて其方へ引込で居れ若し……何に宜がらす決して心配しな

水天宮利生記

く回はして打つて掛ましたですが修験者の頭をボカくくやせん第一傍へ寄附く事が出来ません遠くの方でボカくくや

水天宮利生記

た 若者私等ハア一始めて働らきましてお役お立ち何よりの悦  
みびで御座いますと互ひに喜び合ひまする修験者の方では改め  
て仇討をするよりも此事を上へ訴へてお上の御厄介になつて  
致した方が宜しからうと云ふ相談が纏まりまして其手續きに及び  
まする又其方の庄屋の方に於きまして此間中から近村五十四  
ヶ村に怪病の流行つたのも御寺院香海の所爲であつたと云ふを  
それから香海法院は杉本小六郎の爲に魔術を見破られ檀上より  
蹴落されて相果てましたが此敵討として修験者十四人が押寄せ  
來つた事迄逐一訴へに及びまする双方御呼出しに相成まして能  
々取調べますると素より悪魔を以て諸方の人々を苦しめた香海  
法印なれば其仇打ちあはしめての外ある事だと大いに叱りを  
受け又杉本小六郎はお構ひあはしと云ふ事の御沙汰に相成ります  
る依つて庄屋方に於きましては 庄若旦那様どうもお影様で此村  
の娘子供も安心して居る事が出来ます誠誠御苦勞千萬で御座

水天宮利生記

いましてた彼方此方へ招待されまして暫くは此近傍の村々を歩  
行いて居ります併し斯くてあるべきにあらざれば村々の人々  
には禮を申し一先づ此所を出立いたし尙ほ敵犬上軍兵衛の在家  
を尋ねんと是より廻り廻つて薩摩の國鹿兒島に就きました此所  
では豫て約束をしてありますから日高六郎の住所を尋ね面會  
を致しまして是れ迄の話も致しまして日高六郎委細を聞きま  
して 且何れにしろ失禮ながら尊公の腕前等を拜見したいと云  
ふので日高六郎の道場へ出まして或門弟の一人と立合せました  
且成程尊公の劍術と柔術等を拜見しましたが尊公の劍術は十分  
で御坐るが併しあから柔術の方は未熟にして犬上軍兵衛の柔術  
の方が最も得手であれば立合の節には必らず手本に随ひ入つて  
組打ちを致すま相違ない其節尊公其腕前では覺付かぬいよ依つ  
て暫く此所に逗留なさるが宜しい拙者及ばずながらお教へ申し  
んと云ふので大いに悦びまして杉本小六郎 小何分お願ひ申し

水 天 宮 利 生 記

ますとは是より敵犬上軍兵衛を尋ねる心は暫く措き柔術修業の一  
段で御坐いまする又柔術は密真流の達人と聞けたる日高六郎で  
御坐いまする

雨あられ雪や氷りと隔つれど  
落つれば同じたにがわの水

豫て出来て居りまする杉本小六郎で御坐いますれば日を重ぬる  
に従つて柔術はとんく上達致しまする併し道場で代替古をす  
る者がありまするが此方が未だ上手のやうで御坐います茲本日  
高六郎の娘にてると申しまして今年十七歳歳美麗でありま  
るが此娘が弟子共一同への取扱ひと杉本小六郎への取扱ひが同  
一のやうでないやうだと始終先生の留守の代替古をする奴等が  
申し合せまして甲「どうだい彼の杉本小六郎の奴は憎いじやア  
ないか家のお嬢様が何となく男振りの宜い所から杉本に最負を  
しやアがつて杉本が道場へ出ると何時でも彼の窓から覗いて見

水 天 宮 利 生 記

て居やアがるヨ今日は丁度先生も留守だから吾々あればどうで  
もある柔術を教へてやると言つて道場へ引出して一泡吹かして  
やろうぢやないか其泡を吹いて鼻をたらした所を見たら如何  
に可愛と思つても愛想が盡きるだらう杉本が道場へ出さすれ  
ば彼の窓から屹度見て居るに違いないから乙「成程先生の留守  
が幸ひだ一泡吹かして愛想を盡かしてやらうと申合せまして杉  
本を呼び甲「杉本氏如何で御座る今日は師匠が不在で御座るが  
尊公も中々此節は上達致したやうに存する依て今日は拙者が一  
ツお手合せ致したう御座る小「是はく申々以てお相手とは恐  
れ入ります併し今日は師匠も留守のことで御座いますれば一ツお  
教へを願ひませう乙「宜しう御座る然らば一つお教へ申すと云  
ふ譯には参らんがお相手申すとに致しませう小「どうが宜しう  
願ひますと手厚に仕度を致しまして甲「先づ拙者がお相手を致  
さう……サア十分にお出でなさいエーヤン……と暫くの間揉

水天宮利生記

合つて居りましたが如何にも向ふが一泡吹かしてやらうと云ふ  
積りでありますから堪りませんで……十分小六郎を  
ました 甲「サー」どうだ何程男が能くも此有様を見ちやあさん  
あ者でも愛想が盡きるだらう 乙「左様さなア……」一同が窓の  
方を見て笑いましたすると直に道場へ入来りましたのが日高の  
娘「てる顔で御座います 娘「あな方は父の留守中に杉本様にお  
教へ申すのは難有う御座います 娘「あな方は父の留守中に杉本様にお  
宜しく御座ひますまい 乙「イヤ……」是は「令嬢が被入まし  
たか……」私どもも決して斯様を酷いとをする量見では御座いま  
せんが此頃大分お手があがりなすつた杉本様遂に手がはずみま  
して 娘「假令手がはずんだに所が斯ふ云ふとをなされら  
は 何事でありませうと懐中より紙を取出して鼻を拭き水を持ち來  
つて之れを口移しよして飲せ後ろへ廻つて背を撫で死活の法を  
用います漸くにして心附きました小六郎 娘「杉本様心附きまし

水天宮利生記

て御座いまするか 小「是は」あてる様の御介抱千萬辱けのふ  
存じます 娘「どう致しましてお禮には及びません折々ありがち  
のどで御座いますから……併し彼方へ参つて御休息をおさる  
方が宜しう御座います 小「御一同千萬辱けなう存じますと杉本  
小六郎は道場を立出でました一同は此かての杉本を介抱する  
顔つきを見せしめて 甲「穴戸氏如何で御座る……」娘「此度は差代  
つて私がお相手と致しとう存じますと令嬢が這入て参りました  
乙「宜しう御座います是は面白く願ひませう 娘「十分に  
で下さい 乙「十分に……」左様で御座いますかと女と思つて決し  
て遠慮するやうなとはありませせん私「力ははずんで居りますか  
ら十分お参りますと大の男が突掛つて参りますけれども流石は  
師匠の令嬢で御座います 娘「宜しう御座いますと言ひながらエ  
イヤッ……」と暫らく揉合つて居りましたがおてるがエッ……  
と一聲穴戸……はドーン……と音がしたと思ふて丁度杉本がやら



水天宮利生記

れた所へ同じやうに泡を吹いて鼻をたらしめて倒れましたおて  
は之れを見てにつまり笑ひ一同を尻目に見やつた儘道場を立去  
りました外の門弟は是は大變だどうしたら宜からう 甲「死活の  
方を用ゐるが宜しい誰か知つて居るか 丙「誰も死活の法や何か  
は知つて居らん……何しろ介抱々々 丁「何しろ鼻血も拭いてや  
れい…… 丙「拙者は紙を持ん尊公もまいか仕方がないから此ぞ  
うきん……早く水を以て…… 丁「尊公口移しにしてやれ 丙「ど  
れ能しく……ヤア……穢ない口だあアどうも仕方がない漸々  
のとで口移しに水をやりましたが未だ氣が附きません！是は  
う仕方がないから灸が宜しい早う灸々々 甲「此穢ない大きな足だ  
から灸は大きく五ッ六ッ合せて……宜しい早く團扇で仰げど大  
騒ぎを致しますす稍々あつて心附きましたか 穴「アッ……  
どうしたので御座る 甲乙「イヤ……穴「氏心附いたか結構々々  
だ實は介抱したのが死活の法を知つて居る者がないから灸を据は

水天宮利生記

た所だそれが死活の法になつたのだ 穴「それは、千万辱けな  
いさては令嬢が口移しにして呉れたであらう 丙「水は拙者か  
口移しにしてやつた 穴「オヤ、お前かそれは穢ないなア……  
丙「穢い所か其方が穢あかつた 穴「何しろきんでもまいとをした  
と一同は道場を出ました是は素より日高六郎の知らざる所それ  
より半年程経ちましたもう杉本小六郎の腕前も十分とは言はれ  
ないが犬上軍兵衛も出會しても差支ないと思つて見ましたから或夜與  
の一間へ招きよして日高六郎は 且「サテ杉本氏か前の修業も先  
づ宜しからうと存する又斯う云ふとは際限のないとであります  
から心急も致さうに依て是より諸國を巡り廻つて犬上軍兵衛の  
在家を尋ねる方然るべきと存するそれに就いて小六郎から折入  
つて願ひ申したい義が御座る何卒御承知下さるやう…… 小「  
改たまりました師匠の仰せ……あなた仰せなれば何事ありと  
も決して背きは致しません 且「それは早速の御承知千萬辱けな

水天宮利生記

い他でもい御出立に際しまして是なる娘で御座るが何  
卒私のお願ひ妻女とお定めなさるやう願ひます此際婚姻の式  
を擧げて然して當所を御發足下さるやう……恐れ入つてお願ひ  
申す小是は……何事を仰せられますか他の用事あらば何なり  
と申すは是より出立を致す何れへ参りますか分りませんが敵軍  
兵術の在家を尋ね尋常の勝負を致し不遇戴天は父の仇敵と申し  
ますければ又何年尋ねて廻り會ふか分りませんが返し討ちに  
でもなるか又何年尋ねて廻り會ふか分りませんが返し討ちに  
つて勝負の上拙者が勝てば宜しう御座いますか返し討ちに  
あつた時に生進御り身でいおければありません依つて此とを  
つて後ち勝負に勝つた以上は必らず御相談の上令嬢と婚姻す  
とに致します依つて此義は平に御辞退申す日イヤ尊公の云ふ  
處如何も尤もに存するが併し只今申す通り勝負は時の運と

水天宮利生記

云ふとであれば若しも尊公が返り打ちにでもなるまいもので  
ないさういふ時には二の矢を拙者が繼ぐのである何故なれば犬  
上軍兵衛は拙者の爲には師匠の間柄であるして見れば只其儘で  
行つては軍兵衛に手向ふとが義理として出来なソコで只今の  
婚姻を御承知下されば印ち縁の親として敵打ちが出来ます即  
ち尊公が不幸にして返り打ちにでもあつた時に尊公のため又娘  
てるのために仇討として犬上軍兵衛を打取るとが出来ますそれ  
故に此所で御婚姻を願ひたいと存する能くお考へなされば是非  
も御承諾を願ひたう存する委細を聞て杉本小六郎 小如何に  
も御厚意千萬辱けなう存するが令嬢に氣の毒千萬……只今十八  
歳の盛り御年頃夫れを若し不幸にして私しが返り打ちにでも  
會ふ時は生涯身の上を防げると存じて御辞退申しました併し  
只今の御言葉に依りまして如何にも承知致しまして御座います  
且然らば御承知下さるか宜しい………てるは承知して居れば是よ

水天宮利生記

り直ぐと式の準備を致しまして思立つ日が吉日で御座れば今晚  
婚姻を致し明日御發足が宜しいとそれ準備に取掛りまして  
イヤ忙はしいくどんど盆と正月が一度に來たやうでも御座い  
ます直ぐに其晩婚姻を済まして翌日敵討出立と相成り途中迄  
は親子とも送り來りましてソコで日高六郎別れに望み日杉本  
氏注意するとあり他でもあいが諸國を廻はるに宿帳に杉本小六  
郎とお記しあるは宜しくないと存するさうかして軍兵衛が先ん  
じて知るまいものでもないから魯公は何とが偽名を致した方が  
宜しからうと存する小如何にも御尤もに存する一然らば日高  
と云ふ姓を取りまして日の高いのは即ち關東で御座いまするに  
依て是より姓を關東を致し名を小六と致しませう日成程宜し  
い……小然らばいろくの御厚意何とも謝する言葉は御座い  
ません……娘御身を御大切……に三人は立分れまする是よ  
り諸國を遍歴致しまして二代目犬上軍兵衛を尋ねまするが但馬

水天宮利生記

の國木の崎へ來掛りまして山中籠渡しに於て杉本小六郎大怪我  
を致すけれども水天宮様の御利益に依つて生命に別條がなかつ  
たと云ふ下りは次回に

第十一席

エ……杉本小六郎は但馬の國木の崎の山中へ差掛りましたが丁  
度彌生の中旬で御座いましたから天氣も宜し山櫻が彼方此方に  
咲立つて居ります當りの景色を見ながら石に腰を掛け喫煙を致  
して杉本は休息致して居りました其前に一人の老人が遠網を手  
に携はて立つて居ります杉本の六郎は是を見て小ハテは此爺  
何を致すのか斯様か山中で遠網を以て居るのは……と覗いて見  
たが小成程海がある併し何階とも知れざる谷の彼方よこ  
くど波の音が聞えて居るが彼んかに深くつては網を打つ譯に  
は參ますまいが……ハテ何をして居るのかと暫く此方を見て居  
りますとやがて此爺は懐中より小さな笛を取出しましてピ



水天宮利生記

はなに見なさいと此崖に張出した丸石や角石を何ともおく馳  
け歩行いて更に危険でないやうじや甍を見れば幾尋ともあき深  
い谷容易に危険で馳け歩くと出来ぬ定めし以前は律氣と  
した侍士か何かの身分に相違ない老どう致しやして決してそ  
んる者ぢやアありまぬい成程斯う出張つた丸石の上にも網を  
投げたり何かして飛で歩行きませう被仰のは無理も御座  
いませぬねいが全体之れをお話し申しやすと此天氣が宜くさいあ  
ればヒバリが集りて下りませうと云ふとにありませうが誠にも  
矢張り多勢の人々が集つて捕ると出来ませうから庄屋様がそれ  
場所を分けて渡しまして御覽おせいまし向ふの杭から此方の杭  
迄が私の持場で此間が年中小鳥を捕つて暮しを立て、居り  
やすので足の方で練れて仕舞つた一ツの練れで御座いやあす足  
の方が練れて仕舞つていやあすから身軀の方は些とも危いとは

水天宮利生記

思ひましぬい足の方が知つて居やして運んで参りやす是が矢張  
り危おい危おいと思つて居ては駄目ですがアすもう足の方で危な  
くないと思つてやすから大丈夫です 小成程老人……それで感  
服致した練れと云ふのが大切だな危くない大丈夫だと云ふの  
が一ツの練れである成程其話を聞いて拙者の爲めには大した力と  
なつた……一ツ修業が出来た 老何で御座います且那樣もハア  
……ヒバリお捕さるでがすかな 小……うして、拙者はヒバ  
リを捕る所の話してはなす少しの仔細があつて人と真剣……即  
ち人と切り合ひをせんければあらん身である其時の準備にある  
……老ヘエ……ヒバ리를捕るのは決して役に立ん……  
ますだあか 小「アイヤヒバ리를捕るのは決して役に立ん……  
併し其練れと云ふとである危くないと云ふ心持を以てやると云ふ  
のが拙者に於て深く感心したのである……先方から切て来る其  
刀を見てア、危いと云ふ心持ちにあるとそれが心掛りにあつて

水天宮利生記

不可い……此方を受けてやつて大丈夫だと氣を落附けてやれ  
ば心掛りにあらぬに實にお前の爲に大層拙者の利益にあるとを  
聞いた千萬辱けかう存する老何でがアすか私へは分りましね  
い小餘程面白もう少しヒバリを捕つて見せて呉れんか考  
ハイ未だ幾らでも捕りますでどうか御覽をすつて下せいましと  
笛を取りましてヒエー……と吹立てますとヒバリが集つ  
てヒエー……と下りて来ます直ぐ馳けて行つて綱を冠せます實  
に見事に捕れますから杉本小六郎稍々暫らく見て居りましたが  
小アイヤ老人大分捕れたやうだな老あなたが見てお出ませい  
ますから張合があつて能く捕れました小さうして老人此ヒバ  
リの一羽幾ら位の價にあるのか老是は時に依つて違ひますが  
まア今日らは間屋へ持つて行きますと百文に廿羽位少し遅くな  
りますと三十羽位にあります早ければ値が能く買れますが遅く  
なると間屋にも深山になつて来ますら五羽や八羽は安くあり

水天宮利生記

ます小ホー中々安いものだ兎に角其番籠にあるヒバリを賣  
つて買いたいと懐中より小判を一枚取り出しまして渡しました  
から老人は驚ろきまして老旦那様とんでもねいと被仰ります  
こん丈けのヒバリを捕るふは幾日掛るか知れまじねい小何羽  
でも宜しい拙者はお前の辨術を見たので十分である其番籠にあ  
るヒバリさい賣つて呉れば宜しい老是はく此様にお金を頂  
ださやしては誠に難有いふんで御座いやす左様なればヒバリの  
羽をむしりやして串へ刺しやして宿へ附きなされば直ぐに焼い  
て喰べられるやうに拵へて差上げますべい小アイヤ爺……！そ  
んあことばせんで宜しい其ヒバリを拙者に賣て呉れると極つた  
あらば其番籠の蓋を取て空へ逃がして呉れるが宜しい老エー  
ッ……夫れでは放鳥なさるんで御座いやすか……恐れ入つたも  
んでがアするさうも……お慈けあるとで……左様なれば此ヒバ  
リ逃がしやすべい……小さうさうして呉れる老有難う

水天宮生記

御座いやす……是々ヒバリお前達は本統に宜とにあつたぞ……  
此旦那様が此爺に澤山の金を下さつて生命を助けてやると云ふ  
みんだ實に難有いこんだに依て羽を延して宜いから何所へでも  
失せるが宜からうと春籠の蓋を放ちましたからヒバリは春籠の  
中へ入れられてせうにかして出やうと春籠を叩いて居つた  
位の所へ春籠の蓋が取れましたので御座いますからいさあり我  
先きに悦びあがら逃けて行つて仕舞います爺是には深く感  
心致しまして老アアッ……心も情静しやした……是を見ま  
する旦那様は若いのに斯う云ふ御慈を致して下せへやそが  
此爺は宜い年をして斯んな家業を致しては實に耻で御座りやす  
……ヒバリを捕つた時の心持と放した時の心持は丸で違ひやす  
全く背負た重荷を下したやうで御座りやすよ……さうか此爺も  
此小鳥を捕る家業は廢めたる御座りやす小アア老人それは  
尤もだが併し此業と云ふものは致し方がない随分世の中には遊

水天宮生記

獵などと言つて獵をして樂むおと云ふことがある位……此遊  
獵おとば最も宜しくあいとであるが家業としてやるのは致し方  
がない老ハイ……是迄のと今更何と言つても致し方は御座  
いましねへがもう私も考ひやしたよ小鳥を捕るとは今日に限  
りてハイ……廢めませす薪でも拾つて歸りやすべし小アア老  
人然らば一旦籠の鳥を放つ時は後が捕れんと云ふのかそれなれ  
ば悪かつた家業の防たげに相成つた……老アアエ……決して  
そんおとは御座りましねい今日一日は是ざりてがアすが明日は  
矢張り捕れるでがアすよ決して御遠慮には及びましねいそれ  
一体此山中の横みましても他に斯うと云ふ樂むとも御座いまし  
ねいで隣りど云ひましても中々離れて居りやすから此間も多勢  
が集まりやして何か一つ樂みみていと云ふので相談をいろくど  
しやした所が庄家様の言わつしやるには併借と云ふものをやつ  
たら宜からう尤も歌選と云ふ譯では御座いましねいがツブテ發

水 天 宮 利 生 記

句位の所でアしてそれを皆んながやつて見たら宜からう少し  
は遊べるふんだと言わつしやるのでアしてそれ宜からうと此  
程からツテ發句ていのを始ゆやした時々いろく各題が出や  
すが中には解らぬいとが澤山御座りやす先達のとて御座りやし  
たよぬくめ鳥と云ふ題が出やしたサア皆んなと相談しやした  
がさつ張り解りやしな今迄どうも聞いたとのねぬくめ鳥と  
うも解りやしぬい庄家様に聞いて見やしたのが矢張り解りましぬ  
い尤も此題は旦那寺の和尚様が出したので御座りやして仕方が  
ないから和尚様の所へ聞きに行きやしたすると旦那寺の御座  
が言ふのにそれは雀のこんだと言ふんでアすそんで先づぬく  
め鳥と云ふのは鷹が寒中になると身体が冷るソコで此小雀を捕  
まいて羽の間へ詰込みます身体をぬくめます何のこたアない  
鷹が小雀をこたつにするやうなもんで夜が明けると太陽様が出  
るから温かくなつて小雀を放つ又夜よあると捕いと云ふとに

水 天 宮 利 生 記

あるそれから小雀を放つて小雀が東の方へ飛んで行けば鷹は西  
の方へ飛ぶ又小雀が西へ飛んで行けば鷹は東の方へ飛んで行く  
と云ふのださうだがアすそれは何故さうするだアと聞きやすと  
一夜温められた恩がある夫で小雀が西の方へ飛んで行つて鷹も  
西の方へ飛んで行けば鷹は昨夜一夜を温めて呉れた小雀が見  
解が附かぬふていので成たけ捕いたくあいていので西へ飛べ  
東へ飛ぶ東へ飛べば西へ飛ぶと云ふこんでそれをぬくめ鳥と云  
ふ話し聞きやして皆んなが感心しやして成程鷹も諸鳥の司とか  
言いたが感心なるのだと聞いてきやした今私にそれを思ひ出し  
やすと旦那様に澤山の金を頂きやして見やすればヒバリを捕  
とハ出来やしぬい如何に稼業と申しましても今旦那様が放鳥し  
たのが此處へ集まつて下りて来ても其見解は付きましぬい其見  
解が附かなければ矢張りぬくめ鳥と同じで鷹にも劣ると云ふ事  
になりやす私のやうなもんで人間かと思やアそんなとは出来



水天宮利生記

ましねふで今日一日はヒヤリ取は廢めやすべいと是を聞いた  
杉本小六郎 小夫はそれは感心な心掛けだ併し左様な遊事は決  
して無益の遊ひでない庄屋の斯う云ふとに心附くと云ふのが感  
心仕つる……何しろ今日の所はお前の隨意にするが宜しい先づ  
お暇を申す 老ハイいろく 有難う存じやす……是から向ふへ  
参りやすには春籠渡しが御座りやすが其春籠渡守りの爺は居  
眠りして居やすべいから起してやんあせいやー 小アイヤいろ  
く 親切に辱けあいと互ひに別れまして尙ほ山深く参ります  
と成程春籠の渡がありまして春籠守りの爺は居眠りをして居ま  
すから彼の老人が言ふ通り何時でも居眠りをして居ると見ねる  
と思ひながら 小是々老人……と聲を掛けます 老ハイいろく  
……ヲヤ旦那様 小渡して呉れい 老旦那様は毎度お渡なさる  
が始めて、御座りやすと申々向ふまでは間が御座りやすし下は  
何丈ともなく深い谷で御座いますから先づ大小は下緒で柄巻を

水天宮利生記

きまして精走つては不可ましねいから成丈け下を見あいで空を  
向いて…… 小其様な指圖には及ばん拙者とても心得て居る早  
う渡して呉れい 老ハイいろく 申しましたは何ども申し譯御座い  
ましねいが併し間違ひでもあつては済みましねいか……中々恐  
ろしい所で御座いますから間違ひのないとも限りまじねからそれ  
故申上げましたで…… 小是々老人侍士として其位の事承知せ  
んで諸國を修業するものが出来るものかそれで宜しいから早う渡  
して呉れい 老ハイいろく 畏まりやしたと春籠守の老人は春籠の  
綱を解きまする杉本小六郎は引かれる儘に成程春籠守の心配す  
るも無理でわるい随分危険な渡しであると思ふがらッウー……  
ッウー……一本の綱の方で引かれ行きます下を見ますると幾  
尋ともなく深い谷女なせにはとても渡れまいと思ふ位ですだん  
々中央に参りますと丁度十四日の月が上つて参りまする實に  
何ども言ひあひ位宜い心持で空を見ながら春籠の綱をしつかり

水天宮利生記

と握つて居ります何だか春籠がコクリッ……とゆれる……  
成程春籠守の爺居眠りが弊と見えて矢張り春籠の綱を引きあが  
らもコクリッ……とやつて居るのだとだん／＼参りました今し  
も向ふの崖に附かうとする此方に待受けて居る一人の虚無僧天  
崖に手を掛け引かれて来る春籠を見て居りましたが杉本小六郎  
の顔を見て驚愕した様子……待たりや應と心附きまして手早に  
大刀抜き放ちスパリッ……と春籠の綱を切りましたから堪りま  
せん杉本小六郎はアッ……と云ふ間もあらばふそ幾尋ども知れ  
ざる谷間に落ちて仕舞いました此方の春籠守爺はフッ……と今  
迄引いて居た綱が緩みましたからヒヨッ……と目を開いて向ふ  
へ行つた春籠を見ましたがあいからズン……と谷を見下します  
と春籠は侍士と一緒に落ちて仕舞つて綱はプラーッ……と下つて  
居ます老ヒヤア……こいつは大變……春籠荒したく／＼だア  
と大變に呼ばりまして其處にありまします竹法螺をポポッ……

水天宮利生記

と吹き立てましたから彼方此方にヒバリを捕つて居りました人  
々は遠網を抱いた處此所へ駆けて参りまして 甲乙「ヤア……ふ  
で荒したア／＼だア……」 老先刻向ふの崖に立つて居た虚無僧  
に「おいねい……向ふへ逃げる虚無僧がふで荒したア……」と大騒  
ぎになりましたから向ふの崖でも多勢が寄集まつて参りました  
丙「丁何か……それ其所へ逃げて行く虚無僧だ……それふで荒  
しの虚無僧を捕つかまへろ 甲「それか……此奴が危ねいせ抜い  
て居やアがるから……」 乙「大丈夫だ是でやつつろ／＼と一人  
の奴が遠網を冠せまする練れて居るのですから刀位で切拂ふの  
は何とも思ひません一人がハツサリ……と遠網を冠せるソレッ  
……と言つて後とも／＼と幾ッともなく綱を冠せられましたか  
らどうする事も出来ません 甲乙「締めた／＼大丈夫だもう引き  
出して捕つかまいろ／＼」 乙「此奴がふお荒ししやアがつたか  
……と頭をボカ／＼……」 丁「廣せ／＼此所でぶんぶつたつて

水天宮利生記

仕方がぬいゝら何しろ庄屋様ア伺つて能く誰べさせた方が宜か  
んべいど一同は網を抱いて先きに立ち捕りました虚無僧を連れ  
て庄屋様へ参りまする是より庄家の調へに依つてさふ参ります  
か次回に詳しく申し上げます

第十三席

サア多勢の若者等はヒヤリを捕へる氣にあつて遠網を冠せて虚  
無僧を捕へまして庄家の方へ連れ來りまして 若エー……且那  
様へ申上げやすがふで荒しをした虚無僧を捕かまへて來やした  
庄ハアーさうか……太い奴だ此所へ連れて來い 若ハイー此奴  
でアアすと庄屋の前へ連れて參りました 庄是れはア……何  
だつてふおを荒した……虚無僧は痛くて堪へませんから虚  
是は……貴郎餘り是ぢやア痛くつて堪へません……申上げます  
が拙者は江戸表の者で尋常の侍士に相違御座いせんが斯く虚  
無僧と相成て當所へ罷り越ましたも武藝の師匠犬上軍兵衛と申

水天宮利生記

す者の仇敵を打ちたい爲で御座います其仇と申すは久留米の藩  
士で當時浪人を致して居る杉本小六郎と申しまして中々腕前は  
勝れて居るとは申しあがら私しは師匠軍兵衛の打たれましたと  
で御座いますから先頃筑前福岡の箱崎八幡の神前では出會致し  
尋常に手詰めの勝負を致したのが耻しなから拙者は御覽の通り横  
小髪に大怪我を受けまして既に生命も危い所に相成つたので師  
匠の仇敵はとても叶はんと存じ卑怯とは知りながら一時其處を  
引除きましたそれから療養を致しあがら諸國を歩行いて敵の者  
を尋ね出して何卒早く敵を打ちたいと心掛けて居りました然る  
にふお渡しを渡り來ります一人の侍士を能く見ますると敵  
の杉本小六郎に違相御座いせんされば此所で尋常の勝負が出  
來るかとは存じましたすが豫て箱崎八幡の神前に於て敗を取つた  
程の向ふは腕利でだに依つて矢張尋常では不可ない尙ほ又拙者  
か敗を取つては残念で御座いますから卑怯とは存じましたがふ

水天宮利生記

さから上り来らうとする所を一太刀やらうと致して其手が誤つて遂にふこの綱を切りました何とも申上げやうは御座いません……併し最早仇は彼の谷底へ落ちましたから生命はありませぬいが先づ是で拙者は敵を打つたも同じと此上は御上の處分を受けましてどうか宜しきやうに御願ひ申すと誠にやかに申しました併し是が都の人おれば只一人が申上げた丈けでは中々信じてないのです斯う云ふ山中の人丈けに嘘と言ふとも知りませぬ人の言ふとだから誠と存じまして庄ハアアさうで御座いやすかそれはどうも若い者が知らぬいでもんだい粗疎を致しやした……是々若い者どもねいとをしただア此方御師匠様の敵打ちおされるだアてそれで向ふからふこに乗つて来たのが敵の者でそれを一太刀やらうとして手がふこの綱に觸れて切つたんだ 若ハア一それぢやとんでもねい事しやしたよあんな様御免なさいまし……それとはどうも知らぬいこんで御座いや

水天宮利生記

すで……では何でがすね庄屋様此人を別に役所へ連れて行かぬいでも宜うがアすねへ 庄宜い所ぢやアねいお師匠様の敵討ちする者で容籠を切る積りではなかつたのが遂に手が觸れて粗疎をしたと云ふのぢや 若宜しう御座いますとさうかわなたはハア緩りと御療治でもして御身体が宜くありましてからお立おせいましと云はれて小野傳八は大いに悦び 小それには 千萬辱けなふ御座います……左様では御座いまするが何しろ斯う云ふとになりましては少しも早くお暇を致し江戸表に待てる師匠犬上軍兵衛に會つてお話しを致し敵討ちの成りたることを知らせ悦ばししたいと存じます故どうか是でお許しを願ひたい杖に携つても直ぐ様出立致しどう御座います 庄さうでがアすか……成程それもハア一御尤もでがアすよ……是々若い者此方は総ぎと被仰から竹を切つて進めるが宜しい杖にするだアから竹を二本切つて進げろよ手に隙る所は藪でも巻いて進るよ…… 若

水天宮利生記

ハ宜うがア一すと若い者等は二本の竹の杖を拵へて呉れまし  
たに依て虚無僧の小野傳八は一同に呉れも禮を述べ二本の  
竹の杖に携つて山道を立歸ります變つて此方は杉本小六郎番籠  
の切れた所から真逆様に谷へ落ちました此時心掛のよい者あら  
ば落ち就く迄に大概氣絶も致しませうし手も振れ足も振れま  
すから尙更はずみが出すが杉本小六郎は流石柔術に長て居ります  
から飛び下りる輕業師の如く少しも動かすして逆様に落ちて參  
ります……併し其儘で下迄落ちては石などがあつてそれに當る  
とそれ切りにあるので即座に身を止めて木の下で身を休め  
ても申しませうが崖に生へてある木の枝で身体が一ツ轉倒返つ  
たので中央の水の流れの所へ落ちました其所には落葉が澤山沈  
んで居つて朽葉となつて其上を水が流れて居りますとんど布團  
の上へ落ちたと同様でありましたけれども幾丈も高く高い所

水天宮利生記

から落ちたのでありますから一時は氣絶を致しました其途端に  
薪を拾つて居りましたのが前回にお話し致しましたヒバリ獵の  
爺 老ヤア一竹法螺が鳴る……ふと荒しと見えるがハテナ先刻  
慈け深い旦那様がよもや御怪我でもおされはしまいかしらん行  
つて見やうと谷傳へに來て見ますとふとはブラリ……と下つ  
て居ります其下に絶氣して居りますのが先刻の武家で御坐い  
ますから老人は驚いたの驚かふいのではありませぬ 老ヤア一  
……旦那様……旦那様……と叫んだが何分氣が附きませぬ  
是は困つたものだ左側に生へて居りました山藜を抜いて是を  
なけおしの齒で噛み砕いて水を含んで口移しに小六郎に呑ませ  
背筋を撫て 老旦那様……しつかりおさい若し旦那様……と呼  
びました漸く氣が附きました小六郎 小ヤア一是は是は粗疎を  
致して……御介抱は辱けかい 老ヤアお氣が附れやしたか……  
先刻の爺ですが分りやすか 小オ、お前は先刻ヒバリを取つ

水天宮利生記

て居た老人か 老アーそれが分りやすければもう大丈夫だがアす  
……とんでもない御災難でがーした全体此綱が切れる筈はねい  
のだがせうして切れたアか…… 小是は切れたのではない切  
つたのだが斯く幾丈も無き所から落ちて怪我も無く其方に助  
けられたも我毎日祈念をす水天宮の利益ならんか…… あり有り  
難や併し誰だか其人物は確とは存せんが一人の虚無僧が停んで  
居つたと存じたが其者がなした業に相違ない豫て話した通り私  
くしには父の敵と云ふのがある或は其奴が先じて斯様のとを致  
したのかも知れん鬼もあれ心附いた上からは少しも早く後を追  
掛け其虚無僧を捕いて吟味致さんければならん爺早く私くしを  
谷から上げて呉れい 老畏まりました…… 何しろ年を取りまし  
たで旦那様アせうするとも出来ましねへ…… 甲アお待ちせい今  
若い者を呼んで参りやすからと言つて居る所へ鼓形の谷道を下り  
て参りましたのが若い者二三人で御坐います 甲どうだい虚無

水天宮利生記

僧様はもう仇は死んだから大丈夫だつて悦んで歸つたがそれと  
もそんな悪い奴だから若しや途中で助つて居るかも知れぬい若  
し助つて居たらば皆んなで殺してやるべいや 乙さうともく  
と話ながら來ました二三人はヒョク……と此方を見まして 丙  
イヤア爺か何して居やあがる 甲是は何んだ甚藏お爺が……  
老イヤア…… 宜い所へ來た早く手をかして呉い 乙ハア……  
何で…… 其侍士をは殺すのか 老アア此所へ來て少し早く此  
旦那様を上げて呉れい 丙是を上げてせうし…… 何しろ此  
奴は悪い事しやアがつて犬上軍兵衛と云ふ者を殺したアそれ  
で虚無僧様が諸方を尋ねて歩行いた所が丁度向ふから渡つて來  
たのでふところから上ろうとする所を一太刀やらうとして遂綱を切  
つたのだが庄屋様の許しを受けて歸つた所だ其虚無僧様も敵を  
討つたのも同様だと悦んで行きなすつた未だ此所に生きて居る  
やうのこんだらば彼の虚無僧様を呼返へして殺させてやらう

水 天 宮 利 生 記

老、エー……さうでない、いんでも、いんと言はつしやる中々此且  
那様はそんなお方ぢやない己れにハア澤山金を下すつてヒハリ  
を放して下すつた慈け深い且那様だ……小アイヤ爺益々急が  
んければならぬに依つて早く私くしを上げて呉れい今の様子で  
犬上軍兵衛が此所爲をなしたに相違ないぞ犬上軍兵衛こそは私  
しの敵であるそれを取逃しては相成ん一体庄屋たるべきものが  
只だ本人の話しを聞いた丈けで事を定めると云ふ話はあるまい鬼  
に角双方の話しを聞いて能く取調べて見なければ分らん只だ虚  
無僧の言ふ處丈けを聞いて直ぐ許してやるとがあるものか……  
と何分聲も立ち兼ねる位でありませう爺御尤も様で……ワイ今  
且那様が被仰のを聞いたか若成程御尤も話したなア庄屋も  
片つ方のとばかり聞いてそれで定めると云ふのは宜しいよ〇  
一体庄家様が不出來過る話したア……甲何にしる庄屋様へ此  
とを話して見て……乙ハア……それぢや己れが行うと一人

水 天 宮 利 生 記

が駆け出して参ります庄屋は此話を聞きまして庄如何にも己  
れがへい生涯の誤りをしたよそれでは虚無僧の後とを追掛けて  
呼んで来るが宜からうとそれから七八人の若者は手分けをして  
立歸りました虚無僧の後とを追掛けて参ります一人の若者は  
氣が付きまして甲ワイ皆んが虚無僧を捕つかまいるのには  
遠網が宜いぞ遠網を抱いて行つた方が宜い全体其虚無僧が悪者  
だから逃げやうとするかも知れぬいぞ乙成程それが宜からう  
と皆あゝ各手に遠網を持って追掛けて参ります甲乙  
ヤア……虚無僧様ア……虚無僧の……小野傳八……と呼は  
りおがら追掛けて参ります小野傳八は漸くにして其場を逃れまして  
イッとして彼方の道へ差掛る後ろから多勢の若者等が遠網  
を持つて追掛けて参りますから南無三寶と小野傳八尚竹の二  
本杖に力を入れまして逃げやうと致しますが丙それッ逃げや  
うとするぞと多勢は寄つてたかつて傳八の足を拂いましたから

水天宮利生記

其所へ倒れる所を直ぐに捕いて再び庄屋の方へ運れて來ました  
此方では杉本小六郎を介抱して連れ來り庄屋に話しをして見ま  
するど如何に山中の者でも能く話しを聞いて見ると分りませ  
ら成程杉本小六郎は當時關東小六と名乗つて前々から諸國經  
を致し犬上軍兵衛の在家を尋ねて居る斯々と云ふと其他にも種  
々な書物等を見て分りました又傳八の方は少しも申立てるとが  
至極と思ふとが御座へませんから遂に庄屋も断然と杉本小六郎  
は父の敵を尋ねて諸國を經歷致し此所に參つた者と分りました  
から庄屋はハア一杉本様どうしたら宜うがアすのか 小然ら  
ば庄屋殿斯様にして下され拙者ども此身体では如何にもする  
とは出來んから依つてどうか暫く拙者の身体を癒し又彼れにも藥  
用等をさせて兩方か強壯にあつた所で彼れにも刀を許し拙者も刀  
を取つて尋常の勝負を致さうさうして彼れが運能く拙者を打ち  
ますれば決してお構いなしに逃がして下さい拙者又彼を打たら

水天宮利生記

ばそれ丈けで御座います 庄へ一有難いふんで御座やす……  
さういふとに致しやしようで御座いやすと二三日を過ぎました  
此切合があるると云ふとを近所の者が聞きましたから大變です諸  
がから懸念の者を呼集めて見せて頂きたい此様に有難いとは  
いと山中のとて御座いますから是れ幸ひの見物であるも其切合  
の當日を待つて居ります兩人は暫く醫者の手を假りまして藥用  
等も致しましたから身体も強壯になりましたして愈々場所の定めが  
定る木ノ崎の波打際か宜からう波の引け跡が此方のいく棧敷の  
やうにあつて居からと云ふので場所は愈々木ノ崎の波打ち際と  
定まりましたから諸方から當日に集まつた人々は皆な腰掛當成  
は瓢に酒を入れて持つて來た者さもありまして 甲有難いと  
んでがアすよ其劍の切合なんていのが見られるやうになつては  
と御言を云ふ奴もあれは運くあつては大變だからつて昨夜はろ  
く 眠ませんなどと云ふ者もありまして今かくと多勢は見





六郎はアラ無残や小野傳八を切て血刀をも扱きたる儘立上つたが矢張り小野傳八の死体諸共潮に引かれて沖の方へ持つて行かれて仕舞いしました併し見物人の居た所は一段高い所でありましたから助かりましたがさて此大潮に引かれて行つて仕舞つた杉本小六郎はとても生命の助るべき筈がありません夫れが水天宮様の御利益で御座いませうか不思議にも紀伊國和歌の浦へ漂ひ着き和歌山様の御厚意を受けまするといふ下りに相成りまするが一寸一息入れて言上致しませう

第十四席

サテ紀伊國和歌の浦に濱方奉行に錦戸茶右衛門と被仰る方か御座います此お方は陣中に用いる處の變名で御座いまして當時種々變名を付けましたが是れは一体本が戦争する時分に其陣中で變た名にして置いて人の聲で聞分ける云ふ所から候々ある變名を附けられましたもので御座います錦戸茶右衛門は代

水天宮利生記

々其姓名を隠かれますソコで錦戸茶右衛門は和歌の浦へ出張致されまして其所へ漂ひ着たる死体を御覽をされますと不思議にも根こぎの椿の枝に袖を結附けましてそれに引かれて共に流れ附いたもので御座いますから勿論論者が氣附けを呑まして介抱に及びます漸うにして心附いた様子錦戸茶右衛門は聲を揚げて錦戸茶右衛門東氏……小六殿……氣が附かれましたか 小「はい……ハイ……」 錦關東氏……小「はい……イヤもう確で御座いますと當りをキヨロく見廻ひしまして 小「是れは御介抱の段千萬辱けさう存する……して又當所は何れにして貴殿は如何あるか人で被在るか能くこそ拙者の姓名を御存じて御座る 錦「アイヤ……」此所は紀伊國和歌の浦で御座る……拙者は濱方奉行を勤めて居る錦戸茶右衛門と申す者此度村の者共よりの訴へに依り斯く出張致し御介抱を申した所其甲斐あつて誠に悦ばしい次第且の貴殿の御懐中物を改めました故一葉の名

水天宮利生記

水天宮利生記

刺に關東小六と記してあつたそれが貴殿の姓名と存じ御呼び申  
した次第であるが併し何故に斯る難儀を致したのであるかそれ  
を詳しく承まはりたいが先づ〱緩りと拙者の役所迄出を願  
ふ小御厚意千萬辱けあう存する錦それでは此御人を釣  
に乗せて役所まで運れ申して呉れと下役の人々に撥荷せまし  
て濱方奉行所へ連れて参りました此所で五六日と云ふものは何  
事もせずして醫者の介抱を受けて居りました大いに氣力も整ひ  
ましたから如何にも大切の身の上であると云ふふとを感じました  
から錦何しろ未だお傷所も宜しくないから緩りと御療治をな  
されまして御出立相成やうとのことで御座いましたが關東小六  
はどうしたものかボツ〱と身体へ一はいに腫物が出来ました  
是は何だぞ申しますると海中に長らく漂つて居りましたから魚  
の爲に食はれましたものであると醫者は申しました人間は魚を

水天宮利生記

食つて居りましたして随分魚に骨があつては不可ないなぞ、贅澤を  
言ひまするが畢竟大きな魚の爲には人間でも食はれます魚に食  
はれて仕舞へば敵討も何も出来ありませんが中には黒鯛を  
い云ふものは人間を好むと申しますから其時は土左衛門と云  
ります女はお土左でも申しますかそれを引揚げる時は多く黒  
鯛が集つて居ると云ふ話してあります併し又人間が海中で難儀  
をする時は龜が助けると云ふ話しても御座いますして見ますと  
浦島の子が龜の爲に龍宮に送つて行かれたと云ふのも大方船  
して海中に漂ふて居る所を龜が来て救つて外國へ連れて行つて  
仕舞つた暫く経つて立歸りました時に大分若くあつて参りまし  
たすると龍宮で玉手箱を一つ貰つて来たと申します其玉手箱を  
開けて見たらば急に白髪にあつたと云ふお話しが御座いますか  
關東小六は斯くする内に其傷所もそれ〱宜く癒はりましたか  
ら小御厚意千萬辱けなふ存する……拙者も心急ぎが致します

水 天 宮 利 生 記

に依て是でお暇を賜はりたい…… 錦併し御介抱申しましたは  
私くしでは御座らんから何れ主公に言上致し御指圖を受けると  
に致さう鬼も角も主公の御許しを待つて御出立然るべしと存す  
る錦戸茶右衛門は此次第を遂ふ主公へ言上致し主は是  
をお聞きに相成つて 主然らば至極結構なとではあるが先づ鬼  
もあれ關東が壯健に相成つたと云ふ顔を見たいと被仰られまし  
たから錦戸茶右衛門は小六を主公の前に連れ参り 茶如何に  
も此所へ連れまされたのが此度の小六と申すもので御座います何  
しろ海に長らく漂ふて居りました為に平服をそも切れ にな  
つて居りましたがいろくど手を盡して夫れく改めました此  
御人に於かれても深く和歌山公の御恩は忘れんと言ふ次第で御  
座います…… 錦戸茶右衛門が恐れながら言上致し主と申上  
げますから是を聞けて和歌山公 主ムーさうか苦しうまい面  
を上げい…… 小お許しで御座いますかと言ひながら關東小六

水 天 宮 利 生 記

は面を上げますと和歌山公には之れを三度打覗きまして小六は  
少しも其趣を飲させません之れを見て和歌山公 主ム、如何にも  
立派ある若者ぢや…… 小六近ふ寄れ…… 其方も傷所は全快  
致した但未だ氣力等は平常に復さんやうぢやが殊に敵に立合つ  
ても十分に働く事が出来まいやうで、其方の不利益だに依つて  
今日は幸ひ拙者の庭前に於て腕前を拜見致したいと存するが如  
何お思ふと申されました 小申上げます如何にも主公御尤も  
なる被仰是より尚ほ諸國を歩行いて敵を探すと云ふとでありま  
すれば其節の勇氣に最も宜からうと思ひますと錦戸茶右衛門  
が傍ら申し上げましたから 主然らば誰が立合へど被仰られ  
ましたが多勢の者は誰かくと申して居りまするけれども誰と  
ても私くしが出やうと決するものが御座いませぬ暫くして其所  
へ出ましたのか佐々木久次郎と申す者 久恐れながら願ひ上げ  
まするが今日の立合は拙者へ仰附けらるゝやう願ひたう存する